福　岡　市

飯倉（いいくら）C遺跡

―飯倉遺跡群C地区第１次調査―

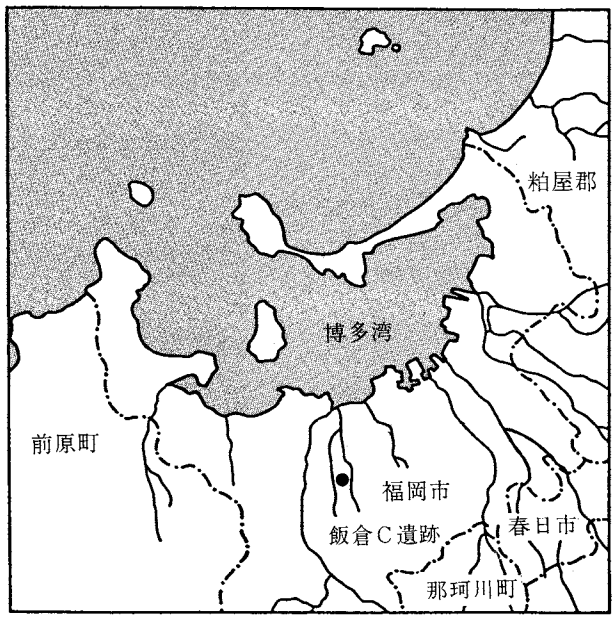
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第258集

1991

福岡市教育委員会

福　岡　市

飯倉Ｃ遺跡第１次調査



1991

福岡市教育委員会

序

福岡市の西南部に位置する飯倉・七隈地区は，油山から北へ延びる低丘陵上に位置し，近年，住宅地として発展が目ざましい地域です。飯倉C遺跡はこの飯倉・七隈地区の丘陵上にあります。

飯倉C遺跡周辺には縄文時代から古墳時代にかけての各時代の遺跡が存在し，特に古墳時代には京ノ隈古墳や神松寺古墳など早良平野では数少ない前方後方墳。前方後円墳があり，油山山麓を中心に古墳が集中する地域となっています。

今回この地区に民間の共同住宅が建設されることになり，調査を実施しました。調査の結果，弥生時代から奈良時代にかけての生活跡を発見しました。調査に際しましては，事業者及び地元の皆様，関係各位の皆様に多大なるご理解とご協力を頂き，多くの成果を得る事が出来ました。

本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり，また研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．本書は城南区七隈３丁目771―6地内における西一住宅の共同住宅建設に係る飯倉遺跡群Ｃ地区の第１次発掘調査の報告書である。

2．遺跡名は正式には福岡市文化財分布地図『西部Ｉ』による飯倉遺跡群Ｃ地区であるが、今後通称として飯倉Ｃ遺跡とする。

3．本調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課第２係山崎龍雄が担当した。

4．本調査の遺構の実測は担当者の他，黒田和生，英豪之，溝口武司，金子由利子，清原ユリ子，宮原邦江らが当り，写真は山崎が行った。遺構・遺物の整理・浄書は担当者の他，平川敬治，井上加代子，岡根なおみが当った。遺物写真は山崎，平川の撮影による。

5．本書に使用した方位はすべて磁北である。

6．遺構番号は連番としたが，ピットは独自で番号を付し，頭に遺構の性格を示す記号を付した。遺構記号はSA…柵，SB…掘立柱建物，SC…竪穴住居址，SD…溝状遺構，SE…井戸状遺構，SK…土坑，SR…土壙墓，SX…不明遺構，SP…ピットである。

7．本書に関わる記録類・遺物類は，全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて，収蔵保管される予定である。

8．本書の執筆編集は山崎が行なったが，平川の助言と協力を得た。

9．調査に係る要項は下表のとおりである。

遺跡調査番号	8937		遺跡略号	ＩＫ R-C	
調査地地籍	福岡市城南区七隈3丁目771-6他8筆地内		分布地図番号	(73)　茶山	
申請面積	4,106m²	調査対象面積	古墳1基＋3,200m²	調査実施面積	2,412m²
調査期間	1989年７月17日～10月18日		事前調査番号	61―２―184 63―２―342	

本　文　目　次

本文頁
第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……1
第２章　遺跡の位置と環境……2
　１．遺跡の位置と地理的環境……2
　２．周辺の遺跡……2
第３章　調査の記録……5
　１．調査の概要……5
　２．遺構と遺物……5
　３．飯倉６号墳の調査……49
　４．まとめ……51

挿　図　目　次

本文頁
Fig. 1　遺跡周辺の地形と遺跡（1/25,000）……3
Fig. 2　調査区周辺の地形（1/4,000）……4
Fig. 3　調査区の地形とグリッグ配置図（1/1,000）……6
Fig. 4　Ⅰ区調査区南東壁土層及びⅡ区東壁土層……7
Fig. 5　SC41と出土遺物（1/60・1/3）……8
Fig. 6　SB34（1/60）……10
Fig. 7　SB34周溝出土遺物（1/3）……11
Fig. 8　SB47・58・59・60・62（1/100）……13
Fig. 9　各建物出土遺物（1/3）……14
Fig. 10　SB64～69（1/100）……15
Fig. 11　SB70～72・SA73（1/100）……16
Fig. 12　SD01・02土層図（1/40）……17
Fig. 13　SD01・02出土遺物（1/3）……18
Fig. 14　SD03（1/60・1/40）……折込み

Fig. 15　SD03出土遺物１（1/3）……20
Fig. 16　SD03出土遺物２（1/3）……21
Fig. 17　SD03出土遺物３（1/3）……22
Fig. 18　SD03出土遺物４（1/3）……23
Fig. 19　SD03出土遺物５（1/3・1/1）……25
Fig. 20　SD19・23・32土層（1/40）……26
Fig. 21　各溝出土遺物（1/3）……27
Fig. 22　SE05・07・61（1/40）……29
Fig. 23　SE07出土遺物（1/3）……30
Fig. 24　SK09・44（1/30）……31
Fig. 25　SK09出土遺物（1/3）……32
Fig. 26　SK44出土遺物（1/3）……33
Fig. 27　SK45・50（1/30）……33
Fig. 28　SK11・18・20（1/40）……36
Fig. 29　SK33・35～38（1/40）……36
Fig. 30　各土坑出土遺跡（1/3）……38
Fig. 31　SK40・45・50・52（1/40）……39
Fig. 32　SK51出土遺物（1/3）……40
Fig. 33　各遺構出土石器・鉄器（1/3・2/3・1/3）……41
Fig. 34　SP100・262（1/30）……42
Fig. 35　SP100・262出土遺物（1/3）……42
Fig. 36　ピット出土遺物Ⅰ（1/3）……43
Fig. 37　ピット出土遺物Ⅱ（2/3・1/2・1/3）……44
Fig. 38　包含層・遺構面出土遺物Ⅰ（1/3）……46
Fig. 39　包含層・遺構面出土遺物Ⅱ（1/3）……47
Fig. 40　出土遺物Ⅰ（1/3）……48
Fig. 41　６号墳現況図（1/100）……49
Fig. 42　出土遺物Ⅱ（2/3・1/3）……48
Fig. 43　SX74墳丘土層図（1/50）……50
Fig. 44　SX74石組実測図（1/40）……折込み

図　版　目　次

図版 1　(1)　調査区全景（北西から）
　　(2)　調査区東側及び SD01・02（西から）
図版 2　(1)　調査区南東側（北から）
　　(2)　調査区西側（西から）
図版 3　(1)　調査区南東隅土層（北から）
　　(2)　SC41（南から）
図版 4　(1)　SB34（南東から）
　　(2)　SB48（南から）
　　(3)　SB59（南から）
図版 5　(1)　SB60（北から）
　　(2)　SB62（北から）
　　(3)　SB69（南東から）
　　(4)　SD01・02 2 号ベルト土層（東から）
図版 6　(1)　SD03（北から）
　　(2)　SD03土層（西から）
　　(3)　SD03遺物出土状況（南から）
図版 7　(1)　SD08（東から）
　　(2)　SD10（北東から）
　　(3)　SD19（北西から）
　　(4)　SD43（北西から）
図版 8　(1)　SD21（西から）
　　(2)　SD32（西から）
　　(3)　SD23（北西から）
　　(4)　SD23北西壁土層（南東から）
図版 9　(1)　SR09（西から）
　　(2)　同遺物出土状況（北から）
　　(3)　SR44（北東から）
　　(4)　焼土坑 SK45（東から）
図版10　(1)　焼土坑　SK50（北から）
　　(2)　SE05（南西から）

(3) SE07（東から）
(4) SE11（北東から）
図版11 (1) SK11（南東から）
(2) SK18（　　から）
(3) SK17（南東から）
(4) SK20（北東から）
図版12 (1) SK33（東から）
(2) 同遺物出土状況（北東から）
(3) SK38（南西から）
(4) SK40（南東から）
図版13 (1) SK51（西から）
(2) SP100遺物出土状況
(3) SP183遺物出土状況
(4) SP262遺物出土状況
図版14 (1) 飯倉６号墳調査前全景（南から）
(2) 同墳丘除去後（北東から）
図版15 (1) 入口部（南から）
(2) 盛土堆積状況
(3) 石組全景（東から）
(4) 天井石除去後
図版16 出土遺物Ⅰ
図版17 出土遺物Ⅱ
図版18 出土遺物Ⅲ
図版19 出土遺物Ⅳ

表　目　次

本文頁

表１　掘立柱建物一覧表……11
表２　土坑一覧表……37

付　図　目　次

付図１　調査区遺構全体図（1/200）

第1章　は　じ　め　に

１．調査に至る経過

本調査区のある飯倉丘陵は福岡大学の移転や今宿バイパスの開通と共に開発が進み，山林は切り開かれ，市街地化が著しい地域である。本調査区も開発前迄は当地域では残り少ない貴重な緑地帯であった。

昭和61年埋蔵文化財課に福市教埋61―２―184で本地域に共同住宅建設の開発申請が提出された。これを受けて事前試掘調査を行ない，埋蔵文化財の包蔵を確認した。本課としては現状保存を前提に申請者と協議を行なったが，申請者の開発計画は避けられないところであり，本課としては最低限の記録保存を行なうという事で，発掘調査を実施した。発掘調査・整理作業の費用は原因者の負担により，調査を実施した。発掘調査は平成元年７月17日から10月18日迄，整理作業は平成２年度に行なった。

２．調　査　体　制

調査委託　西一住宅　斉藤良一

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　福岡市教育委員会埋蔵文化財課長　柳田純孝，同課第２係長　柳沢一男

調査担当　庶務担当　第１係　安部徹（平成元年度）中山昭則（平成２年度）
調査担当　第２係　山崎龍雄

調査補助　黒田和生，英豪之，溝口武司

整理補助　平川敬二，井上加代子

調査作業　神尾順次，高浜謙一，瀬戸啓治，三浦義隆，百武義隆，吉村哲美，有富溢子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，佐藤テル子，柴田勝子，柴田常人，庄野崎ヒデ子，高田マサエ，徳永ノブヨ，舎川ハルエ，土斐崎初栄，西尾タツヨ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾キミ子，松尾鈴子，宮原邦江，門司弘子，山田サヨ子，吉岡田鶴子，萬スミヨ，原田圭助（九州大学），荒谷義樹（福岡大学）

整理作業　池田礼子，井上マツミ，内尾トミ子，岡根なおみ，小金丸わかば，中原尚美，長橋厚子，松下節子，吉田祝子

なお調査にあたっては，申請者の西一住宅斉藤良一氏，施工業者の柿原組山下堅固氏，埋蔵文化財課の加藤良彦氏及び地元の方々から多大な協力を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

第２章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と地理的環境

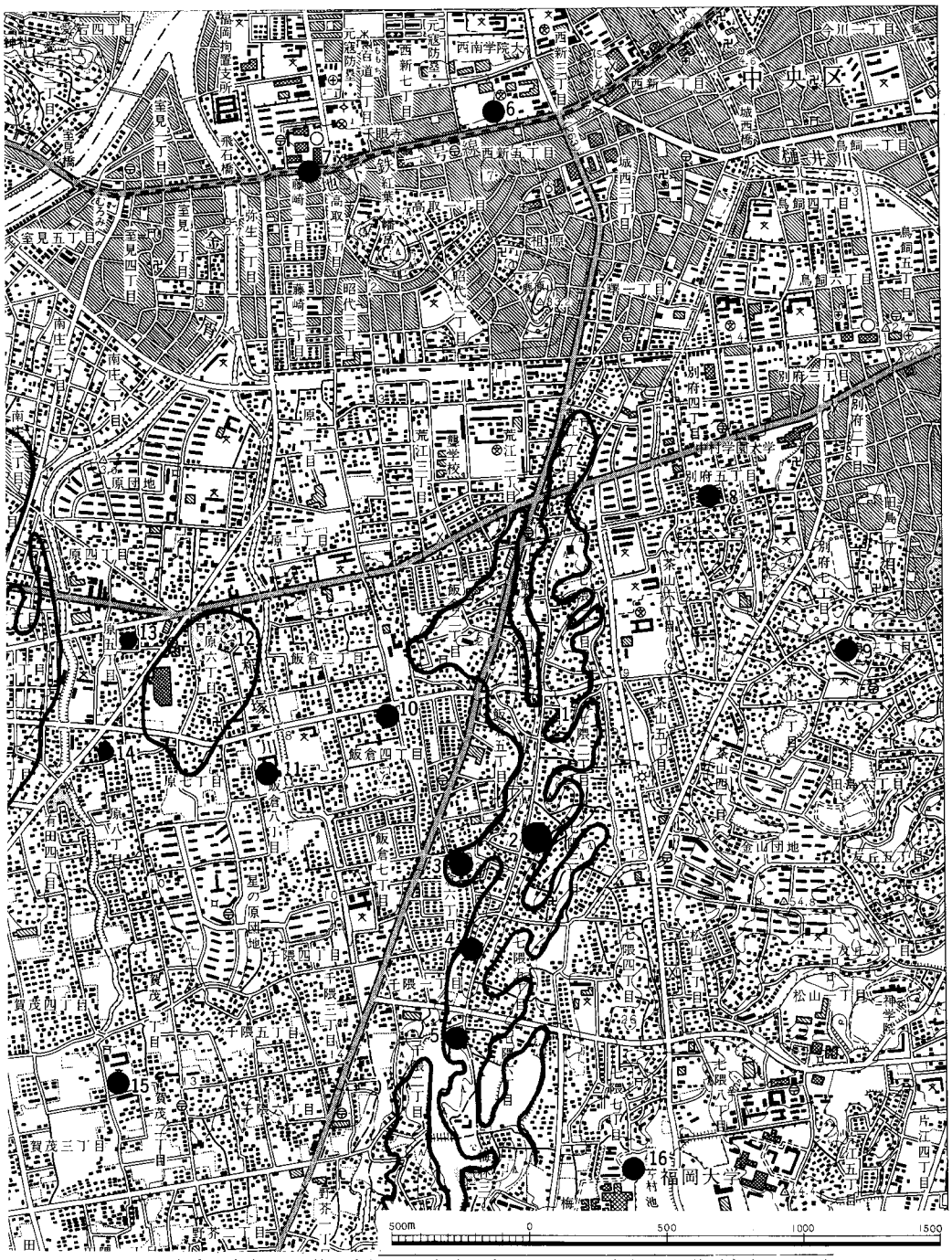
福岡市の西南部に位置する早良平野は，博多湾の左転回流により形成された海岸砂丘部と，室見川水系によって形成された沖積部で構成され，西側を長垂丘陵，東側を油山山塊より派生する鴻ノ巣山を中心とした低丘陵で限定される狭小な平野で，東西約10km，南北約17kmを測る。飯倉Ｃ遺跡の位置する飯倉・干隈丘陵はこの平野の東縁部，油山山塊より北へ狭小な谷部を形成して，細長く延びる低丘陵群の一番西側の丘陵である。この丘陵は標高30～10m と北へ高さを次第に減じて行く。既に市街化が進み，往時の面影はない。

飯倉Ｃ遺跡は丘陵部全体に分布する飯倉遺跡群の一つである。遺跡の所在地は福岡市城南区七隈３丁目771―6他で，国土地理院発行の地形図福岡市西南部二万五千分の一の地図では北東隈から南へ12cm，西へ６cmの交点に当たる。

２．周辺の遺跡

飯倉Ｃ遺跡の所在する七隈・飯倉地区は近年，住宅地または文教地区として発展し，変貌のスピードの速さには目を見張るところである。この地区は古代では『倭名類聚抄』にいう早良郡の毗伊郷，中世では野芥庄の七隈郷として，近世には早良郡の鳥飼触の七隈村として，近代は早良郡の原村の一部としてあり，昭和４年に福岡市に合併し，現在に至っている。

当地区の周辺には旧石器時代から，丘陵台地部を中心に各時代の遺跡が点在している。(註1) 旧石器時代では，カルメル修道院遺跡で尖頭器(註2)が発見されている。縄文時代では五ヶ村遺跡や箱ノ池遺跡，笹栗遺跡などがあり，五ヶ村遺跡では縄文時代前期の曽畑式土器片や石器類が採集されている。弥生時代に入ると遺跡数は急激に増加し，地区の東側では田島尾子森遺跡，浄泉寺遺跡，カルメル修道院遺跡，別府遺跡(註3)などがあり，カルメル修道院遺跡では前期の土壙墓から銅釧(註4)３個が出土している。また西側には飯倉原遺跡(註5)や飯倉遺跡(註6)，鶴町遺跡(註7)などがあり，飯倉原遺跡では前期の甕棺墓より細形銅剣(註8)が出土している。古墳時代は丘陵の各尾根に古墳が散在し，前期では前方後方墳の京ノ隈古墳(註9)，後期では前方後円墳の神松寺御陵古墳(註10)，梅林古墳(註11)や油山山麓を中心に七隈・片江・倉瀬戸・大谷・早苗田古墳群(註12)などの群集墳がある。また集落址は神松寺遺跡や片江辻遺跡(註13)などで検出されている。律令期の遺跡は確認されていないが，調査地の北側を日野尚志氏による西海道推定線(註14)が通っている。中世では西側の原遺跡(註15)や田村遺跡(註16)など沖積地で検出され，生活基盤の中心が次第に沖積地に移行していった事が推察出来る。



1．飯倉C遺跡　2．第1地点　3．飯倉原遺跡　4．干隈遺跡　5．熊添古墳　6．西新町遺跡　7．藤崎遺跡　8．別府遺跡　9．田島尾子森遺跡　10．飯倉遺跡　11．原深町遺跡　12．原遺跡群　13．原遺跡群第11次地点　14．原遺跡群第9次地点　15．鶴町遺跡　16．五ヶ村池遺跡

Fig. 1　遺跡周辺の地形と遺跡(1/25000)

1．飯倉遺跡群Ｃ地区

2．飯倉古墳群６号墳

3．飯倉原遺跡

4．飯倉古墳群４号墳

5．飯倉古墳群５号墳(消滅)

6．飯倉古墳群７号墳(消滅)

Fig. 2　調査区周辺の地形(1/4000)

第3章　調 査 の 記 録

1．調査の概要(Fig. 3，図版1～3)

調査地は東から浅い谷が入り込む斜面上に位置し，現標高は16～22m，比高差は6 mを測る。北西側高所部は地形改変を受け削平が著しい。調査は立木の伐開後，7月17日の重機による表土除去作業から始めた。調査区は事前調査の結果に基づいて設定し，区割はほぼ磁北を基準とし，北西側に任意の原点を設定し，東方向，南方向に10m単位のグリッドを設定した。遺構面迄の堆積土は北側が表土のみで比較的薄く，一段段落ちした南東低地部は深さ1.3mと深く，暗褐色～黒褐色土の遺物包含層が厚さ20～50cm程堆積する。遺構面は北側が赤褐色粘土及び花崗岩バイラン土，南側が明褐色粘土となる。遺構は北側高所部が削平によって比較的薄く残りも悪い。西側高所部は，木の根跡と思われるピットが多く，柱穴らしきものは少ない。南東低地部は遺構の残りは良好で，建物としてまとめ得た柱穴も多い。検出した遺構は，竪穴住居址1棟，掘立柱建物15棟，溝16条，土壙墓2基，焼土坑2基，土坑30基，井戸3基，ピット多数である。出土遺物はそれ程多くなく，全体でコンテナ20箱，弥生時代から近代迄の多様な遺物を含む。なお分布地図で飯倉6号墳としていたものは，調査の結果近代の石組遺構であることが判明した。

2．遺構と遺物

竪穴住居址

確実なのは1棟のみである。

SC41（Fig. 5，図版3）

調査区北西側下4区で検出した。平面形状は方形で，南西隅を段落ちで欠失する。規模は長辺3.72m，短辺3.70m，残存壁高は最大で46cmを測る。主柱穴は4本で，直径28～36cm，深さ14～20cmを測り，形状は円形である。主柱間の距離は東西が1.65m，南北が1.50mを測る。埋土は黒褐色粘質土，床面基盤は花崗岩バイラン土で，ややしまっていた。周壁下には幅25～40cm，深さ10cm前後の溝があり，全周すると思われる。床面に明確な炉址は認められなかったが，西壁沿に径40cm位の不定形の焼土面らしきものがあった。住居址とは直接関係ないかもしれないが，北壁中央上端周辺で，焼土面があった。

出土遺物（Fig. 5，図版16）　量は少なく，土器片が少量出土している。大半が弥生時代の土器と思われる。図化出来るものは少なく，3点しかない。いずれも弥生土器であるが，当住

2．遺構と遺物

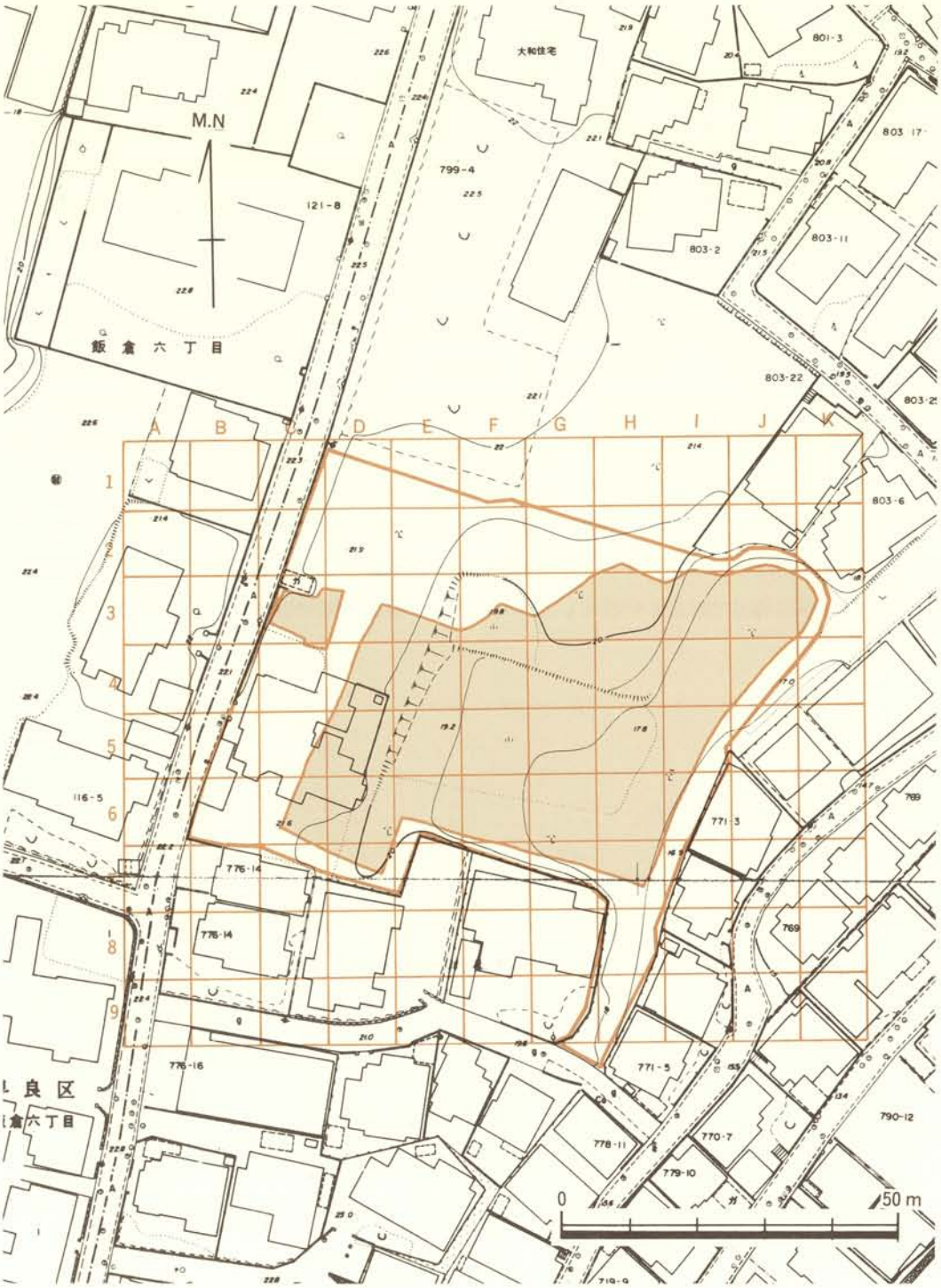
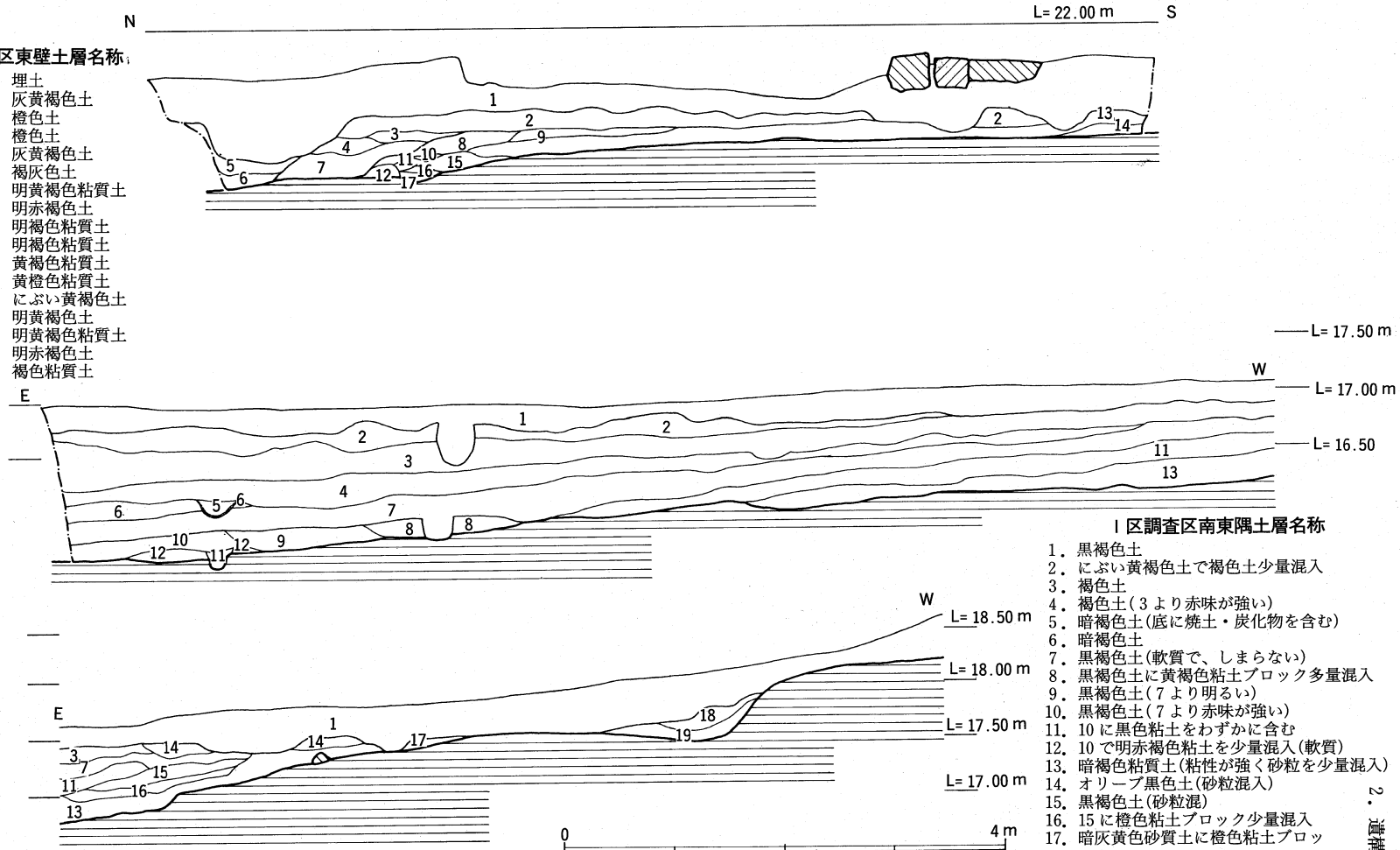


Fig. 3　調査区の地形とグリッド配置図(1/1000)



II区東壁土層名称

1．埋土
2．灰黄褐色土
3．橙色土
4．橙色土
5．灰黄褐色土
6．褐灰色土
7．明黄褐色粘質土
8．明赤褐色土
9．明褐色粘質土
10．明褐色粘質土
11．黄褐色粘質土
12．黄橙色粘質土
13．にぶい黄褐色土
14．明黄褐色土
15．明黄褐色粘質土
16．明赤褐色土
17．褐色粘質土

I区調査区南東隅土層名称

1．黒褐色土
2．にぶい黄褐色土で褐色土少量混入
3．褐色土
4．褐色土(3より赤味が強い)
5．暗褐色土(底に焼土・炭化物を含む)
6．暗褐色土
7．黒褐色土(軟質で、しまらない)
8．黒褐色土に黄褐色粘土ブロック多量混入
9．黒褐色土(7より明るい)
10．黒褐色土(7より赤味が強い)
11．10に黒色粘土をわずかに含む
12．10で明赤褐色粘土を少量混入(軟質)
13．暗褐色粘質土(粘性が強く砂粒を少量混入)
14．オリーブ黒色土(砂粒混入)
15．黒褐色土(砂粒混)
16．15に橙色粘土ブロック少量混入
17．暗灰黄色砂質土に橙色粘土ブロック少量混入
18．にぶい黄褐色粘土
19．灰黄褐色粘質土

Fig. 4　I区調査区南東壁土層及びII区東壁土層(1/60)

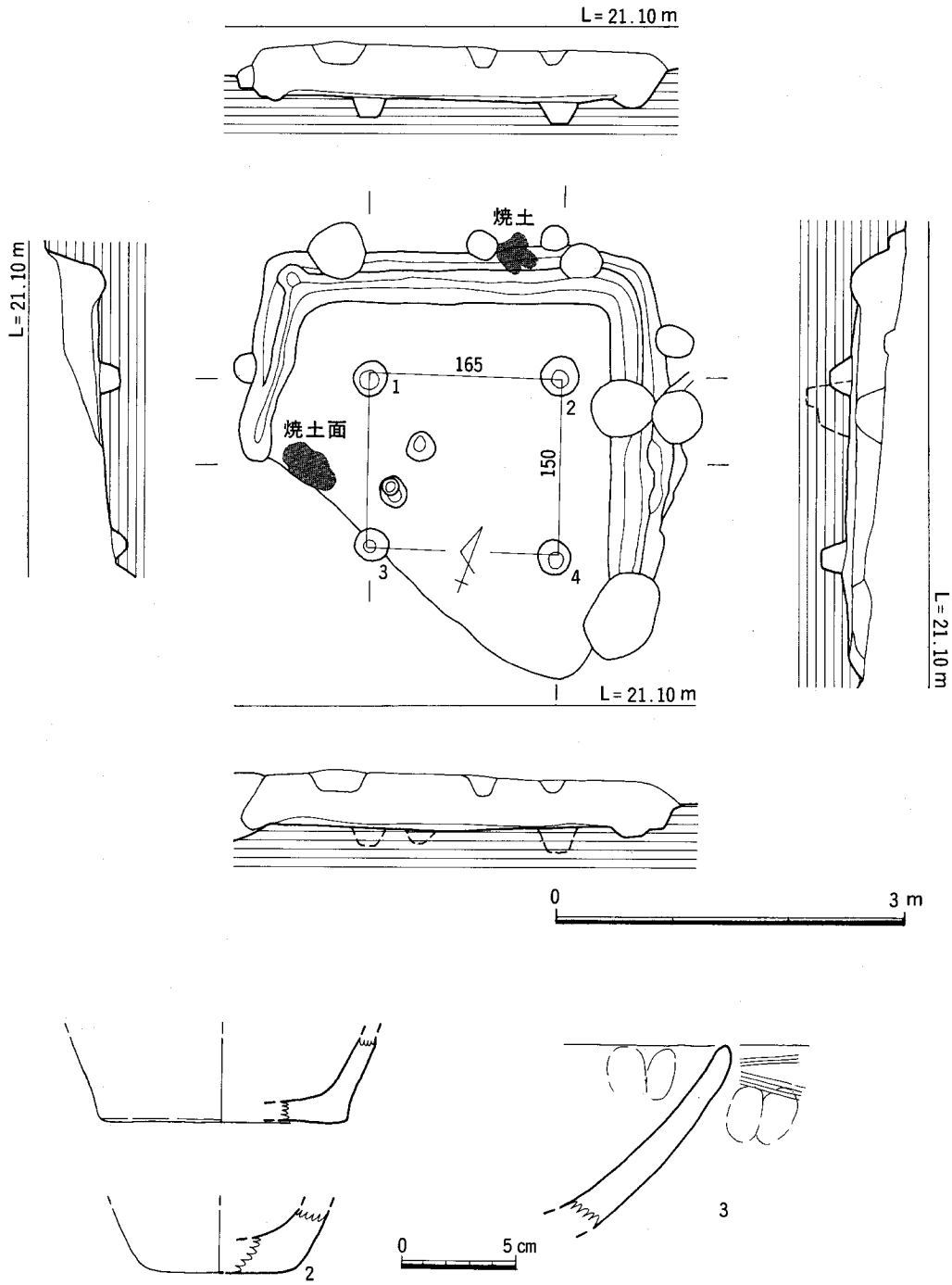


Fig. 5　SC-41 と出土遺物(1/60・1/3)

居址の形態は古墳時代後期から奈良時代にかけての住居址の形態に近いので，図示している遺物が必ずしも遺構の年代に伴うものでないかもしれない。

1は甕形土器の底部片である。全体に磨滅がひどく，調整は不明。2は底が丸く，1よりは新しい段階であろう。3はやや大型の鉢型土器の口縁部小片である。内面に指ナデ調整痕が残る。色調は1・2が浅黄橙色，3がにぶい橙色である。

掘立柱建物

北東高所部，低地部西側にかけて図上復元も含め15棟検出した。1×1間，1×2間，1×2間の比較的小規模で，柱筋の通らないものが多い。

SB34（Fig. 6．図版4）

G 3・4区で検出した主軸をN—18°30′—Wに取る1×2間の建物である。梁間全長3.60m，桁行全長4.05mを測る。柱穴は形状が円形，直径は35～50cm位，深さは同一のレベルで揃っている。建物の北側に馬蹄形状の幅20～100cm，最大深20cmを測る埋土が褐色粘質土の浅い溝があり，この建物を取りまく周溝になるのかもしれない。溝床面はかなり凹凸がある。溝迄入れると規模は東西7.70m，南北は6.05m以上となる。遺構面が南側に傾斜して行くため，南側は溝が削平された可能性がある。黒褐色または暗褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 7，図版16）　北側周溝から弥生土器や土師器，須恵器の細片が50点余り出土している。大半が弥生土器で，須恵器は2点のみである。図示出来るものを示す。

4は鉢型土器と思われる。器壁は内傾気味に立上り，口縁部は水平に外折する。復元口径13.2cm，色調は明褐色，胎土は砂粒を多く含む。あまり類例を見ない器形である。5は甕形土器で，く字状に外反する口縁部片である。色調はにぶい橙色，胎土は砂粒を多く含む。6・7は甕形土器の底部片で，色調はいずれも浅黄橙色，胎土は砂粒を多く含む。

SB47（Fig. 8）

東西方向に長い主軸をN—83°—Wに取る1×1間の建物である。梁間全長1.95m，桁行全長2.40を測る。柱穴の形状は略円形，径は30～50cmと比較的大きく，深さはP 1が特に深い。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物　P 1・4から土師器の細片が4点出土。細片で図示出来ない。

SB48（Fig. 8，図版4）

E 5区で検出した主軸をN—8°—Eに取る2×2間の建物である。梁間全長2.40m，桁行全長2.70mを測る。柱穴の形状は円形で，径は20～45cm，深さは東側が深くしっかりしている。柱筋は東側P 1・2が少し外へずれる。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。出土遺物はなかった。

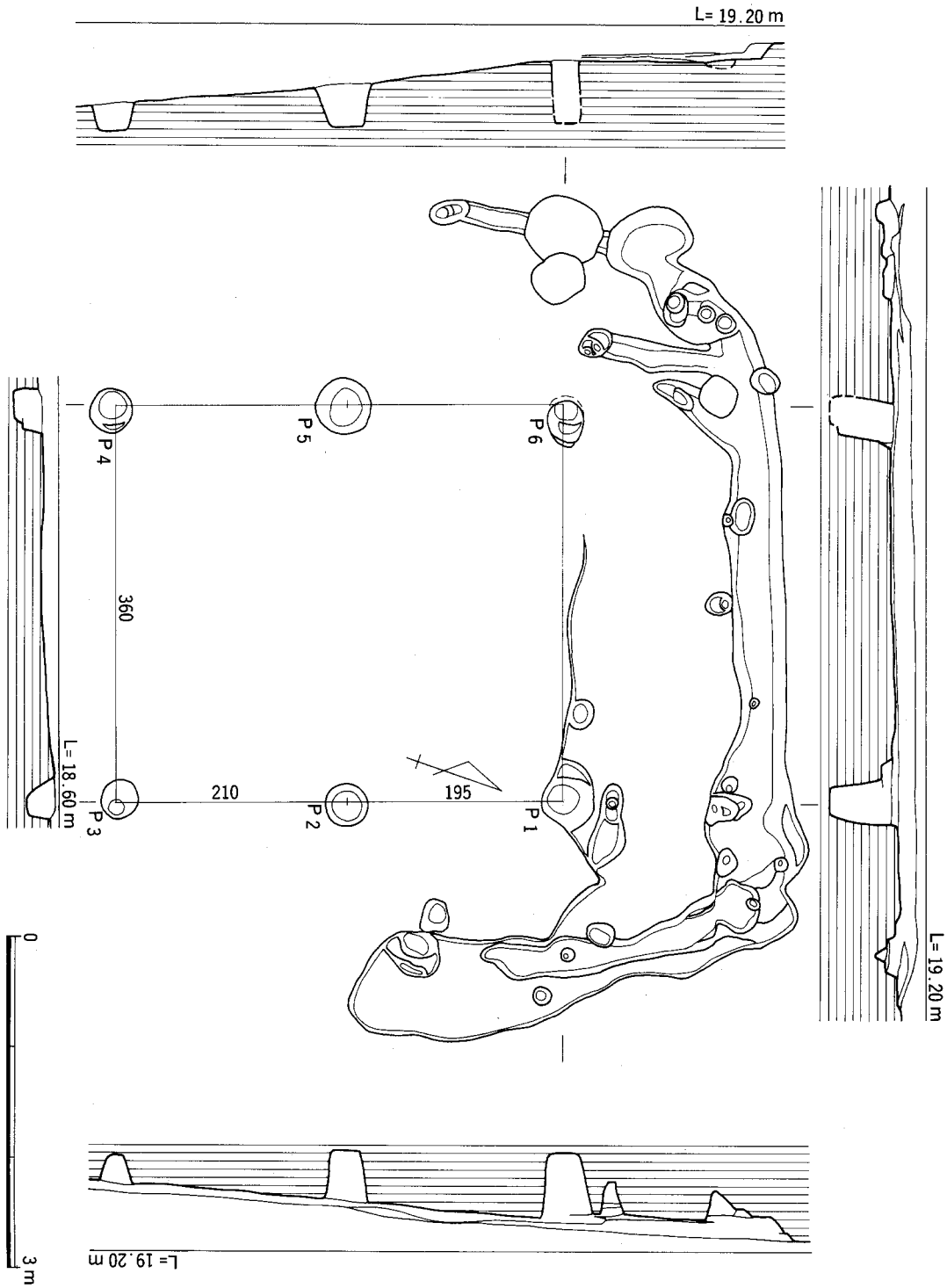


Fig. 6　SB-34 (1/60)

SB59（Fig. 8，図版4）

Ｊ３区，SD03の西側で検出した主軸を北東方向に取る２×２間の総柱建物である。形は全体に非常にゆがんでいるが，何となくまとまる為建物とした。一辺が3.1mから3.65mを測る。柱の形状は円形，直径は20～25cm，深さは10～20cmを測り，全体に小さく，浅い。埋土は赤褐色または灰褐色地山ロームブロックを主体とする。出土遺物はなかった。

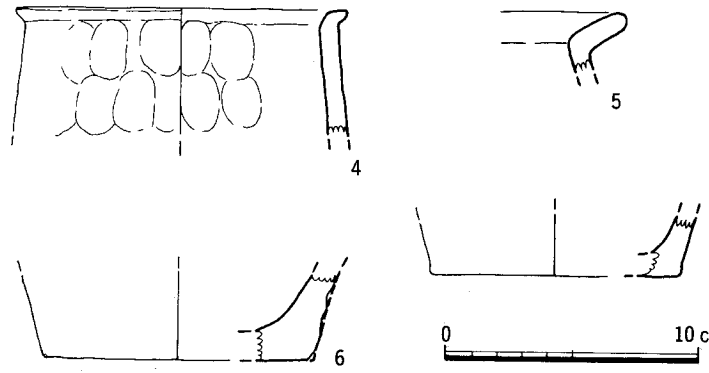


Fig. 7　SB 34 周溝出土遺物(1/3)

SB60（Fig. 8，図版5）

Ｆ・Ｇ３・４区で検出した主軸をＮ―86°30′―Ｗに取る東西方向の２×３間の総柱建物である。梁間全長3.6m桁行全長6.45mを測る。柱穴の形状は隅丸方形又は円形で，直径は45～95cm，深さは40～60cmを測り，大きくしっかりしている。柱径は痕跡から見て20cm前後である。柱筋はＰ１・４がわずかにはずれる。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。総柱の倉庫であろう。

出土遺物（Fig. 9，図版16）　Ｐ７以外の柱穴より古墳時代の土師器・須恵器，奈良時代の須恵器などが出土している。

表１　掘立柱建物一覧表

建物番号（ＳＢ）	規模（間数）	主軸方向	梁間（cm） 実長(cm)	梁間（cm） 柱間寸法(尺)	桁行（cm） 実長(cm)	桁行（cm） 柱間寸法(cm)	床面積(m²)	主軸方位	備考
34	１×２	北北西	360	12	405	7・6.5	14.58	N-18°30′-W	
47	1×1	北西	240	8	240	8	5.76	N-63°-W	
48	２×２	略北	240	4•4	270	5•4	6.48	N-８°-E	
59	２×２	北東	340～362	6.7・3.7 6.2・5.9	322～365	4.5・6.2 5.8・6.3	11.56	いびつで主軸不明	
60	２×３	東西	360	6•6	645	7.5•6.5•7.5	23.22	N-86°30′-W	総柱
62	１×２	東西	180	6	300	5.5	48	N-75°-W	
64	２×３	北東	375 365	5.8・6 5.3•3.5•3.3	512	5.4•5.7•6	18.94	N-54°-E	
65	2×2以上	北	360～380	6.5・5.5 7.2・5.5	445～485	5・9.8 7・9.2	17.21	N-４°-E	
66	２×２	北西	300	5•5	300	5•5	9	N-19°-W N-71°-E	
67	１×２	北東	210	7	345	5.5・6	7.24	N-57°30′-E	
68	２×２	北西	285	4.7•4.8	300	6・4 3.7•6.3	8.55	N-29°-E	側柱
69	１×１	東西	195	6.5	240	8	4.68	N-83°-W	
70	１×１	略北	225	7.5	270	9	6.07	N-12°30′-E	SB70とピット共有
71	１×１	北東	195	6.5	270	9	5.26	N-35°30′-E	
72	１×１		180	6	180	6	3.24		SB70とピット共有

8～12は須恵器。8は高杯の脚部小片で，明赤褐色を呈し，赤焼けである。胎土は砂粒をわずかに含む。9・10は杯蓋の口縁部片で，9のかえりは貼付けである。宝珠形の鈕がついたと思われる。10はかえりを持たず，天井部は水平，端部はほぼ平坦。色調は9が赤褐色，10が灰白色。胎土はいずれも砂粒を多く含む。11・12は低い高台を持つ杯。11は1/3片で，復元高台径9.0cm，12は1/4片で復元高台径8.2cmを測る。いずれも余り砂粒を含まない。13は土師器の甕1/4片である。復元口径20.6cmを測る。張りの少ない肩部より軽く外反する口縁部を持つ。器壁はやや厚手である。色調は灰橙黄色で，胎土は砂粒を多く含む。93は半月形の石庖丁の小片である。火成岩製と思われる。色調は灰色である。8はP2，9・11はP3，10・93はP5，12はP10，13はP6出土。いずれも7世紀後半代から8世紀前半代に入る遺物である。

SB62（Fig. 8，図版5）

H4区で検出した主軸をN—73°—Wに取る1×2間の東西方向の建物である。梁間全長1.80m，桁行全長3.0mを測る。柱穴の形状は円形で，直径は50～60cm，深さは40～60cmを測り，深くしっかりしている。柱径は痕跡から見て15cm前後と思われる。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 9）　4個の柱穴から出土している。弥生時代から古墳時代の土器で量は少ない。

14は弥生土器の壺形土器の1/6底部片である。復元底径7.0cmを測る。色調は灰黄色，胎土は砂粒を若干含む。

SB64（Fig. 10）

J3区で検出した主軸をN—54°—Eに取る2×3間の建物。SD03と重複しており，一部柱穴の見落としがあるかもしれない。梁間全長2.55～2.65m，桁行全長6.12mを測り，ややいびつである。柱穴は円形で，全体に小さく，深さもそれ程ない。埋土は暗灰褐色土を主体とする。

出土遺物　土師器，須恵器の細片が各1点出土している。

SB65（Fig. 10）

H・I3・4区で検出した主軸をN—4°—Eに取る2×2間の建物である。梁間全長3.60～3.80m，桁行全長4.45～4.85mを測る。北西側に少しひずみ，柱筋は全体に通っていない。柱穴形状は円形で，直径は18～46cm，深さ5～36cmと不揃いである。埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物　3個の柱穴から古墳時代以降の土師器の細片が6点出土した。

SB66（Fig. 10）

G4区で検出した主軸をN—19°—Wに取る2×2間の総柱建物である。SD01・02完掘後検出した。梁間，桁行ともに3.0mを測る。柱穴形状は円形で，直径は30～60cm，深さは10～40cmを測る。溝に切られた部分は削平で浅いが，全体にしっかりしている。埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物はなかった。

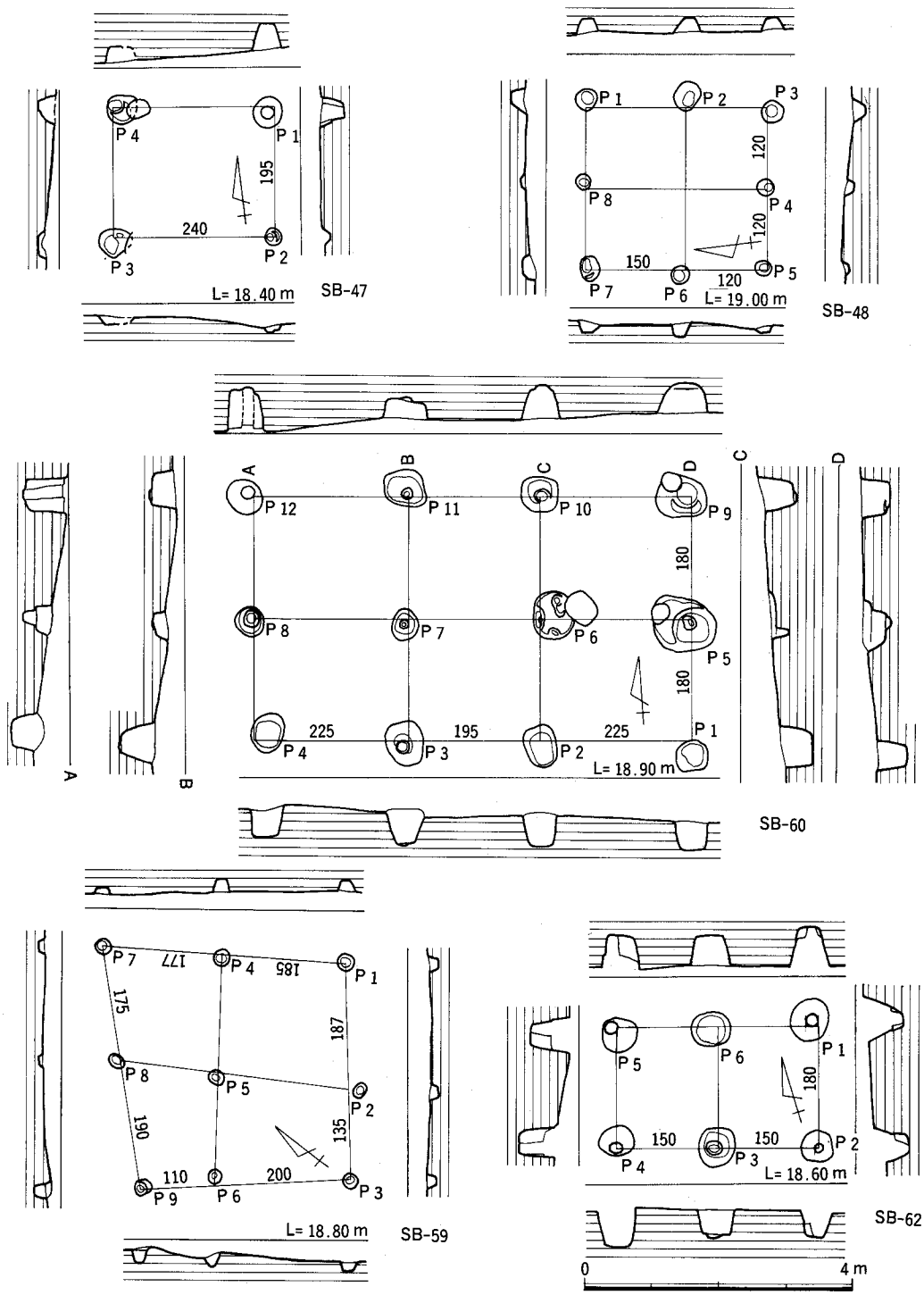


Fig. 8　SB-47・48・59・60・62(1/100)

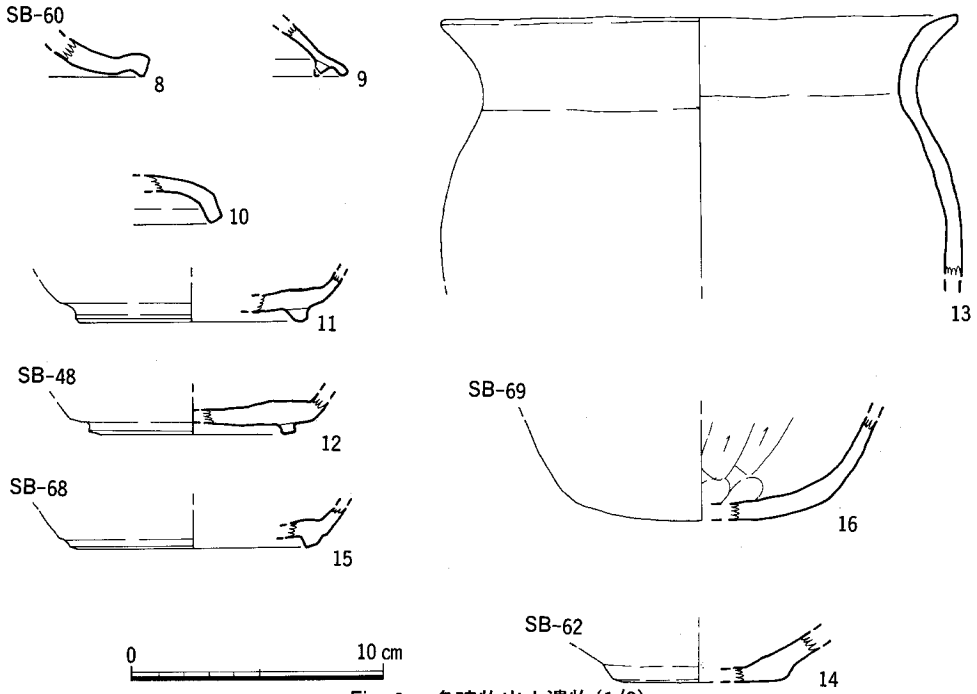


Fig. 9　各建物出土遺物(1/3)

SB67（Fig. 10）

F 5区で検出した主軸をN—57°30′—Eに取る1×2間の建物である。梁間全長2.10m，桁行全長3.45mを測る。柱穴形状は円形で，直径は20～30cmと比較的小さく，深さはP 1のみが40cmと深い。柱筋はP 4が少し外へずれる。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物　土師器の細片が2点，鉄滓が1点出土している。

SB68（Fig. 10）

F 4・5区で検出した主軸をN—29°—Eに取る2×2間の側建物である。梁間全長2.85m，桁行全長3.0mを測る。柱穴形状は略円形で，直径は15～40cm，深さは5～40cmと不揃いである。P 2が特に深い。埋土は黒褐色または暗褐色土である。

出土遺物（Fig. 9,）　4つの柱穴から土師器の細片が少量出土している。

15は高台のつく杯で，復元高台径は9.8cmを測る。奈良時代のものである。

SB69（Fig. 10，図版5）

F 5区で検出した主軸を北西から南東に取る1×1間の建物で，柱間は各2.40mを測り方形である。柱穴形状は円形で，直径は40～55cm，深さは40～45cmを測り，全体に大きく，しっかりしている。柱径は痕跡から20cm前後と推定出来る。埋土は黒褐色土である。

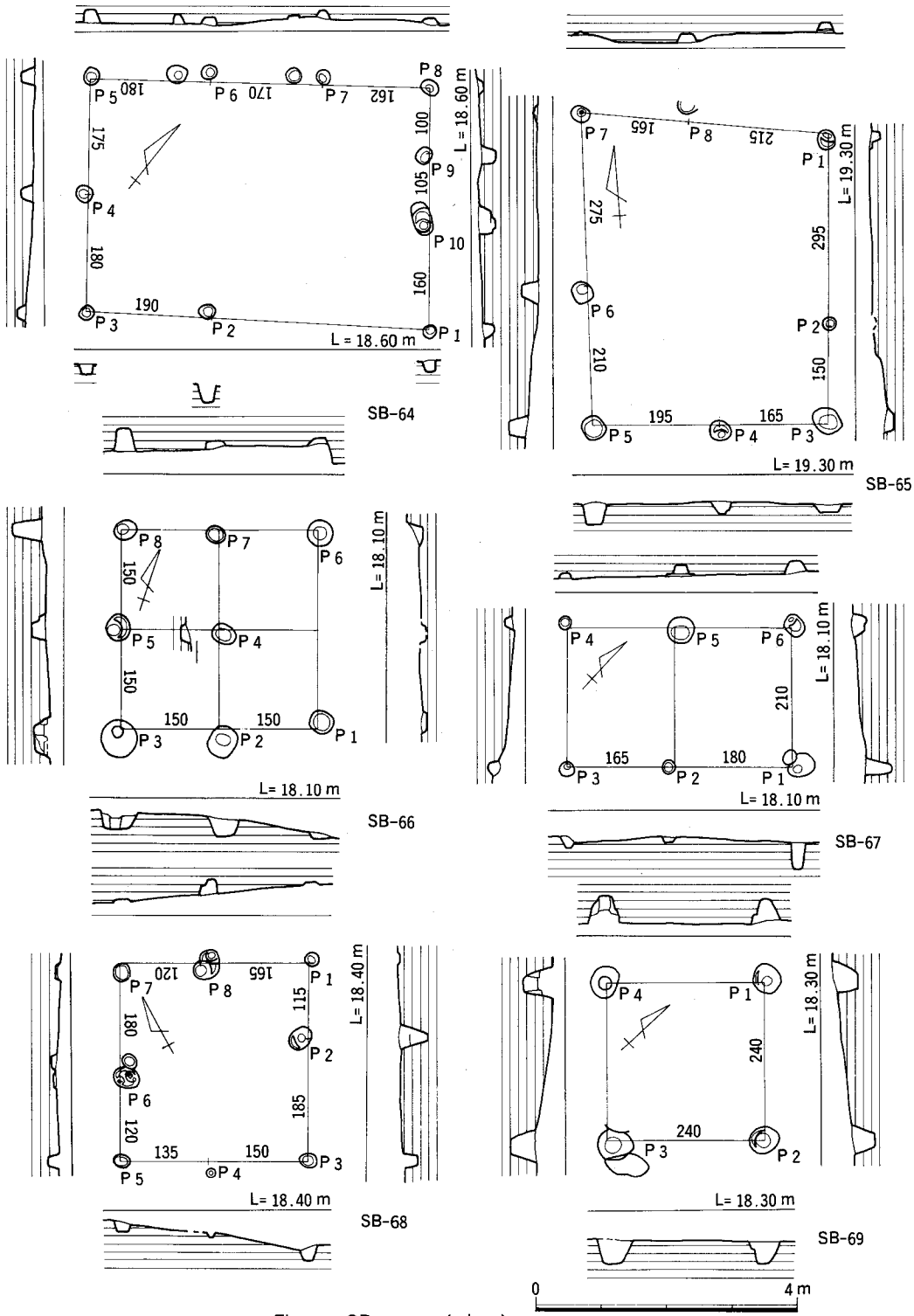


Fig.10　SB-64～69(1/100)

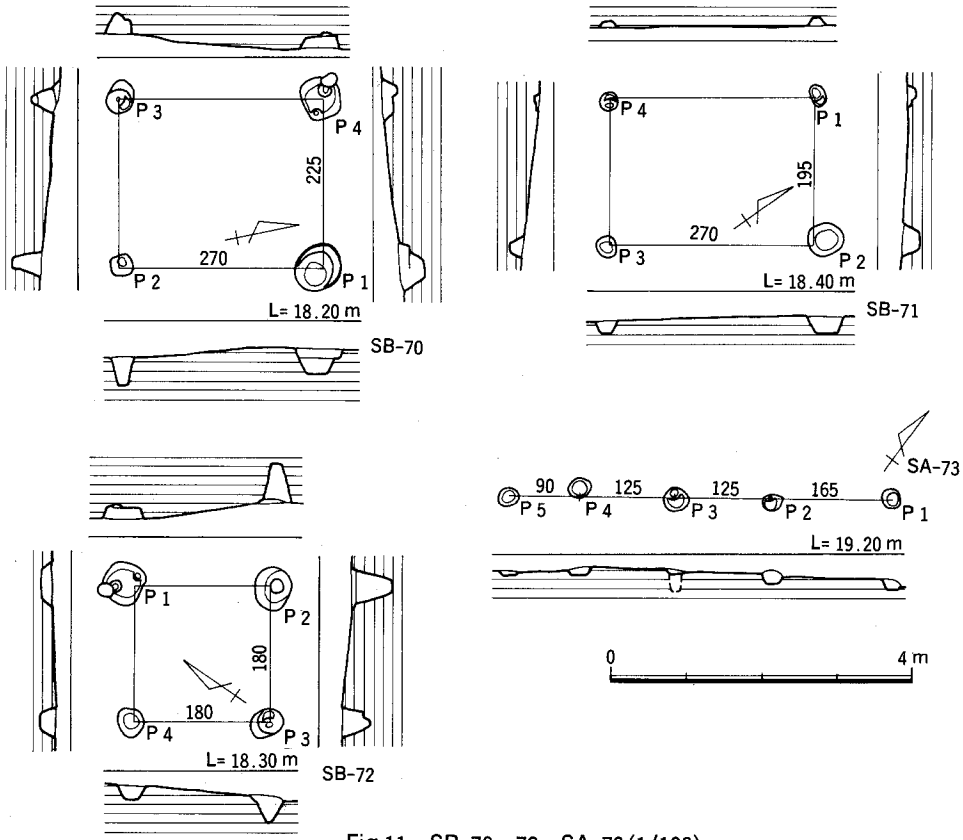


Fig.11　SB-70～72・SA-73(1/100)

出土遺物（Fig. 9，図版16）　各柱穴より古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器の小片が26点出土している。図示出来るものは1点のみ。

16は土師器の小型の甕の底部片か，やや平底気味である。内面はヘラ削り。色調は橙色で，胎土は砂粒を少し含む。

SB70（Fig. 11）

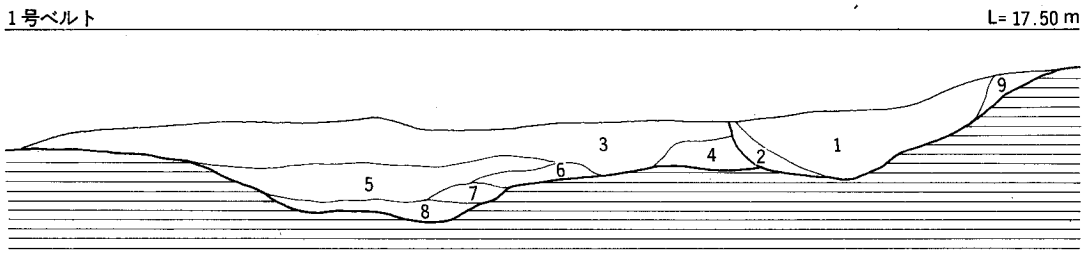
F 5区で検出した主軸をN—12°30′—Eに取る1×1間の建物である。SB72と柱穴が重複する。柱間距離は2.25～2.70mを測る。柱穴形状は円形又は隅丸方形，直径は30～70cm，深さは20～40cmを測る。西側柱穴が比較的浅い。埋土は褐色土である。

出土遺物　古墳時代の土師器，須恵器の細片が6点出土している。

SB71（Fig. 11）

F 5区で検出した主軸をN—35°30′—Eに取る1×1間の建物である。梁間全長1.95m，桁行全長2.70mを測る。柱穴形状は円形，直径は25～45cm，深さは10～25cmを測る。全体に不揃いである。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物はなかった。



1号・2号ベルト土層名称

1．オリーブ黒色土
2．灰オリーブ色シルト　} SD-02
3．暗褐色土
4．暗褐色土（3よりくらい）
5．褐色シルト
6．にぶい黄褐色シルト（鉄分を含む）
7．黒褐色粘質土
8．褐色粘土（粒子が細く粘性が強い）
9．橙色粘土ブロックに1を混入
10．黄灰色粘質土に黄褐色粘土ブロック少量混入
11．褐色粘質土に灰黄褐色粘質土小ブロック混入
12．3に暗褐色粘質土少量混入
13．暗褐色粘質土
14．13に明赤褐色粘質土ブロック少量混入
15．8に黄褐色粘土ブロック混入
16．13に黄褐色粘土ブロック少量混入

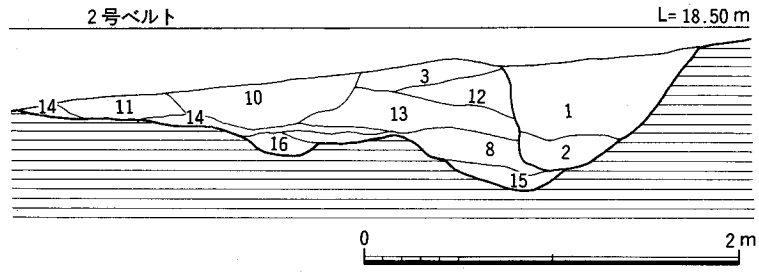


Fig.12　SD-01・02土層図(1/40)

SB72（Fig. 11）

F 5区で検出した1×1間の建物で，SB70と柱穴が重複する。柱間距離は1.80mを測り，方形である。柱穴形状は円形又は方形で，直径は40～60cm，深さは15～50cmを測る。東側の柱穴は西側に比べやや大きい。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　土師器・須恵器の細片が1点ずつ出土した。

柵

SA73（Fig. 11）

I 3区で検出した。列方向N—54°—Eに取る柵で，4間分確認した。全長5.05m，柱間隔は0.9～1.65mと不規則である。柱穴形状は円形で，直径は25～35cm，深さは5～30cmを測る。削平によるものか全体に小さく浅い。埋土は暗褐色砂混土である。塀のようなものであろうか。出土遺物はなかった。

溝状遺構

大小合せて16条検出した。

SD01（Fig. 12，図版5）

南東側低地部縁辺の北側崖下を西北西N—70°—W方向に延びる溝である。幅は4～5 m，深さは高所部から約80cm，低地部から40cmを測り，幅の割には浅い。埋土は上層が暗褐色土，下層が褐色粘土を主体とする。土層ベルトを持って東からI・II・III区としたが，西側III区は近現代の攪乱等に破壊され，残りは悪い。西側のSD23と埋土，方向が一致しており，床面の高低差はあるもののつながるかもしれない。丘陵部を切断する地割溝のようなものか。

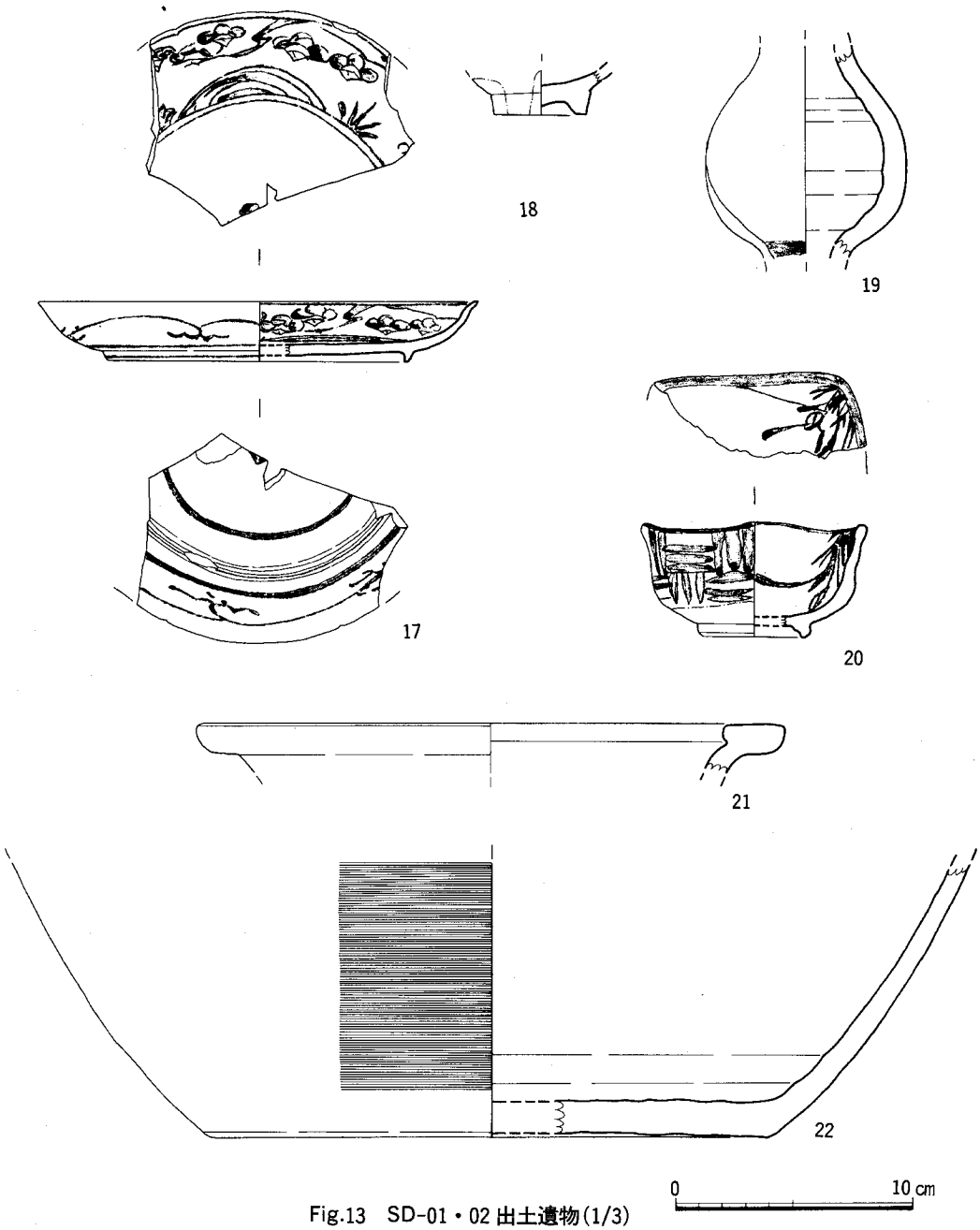
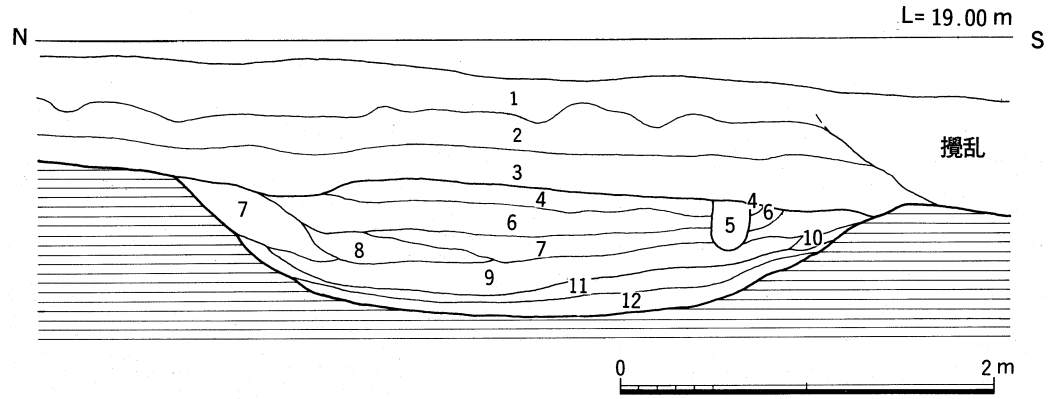


Fig.13　SD-01・02 出土遺物(1/3)

出土遺物（Fig. 13，図版　）　古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器，中世の土師器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・磚，近世の染付皿，鉄滓16個（総重量1690g）などが出土している。17は染付の輪花の中皿1/4片で，復元口径18.5cmを測る。見込みに梅の折枝文，外面に

SD-03 東壁土層名称

1．黒褐色土(表土)
2．褐色土
3．暗褐色土(粘性が強い)
4．黒褐色土
5．4に橙色粘土ブロック少量混入(ピット)
6．暗褐色土
7．黒褐色土(ややしまらず、軟質)
8．7で9をブロック状に混入
9．黒色土(やや粘性を持ち、軟質)
10．9に7をブロック状に混入
11．にぶい黄褐色粗砂混土(粘性が強い)
12．黄褐色粗砂混土(粘性が強い)



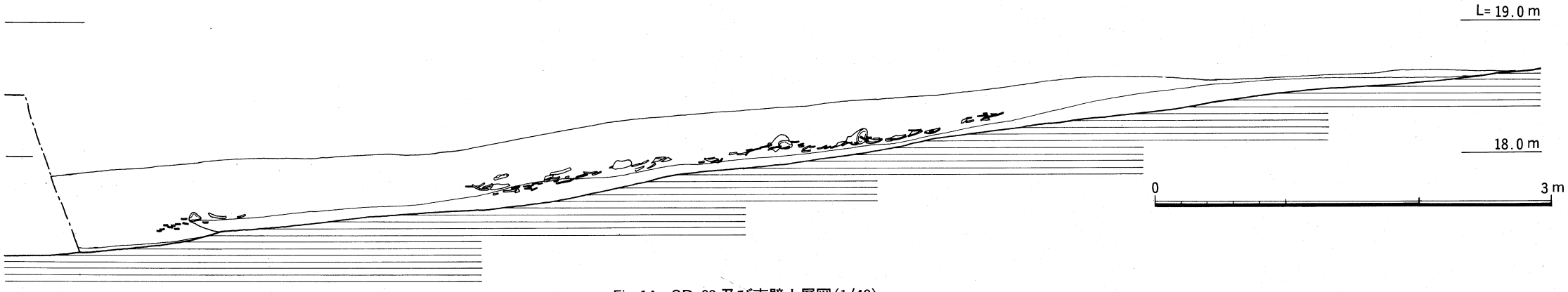


Fig.14　SD-03 及び東壁土層図(1/40)

つる草を描く。高台内には渦福銘らしきものが入る。18世紀代の肥前磁器であろうか。近世は1点のみであり，混入かもしれない。

SD02（Fig. 12，図版5）

SD01を切る溝で，南東部段落下低切部を鍵形に巡る溝である。溝幅は1.0～1.85m，深さは60～65cmを測る。埋土は上層がオリーブ黒色土，下層が灰オリーブシルトである。この溝は南東側隣地の排水用側溝に通じており，比較的新しい時期のものと考えられる。

出土遺物（Fig. 13，図版16）　古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器，近世の陶器・磁器・瓦質土器・土師質土器・瓦・窯道具のハマ・博多七輪・レンガ片・鉄滓1個（重量144g），不明銅製品などがあり，江戸末から明治期迄の遺物が出土している。

18～20は陶器で，18は唐津系の椀底部片である。高台径は4.1cmで，高台は削り出す。内外面淡緑灰色釉がかかる。19は花生である。体部1/2片で，復元体部8.5cmを測る。体外面全体にはオリーブ色の灰釉がかかり，下半には更に暗褐色の鉄釉がかかる。瓢形を呈すと思れる。20は型打ちによる小型の椀又は鉢である。口縁部はやや波型を呈し，内外面乳白色の釉に緑灰色の釉で文様が描かれる。復元口径9.6cm，高台形4.8cmを測る。21・22は素焼の甕である。21は口縁部1/4片で復元口径25cmを測る。口唇部には鉄分が付着し，赤褐色を呈す。22は底体部片で，復元底径23.5cmを測る。体外面はカキ目に近いしっかりした刷毛目が入る。

SD03（Fig. 14，図版6）

J 3区で検出した主軸をN—27°—Wに取り，北西方向に舌状に延び，だらだらと立上る溝である。確認長は11.8m，最大幅は3.50m，最大深は0.75mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。上層は暗褐色粗砂混土，中層は黒褐色粘質土及び粗砂混土，下層は黄褐色粘質砂混土及び粘質土である。上層・中層から奈良時代から中世の遺物，下層から弥生時代後期後半の遺物が多数出土している。下層の遺物は床面より10～15cm程浮いており，溝が少し埋った後，流入した状況を示す。溝は弥生時代後期後半頃，多量の遺物を含んで下層迄一度埋まり，その後最終的に中世の段階に埋没したものと考えられる。

出土遺物（Fig. 15～19，図版16,17）　全体でコンテナ4箱出土した。大半が弥生時代の土器で，外に土錘，滑石製品，ガラス小玉，鉄滓2個などがある。

23～26は須恵器で7世紀初めから8世紀前半にかけてのもの。23・24は高台付杯で，23は口縁部1/8片，復元口径12.4cmを図る。24の底部には八字状に開く，細身で高い高台が付く。25は杯身受部小片，体部外面下半はヘラケズリのちナデ。26は坏蓋の口縁部小片で，口縁内面に三角形の短いかえりが付く。色調はいずれも灰色，胎土は24が石英粒を多く含み不良のほか，精良。27は把手。長さ5.5cmを測り，断面はやや偏円である。把手自身本体に貼り付けたと思われる。28は青磁椀口縁部1/8片で，復元口径18.6cmを測る。内外面透明の灰オリーブ釉がかかる。

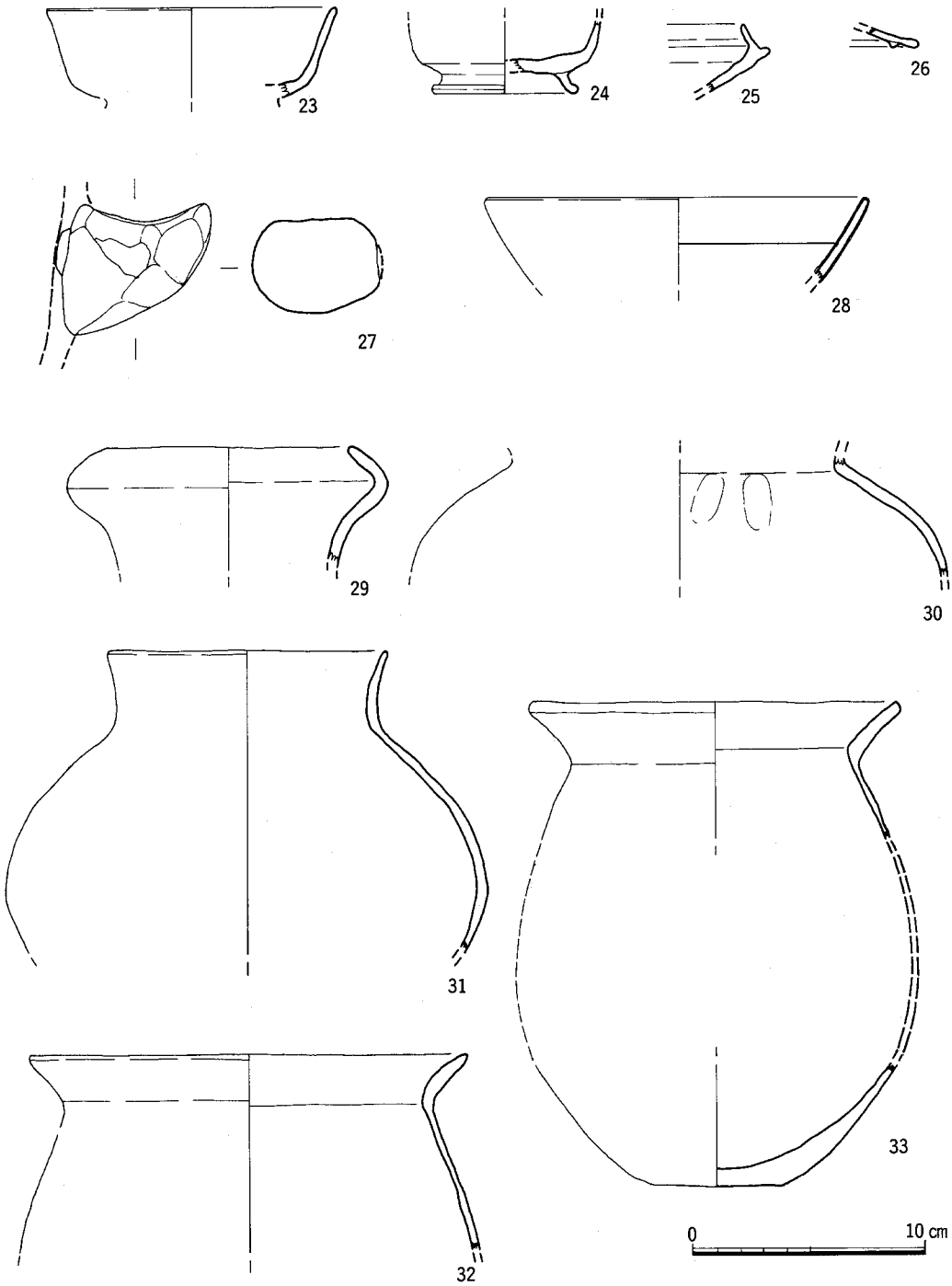


Fig.15　SD-03 出土遺物 I (1/3)

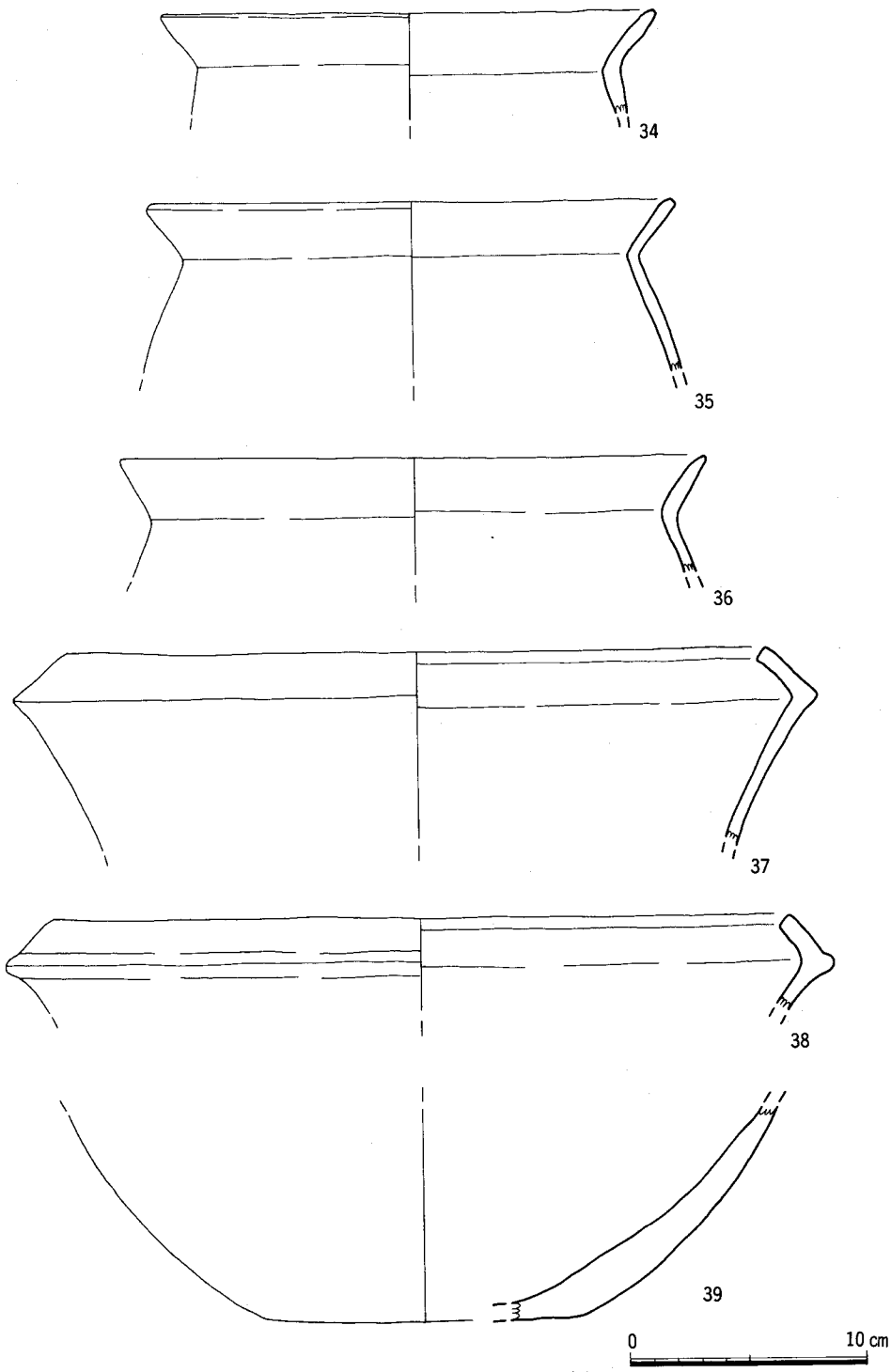


Fig.16　SD-03 出土遺物 II (1/3)

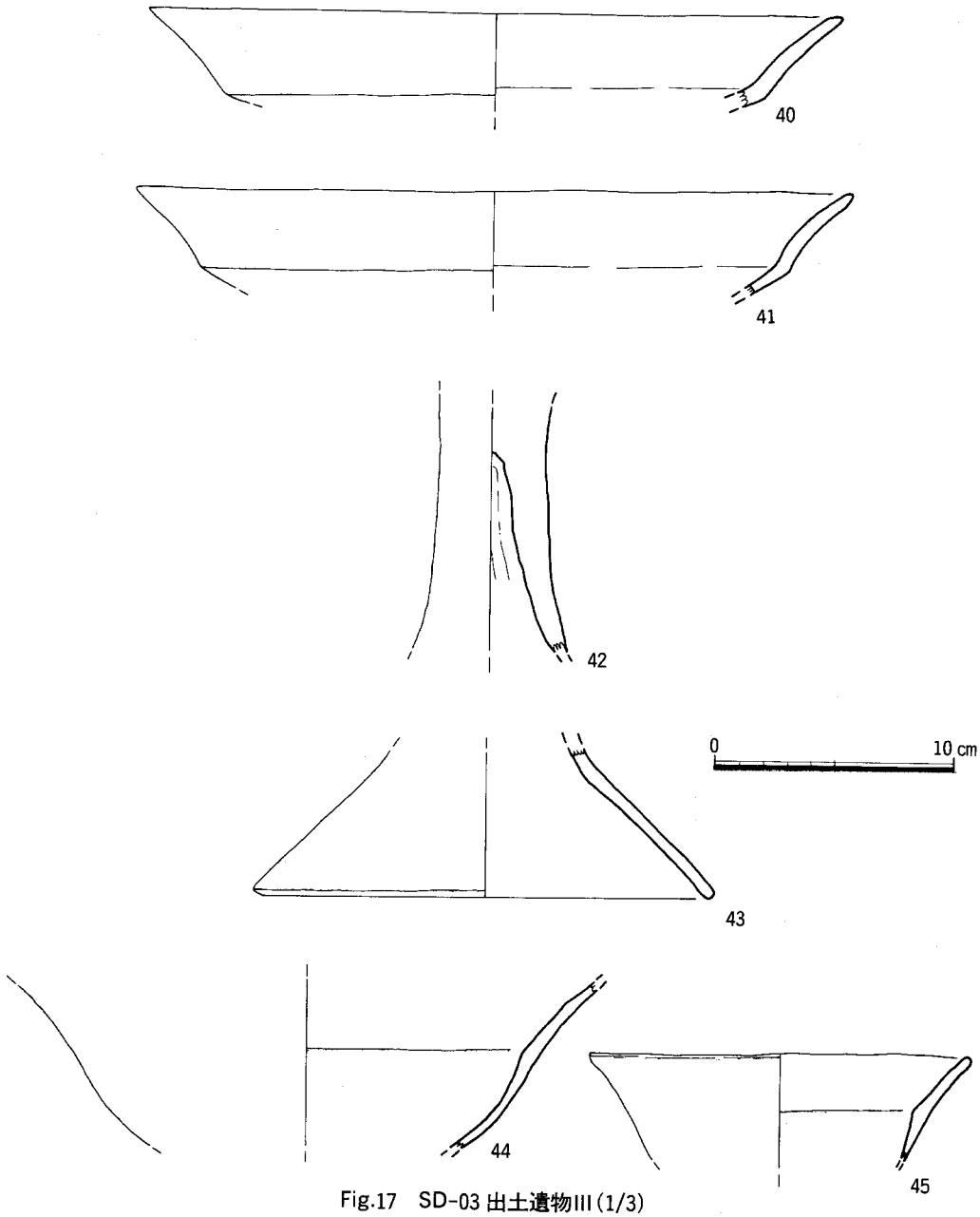


Fig.17　SD-03 出土遺物III (1/3)

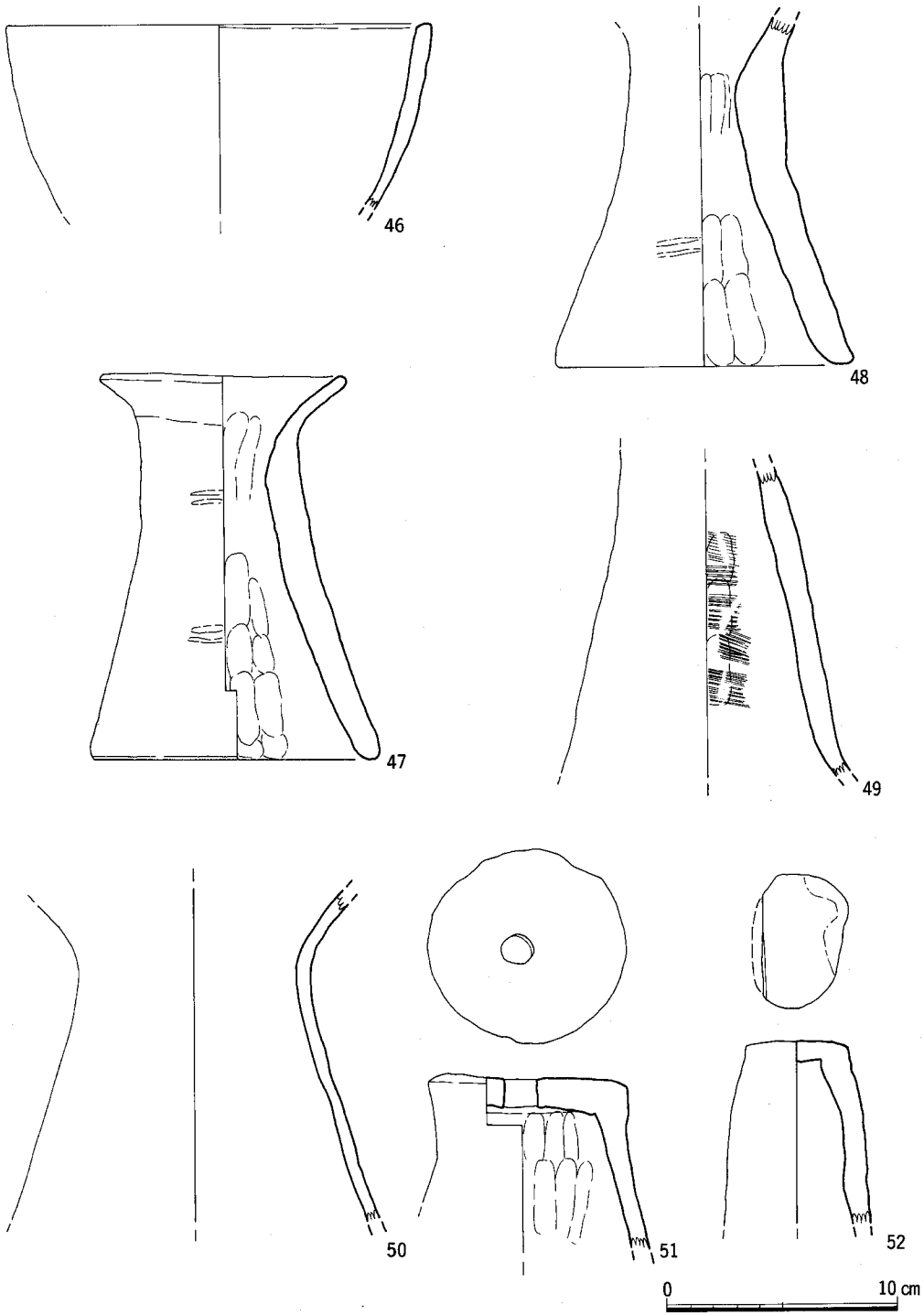


Fig.18　SD-03 出土遺物Ⅳ (1/3)

29～52は弥生土器である。29～31は壺形土器。29は袋状口縁壺の口縁部1/8片で，復元口径10.6cmを測る。色調は浅黄橙色で，胎土は砂粒を多く混入。30は口頸部1/5片で，口頸部は31とほぼ同類と思われる。体内面に指おさえ痕が残る。色調は灰黄色で，胎土は砂粒を多く混入。31は口縁部1/2片である。直立し，端部がやや外反する器形，頸部のしまりは弱い。復元口径20.8cmを測る。器壁は荒れ調整不明。体外面に一部黒斑がある。32～39は甕形土器。32～36は口縁部がく字状を呈す器形。32は口縁部1/4片で，復元口径19.0cmを測る。く字状に外折する口縁部はやや肥厚する。器壁は荒れ調整は不明。33は図上で復元した。復元口径は16.0cmを測る。底部は不安定な平底である。器壁は荒れ調整は不明。34は1/6片で，復元口径21.0cmを測る。器壁は荒れ調整不明。35は口縁部1/5片で，復元口径22.4cmを測る。器壁は荒れ調整不明。36は1/8片で復元口径24.8cmを測る。器壁は荒れ調整不明。色調は32が黄褐色，33が灰黄色，34浅黄橙色，35明黄橙色，36橙色。胎土はいずれも砂粒を多く含む。37～39は複合口縁のものである。37は1/6片で，復元口径29.5cmを測る。器壁は荒れ調整不明。38は1/6片で，復元口径31.0cmを測る。器壁は荒れ調整不明。39は底部片で，復元底径13.5cmを測り，やや不安定な平底である。器壁は荒れ調整不明。色調は37・38が浅黄橙色，39が淡黄色を呈し，胎土はいずれも砂粒を多く含む。40～45は高杯形土器である。40・41は比較的底が浅い杯部で大きく外反する口縁部を持つ。40は1/6片で復元口径29.0cm，41は1/8片で，復元口径30.0cmを測る。いずれも器表面は荒れ調整不明。色調はいずれも橙色で，胎土は41が砂粒を多く混入する。42は筒部片で内面しぼり痕が残る。器壁は荒れ調整不明。43は脚部片で，復元脚端径19.4cmを測る。筒部から余り屈折せずに外側へ開く。器壁は荒れ調整不明。色調は42が橙色，43が浅黄橙色。胎土は砂粒を多く含む。44・45は底が深い杯部片で，体部から少し外反する口縁部を持つ。44は1/4片で，体内面と口縁部の境に軽い稜が入る。45は復元口径16.0cmを測り，44より一まわり小さい。色調はいずれも黄色，胎土は44が砂粒を多く含み，45は少ない。脚台付鉢の可能性もある。46は鉢形土器の口縁部1/4片で，復元口径は18.5cmを測る。ボール状の器形で，口縁端部は平坦である。色調は黄橙色，胎土は砂粒を多く含む。47～52は器台である。47～49は頸部のしまりが強く，上位にある。47はほぼ完形で口径10.8cm，器高は16.8cmを測る。体外面はやや荒れるが，水平方向幅3cmの平行叩き，内外はしぼり痕が残り，指おさえ調整。48は口縁部を欠失するが47とほぼ調整は同じ。49は前2者より器壁が薄く大形。外面は荒れるが刷毛目が僅かに残る。内面は指おさえのち横刷毛。50は1/6片で，器壁は薄く，頸部のしまりは弱い。色調は47・48が橙黄色，49が淡橙黄色，50が浅黄橙色。胎土はいずれも砂粒を多く含む。51・52は沓形器台と言われる支脚に近い。51は天井部に直径1.4cmの孔が焼成前に上からあけられている。器壁は全体に荒れるが，内面にはしぼり痕が残る。52は1/2片である。器壁は全体に荒れ，調整不明。色調は51が明黄橙色，52が黄橙色を呈し，胎土はいずれも砂粒を多く含む。

53は管状の土錘。端部を一部欠失する。全長6.0cm，最大径2.1cm，重量20gを測る。指おさえ

仕上。色調は明橙色。胎土に砂粒を含む。

54は滑石製品で，現存長5.5cmを測る。一面はケズリ，一面は丁寧な研磨仕上で，作りは丁寧。用途は不明。55はガラス製の小玉の1/2片。直径5㎜，器高3.5㎜，孔径2㎜を測る。色調はスカイブルーを呈す。

23～28・53・54は上層，29～52・55は下層出土である。

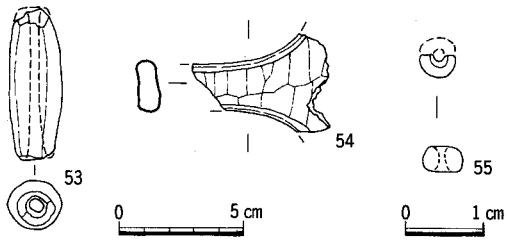


Fig.19　SD-03 出土遺物(1/3・1/1)

SD04

Ⅰ・Ｊ３区で検出した幅1.1～1.5m の浅い溝で，その両側には平行する同様の溝が４条，それらの西側には直交する幅1.2～1.5m の浅い溝があり，埋土から見て，近世以降の畑の遺構と考えられる。

出土遺物（Fig. 21，図版16）　須恵器，土師器，瓦，染付磁器などが８点出土した。

56は染付の皿底部1／6片で，見込に菊花？が呉須で描かれる。

SD08（図版７）

H・I ４区で検出した東西方向に延びる溝で，幅は0.8～2.5m，最大で深さは10cmと浅く，西側は一部壁が消滅する。埋土は暗褐色砂混土である。

出土遺物（Fig. 21，図版16）　弥生時代の土器や古墳時代の土師器・須恵器片の小片が65点出土したが，近世の青磁片が１点混じる。57は須恵器の杯底部1/4片で，復元底径は10.0cmを測る。底部は平坦で，静止ヘラ削り。体部に１条の沈線が巡る。色調は黒灰色，胎土は精良。

SD10（図版７）

SD08の西側，主軸をN―30°―E に取る細長い小溝である。SX13を切り，確認長6.5m，幅0.4m，深さ10cmを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物　弥生時代の土器や古墳時代の土師器・須恵器の細片が30点出土した。

SD19（Fig. 20，図版７）

調査区南東隅Ｇ６～Ｈ７区で検出した主軸をN―55°―W に取る溝である。確認長14.4m，最大幅1.5m，深さ20cmを測る。焼土坑SK50を切っている。埋土は上下２層に分かれ，上層は黒褐色土，下層は上層土に橙色粘土ブロックを混入する。溝は幅・深さ共一定でなく，また等高線に直交するような形であるので，自然の流路かもしれない。

出土遺物(Fig. 21，図版16)　弥生土器から古墳時代の土師器，須恵器，奈良時代の須恵器の破片が35点と青磁の破片が１点，鉄滓と石鏃１点が出土している。

96は黒曜石の石鏃で，基部に浅い抉りが入る。先端は使用によるものか欠失する。現存長1.50cmを測る。

SD21（図版８）

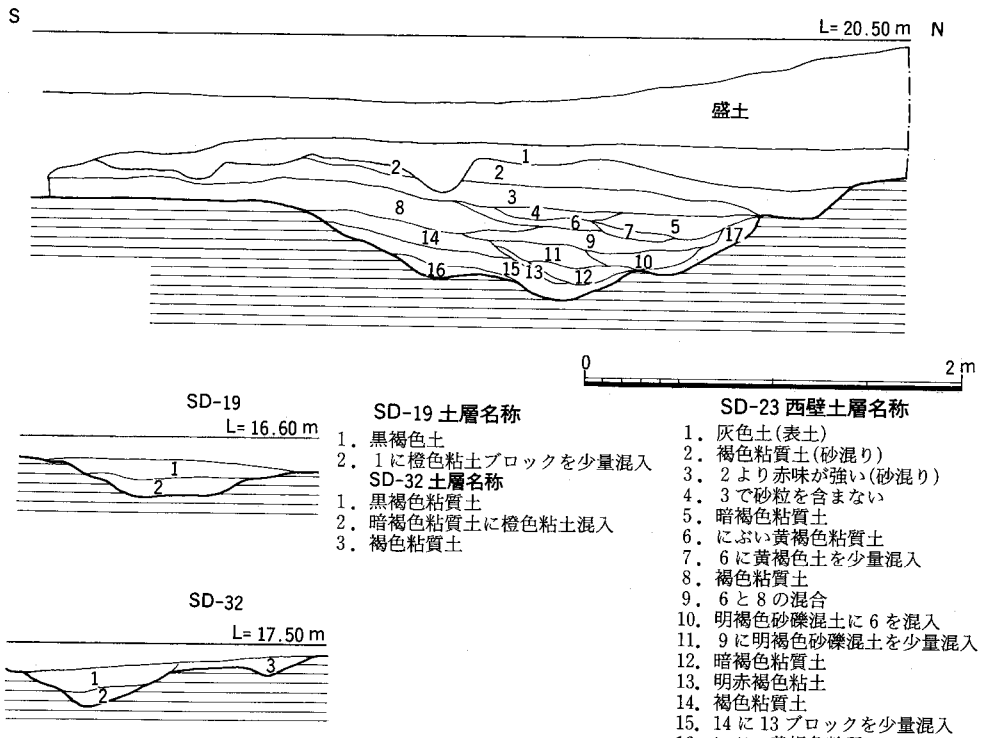
南東隅で検出したSD19に切られる溝で，SD43，SX46などと同一遺構と考えられる。確認長11.7m，幅0.5～1.0m，深さ10～20cmを測る。東側は包含層の掘下げ後確認した。埋土は黒褐色～暗褐色土である。流路は曲がりくねっており，SD19などと同様，雨水などによる自然水路と考えられる。

出土遺物(Fig. 21，図版16)　弥生土器や土師器，須恵片が20点，鉄滓が９個(総重量2277g)出土した。

58・59は須恵器。58は高杯脚部片で，上面杯部の接合面には同心円状の５条の溝が刻まれている。色調は灰白色で，やや軟質な感じがする。59は高台付杯底部1/6片で，復元高台径8.6cmを測る。コ字状の短い高台が付く。色調は青灰色。胎土はいずれも精良。

SD23（Fig. 20,図版８）

西側高所部D・E３区で検出し，N―70°―W方向に主軸を取る。６号墳(SX74)の下を通り，C区で南方向に曲って行く。D３区でSD58に切られる。溝幅は2.5～2.75m，深さは45cm前後を測る。埋土は褐色粘質土又は，暗褐色粘質土を主体とし，最下部には暗灰色砂が堆積し，流水の痕跡を残す。堆積状況から見ると，一度溝が浅く埋った後，溝を少し掘り直し，再度溝として利用している状況を示す。SD01の項で述べたが，埋土，同一線上にある事から，SD01の連続する可能性がある。



SD-19 土層名称
1．黒褐色土
2．１に橙色粘土ブロックを少量混入

SD-32 土層名称
1．黒褐色粘質土
2．暗褐色粘質土に橙色粘土混入
3．褐色粘質土

SD-23 西壁土層名称
1．灰色土(表土)
2．褐色粘質土(砂混り)
3．２より赤味が強い(砂混り)
4．３で砂粒を含まない
5．暗褐色粘質土
6．にぶい黄褐色粘質土
7．６に黄褐色土を少量混入
8．褐色粘質土
9．６と８の混合
10．明褐色砂礫混土に６を混入
11．９に明褐色砂礫混土を少量混入
12．暗褐色粘質土
13．明赤褐色粘土
14．褐色粘質土
15．14に13ブロックを少量混入
16．にぶい黄褐色粘質シルト
17．暗褐色粘質土で13を少量混入

Fig.20　SD-19・23・32 土層(1/40)

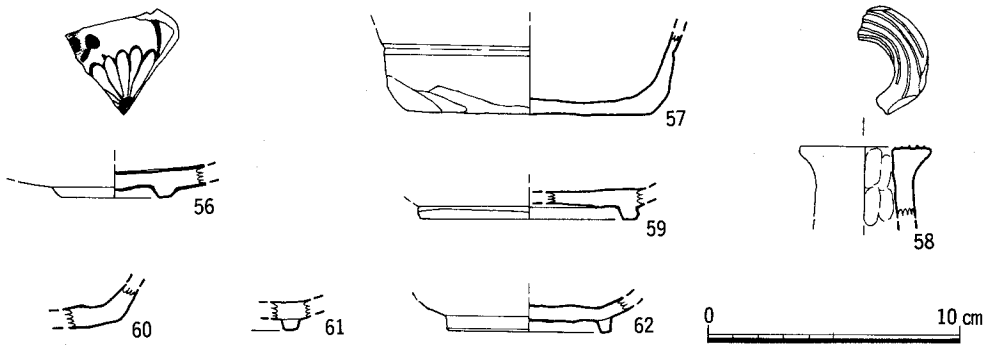


Fig.21　各溝出土遺物(1/3)

出土遺物（Fig. 21,）　出土量は少なく，弥生時代の土器や古墳時代の土師器・須恵器，中世の瓦や白磁片などがある。

60は須恵器の杯底部小片である。色調は灰色で，胎土は砂粒を多く含む。蓋の可能性もある。

SD24

SD23と斜交する溝で，SD23に切られる。埋土は暗灰色砂及び暗褐色粘質土を主体とする。確認長は5 m，幅は0.5m，深さは3～10cmを測り，SD23に向って深くなる。

出土遺物（Fig. 21,）　弥生土器や須恵器，中世の磁器片らしきものが35点と鉄滓13個（総重量248g）出土した。

61・62は須恵器の高台付杯。61は小片で，焼成はややあまい。62は1/8片で，復元口径16.6cmを測る。

SD30

Ｄ６区で検出した小溝で，SX31に切られる。確認長3.5m，最大幅1.2m，深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土に橙色地山粘土・砂粒を多く混入する。土質は軟質であった。

出土遺物　奈良時代のものと思われる須恵器杯底部片が１点出土した。

SD32（Fig. 20，図版８）

Ｄ６区で検出した東西方向の平面形が口唇形を呈す小溝である。全長7.6m，最大幅1.6m，深さ30cmを測り，南側一段テラスを形成し，北側が深くなる。埋土は上層が黒褐色土，下層が暗褐色粘質土に橙色地山粘土を混入する。

出土遺物　弥生時代後期半頃の甕・壺・鉢などの小片が83点と混入と思われる近代の七輪の破片が１点出土した。

SD39

Ｆ４区SC41の東側で検出した長さ１ m，幅0.2m，深さ18cmの小溝である。SC41のコーナー部に位置し，何らかの関連があるのかもしれない。

出土遺物　弥生土器の壺底部細片が１点出土した。

SD43（図版７）

Ｆ・Ｇ６区で検出した自然流路と考えられる小溝。全長13m，最大幅0.9m，深さ25cmを測る。断面は浅いＵ字形で，埋土は黒褐色～褐色土である。出土遺物はなかった。

SD53

Ｆ３区で検出した。長さ1.8m，幅0.15～0.2m，深さ５cmの小溝。出土遺物はない。

SD58

Ｃ・Ｄ３区で検出した。SD23を切る溝で，６号墳（SX74）の下を通り，南方へ曲って行く。幅1.7mを測る。埋土は上層には表土が入り，下層の方は黄灰色土や褐色土である。近世の側溝のようなものであろうか。

出土遺物（Fig. 33，図版16）　近世の土師質土器・陶器合せて３点と鎌と思われる鉄製品が１点出土した。

97は小型の鉄鎌で現存長8.2cm，最大幅2.3cm，厚さ0.4cmを測る。全体に銹化が著しい。柄部は折返している。流れ込んだものと考えられる。

井戸状遺構（SE）

SE05（Fig. 22，図版10）

Ｊ３区で検出した。SD03を切る円形の井戸で素掘りである。直径は1.12×1.00m，最大深1.72mを測る。埋土は花崗岩バイラン土など地山土を主体とし，しまっていない。底迄掘り下げてもまったく湧水がなく，実際には使用されず，すぐ廃棄されたものと思われる。

出土遺物　弥生土器や中世の白磁の細片が８点出土した。

SE07（Fig. 22，図版10）

Ｊ３区SE05の西側で検出した。円形の素掘の井戸で，直径は1.09×1.06m，深さ2.30m以上を測る。湧水と壁の崩壊の恐れがあったため完掘していない。埋土はSE05と同じで，しまっていない。下の方は水気を含むため青灰色を呈し，粘質が強くなる。底の方には多量の日常雑器が入っていた。SE05のかわりに掘り直したものかもしれない。

出土遺物（Fig. 23，図版18）　近代の陶磁器，博多七輪，植木鉢，ガラス製品，プラスチック製品，陶製の土管，鉄鍋，鉄滓などが出土している。

63は博多七輪の底部である。体外面に『博多瓦町，宮本勘太郎』というスタンプがある。

64～66は素焼の土製品で全体に手びねりの雑な造りである。64は土馬で全長8.8cmを測る。前足と後前の一部，尻尾が欠失する。65・66は人形で，65は両足，66は両手両足を欠失する。65は全長6.7cm，66は全長5.1cmを測る。66は出土地不明だが，65と同様の形態のため，SE07出土とした。64～66いずれも井戸祭祀にかかわるものであろうか。

SE61（Fig. 22，図版10）

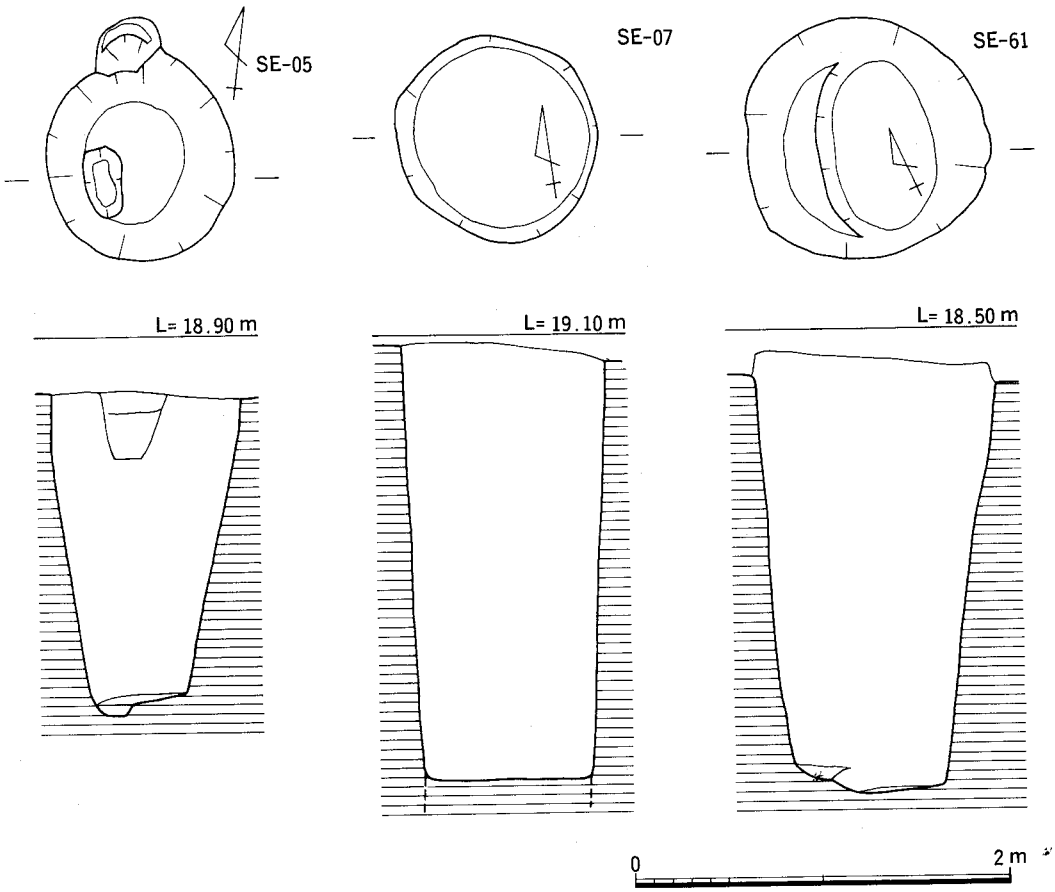


Fig.22　SE-05・07・61(1/40)

Ｅ６区の調査区境界地で検出した。円形の素掘りの井戸で，直径1.35×1.30m，深さ2.32m を測る。湧水はなかった。埋土は地山土を主体とし，しまっていない。

出土遺物　近世以降の土師質土器，陶器の甕，磁器片が少量出土している。

土壙墓

SR09（Fig. 24，図版９）

Ｈ３区Ｉ３区にまたがって検出した。SE07に南端を切られる。主軸はＮ―19°―Ｅに取り，平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長さ2.36m，幅は北側で0.64m，南側で0.79m，深さ0.22m を測る。底面は植物の根などにより荒れ，南側へ傾斜している。埋土は黄褐色・明褐色，橙色地山粘土を中心とし，東側底には灰白色粘土があった。墓壙両小口部には，北側で上面で0.4×0.25m，深さ0.18m，南側で0.5×0.5m，深さ0.10m の不定形状のピット状の落込みがあった。北東側に提瓶・杯蓋・杯身と短頸壺が床面上に，北西側には杯蓋が壁に立てかけるようにあり，また南側には醸がピット状の落込みにあった。

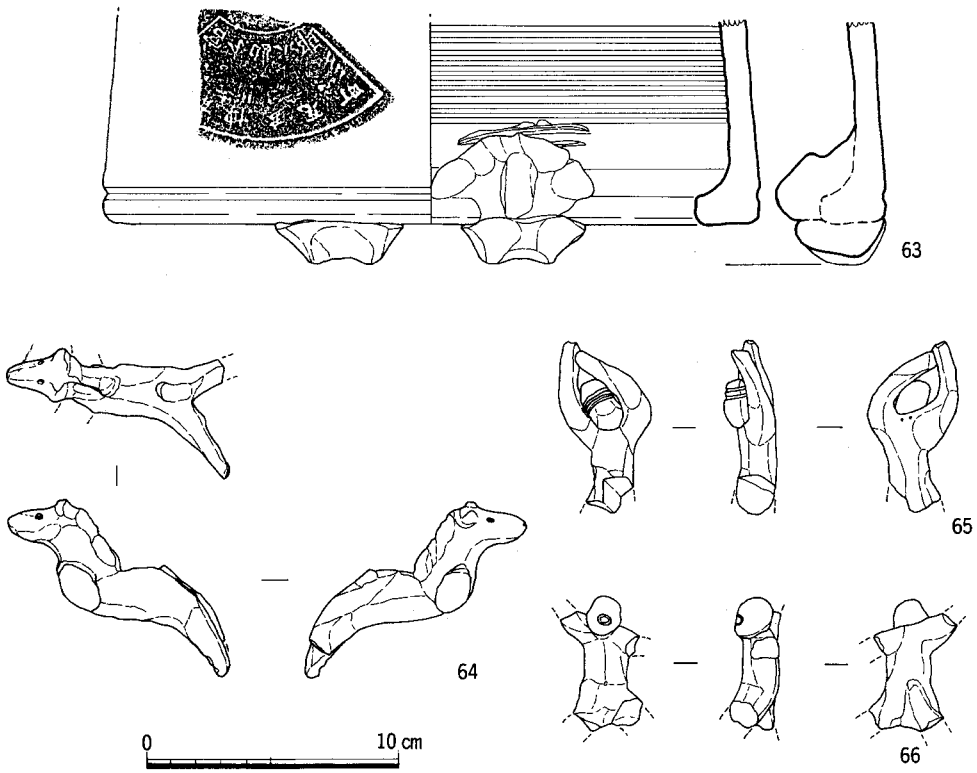


Fig.23　SE-07 出土遺物(1/3)

出土遺物（Fig. 25，図版18）　須恵器の杯身・蓋各２セット，短頸壺１，碾１，提瓶１が副葬されていた。他に弥生土器，土師器の小片，片刃石斧などが出土している。須恵器の時期としては小田氏編年による３ｂ期の古い段階位であろう。

67～73は須恵器。67は杯蓋，完形であるが焼きひずみがひどい。口径13.0～15.0cm，器高5.0cmを測る。口唇部内面には明瞭な段が付き，天井部と回縁部の境には浅い沈線が入る。天井部2/3は回転ヘラ削り，その他はナデ仕上。天井内面には木目直交の平行叩きの痕跡が残る。ろくろ回転は逆時計回り。68は杯身で，67とセット関係にある。焼きひずみがひどい。口径10.8～cm，受部径13.4cm，器高4.7cmを測る。立上りの内傾具合は強い。底部2/3は回転ヘラ削り，その他はナデ。内底は灰かぶりである。ろくろ回転は逆時計回り。67・68共胎土に砂粒を多く含む。69は杯蓋で，口径15.0cm，器高4.9cm，口唇部内面には軽い段が付き，口縁部と天井部の境には浅い沈線が１条廻る。天井部1/2は回転ヘラ削り，その他はナデ。天井部内面には木目直交の平行叩き痕が残る。また天井部にはあて具痕らしきものも残る。ろくろ回転は逆時計回り。70は杯身で69とセット関係にある。受部径15.0cm，器高4.9cmを測る。立上りの内傾具合は68よ

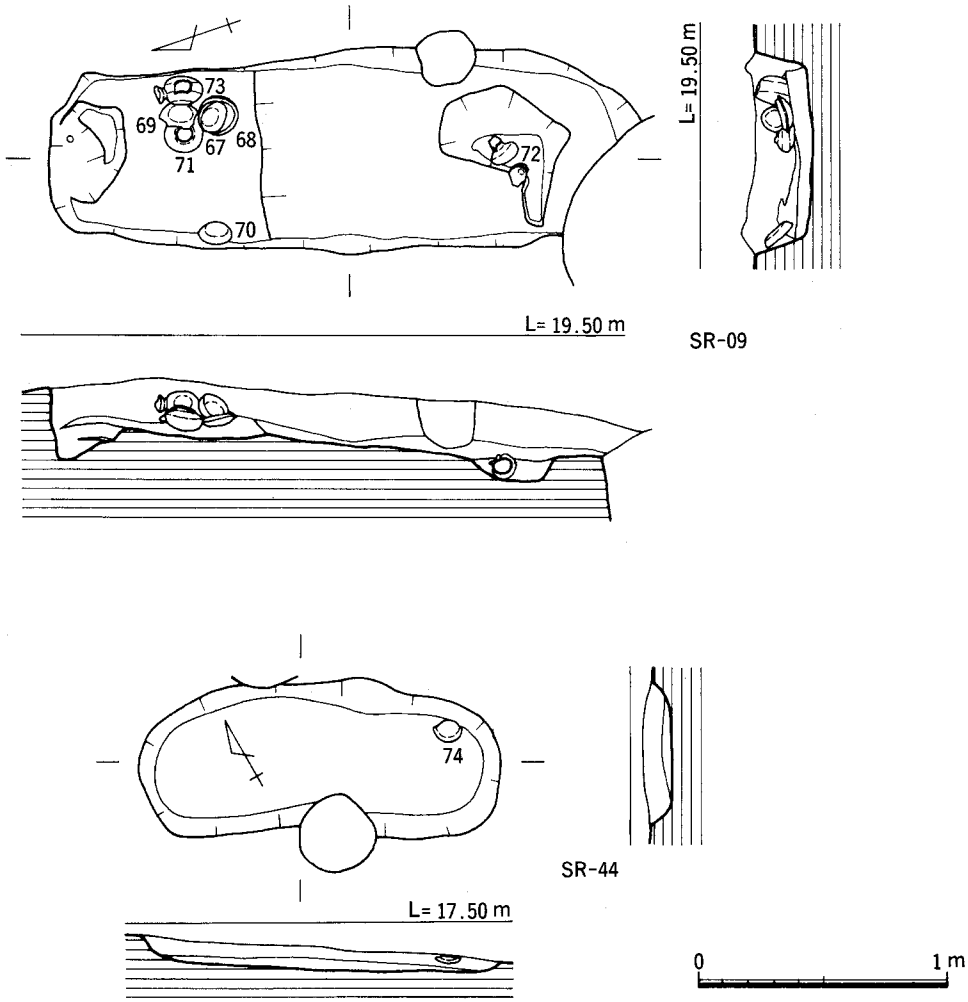


Fig.24　SR-09・44(1/30)

り弱い。底部2/3は回転ヘラ削りで，その他はナデ。内底部には木目直交の叩き痕がかすかに残る。ろくろ回転は逆時計回り。69・70の色調は明灰色で，少し軟質である。胎土は70が石英粒を多く含む。71は短頸壺で，口径7.0cm，器高8.6cmを測る。口縁部は少し内傾し，長さ１cmで頸部との境に稜が付く。体部下半から底部は回転ヘラ削り。72は瓶で口縁部を欠失する。最大体部径10.8cm，孔径1.7cmを測る。体部から細く長い口縁部が付く。体部上半と口縁部にはかき目が入る。外底部には指おさえ痕が残る。72は提瓶。口径7.2cm，器高17.7cmを測る。肩部には１対の簡略化された把手が付く。体部１面には同心円状のかき目を加え，ナ字状のヘラ記号を付ける。94は頁岩質の扁平片刃石斧。全長3.3cm，幅2.0cm，厚さ0.6cmを測る。磨滅が著しい。

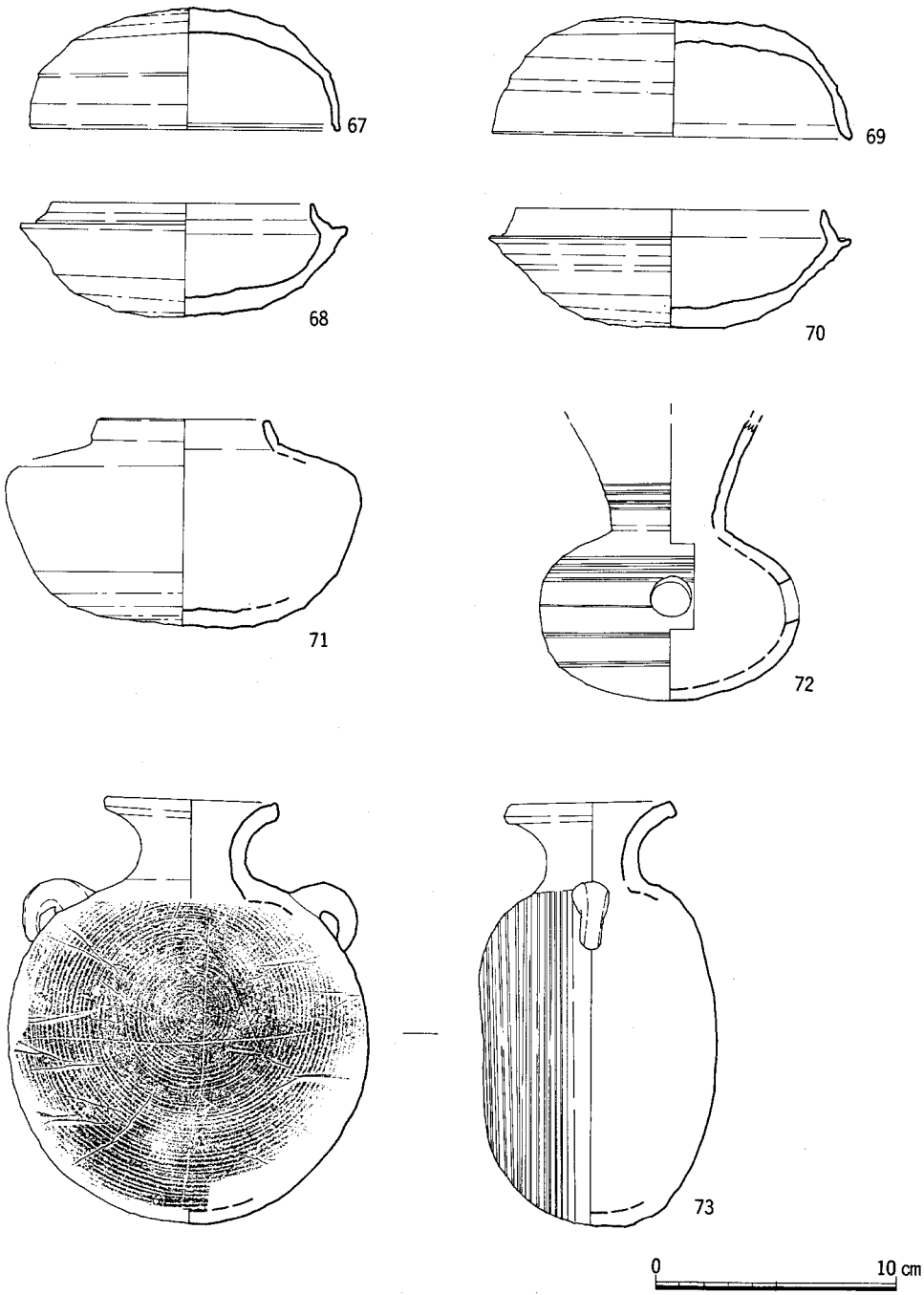


Fig.25　SR-09 出土遺物(1/3)

SR44（Fig. 24，図版９）

Ｇ６区で検出した主軸をＮ―60°―Ｗに取り，平面形は隅丸長方形で，断面形は逆台形を呈す。長さ1.45m，幅0.62m，深さ8～12cmを測る。埋土は黒褐色土である。北東隅に土師器の皿が１点副葬されていた。

出土遺物（Fig. 26，図版18）　１点のみ。

74は土師器皿で，口径9.6cm，器高1.9cmを測る。器表は磨滅が著しいが，ナデ仕上。底部はヘラ切りで板状の圧痕がかすかに残る。色調は淡橙黄色，胎土は精良である。

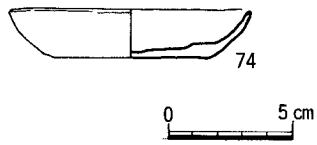


Fig.26　SR-44 出土遺物(1/3)

焼土坑（SK）

調査区南側で２基検出した。

SK45（Fig. 27，図版９）

Ｇ６区で検出した主軸をＮ―59°―Ｅに取る平面形状がいびつな隅丸長方形を呈す土坑である。規模は長さ0.95m，幅0.69m，深さ0.22mを測る。底面は南側に２段階の狭いテラスがある。埋土は褐色粘質土を主体とする。壁の焼け具合は弱く，西壁と南壁に焼土面が部分的に残る。炭層灰は底面中央部を中心に最大４cm厚で堆積していた。出土遺物はない。

SK50（Fig. 27，図版10）

Ｈ６区のSD19下で検出した。主軸をＮ―65°―Ｗに取り，平面形状は羽子板状，溝断面は逆台形を呈す。規模は長さ1.35m，幅は西側で0.92m，東側で0.45m，深さ0.28mを測る。底面は

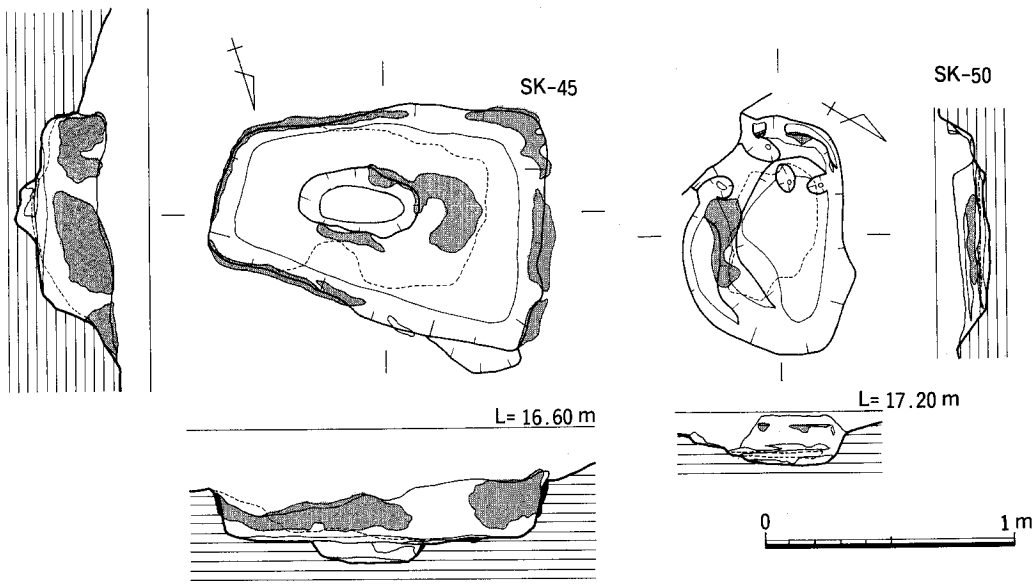


Fig.27　SK-45・50(1/30)

平坦だが，中央部に0.5×0.28m，深さ8cmの楕円形状のピットがある。埋土は暗灰褐色砂混粘質土である。焼土面は各壁面に残るが，全体には残っていない。底面にもわずかに残る。炭灰層は底面に流れ込むような状況で壁に近い程厚く堆積し，また底面ピットは炭や灰で充満していた。出土遺物はない。

土坑（SK・SX）

近現代の攪乱土坑も含め，30基検出した。主なものを報告するが，その他については表2を参照のこと。

SK11（Fig. 28，図版11）

H4区で検出した主軸をN—13°—Eに取る土坑。平面形状は隅丸長方形で，規模は長さ1.65m，幅0.82m，深さ22～24cmを測る。底面はほぼ平坦で，小さなピット状の落込みが5ヶ所ある。埋土は黒褐色粘質土である。形態から見て土壙墓の可能性がある。

出土遺物（Fig. 30,）　弥生土器から土師器・須恵器片が16点出土した。

75は須恵器の杯蓋1/8片で，復元口径12.0cmを測る。色調は黒灰色，胎土は精良。3b期～4期位に相当する。

SK17（Fig. 28，図版11）

H5区で検出した主軸をN—69°—Wに取る溝状の土坑である。規模は長さ5.98m，幅0.73～1.40m，深さ25cmを測る。断面形は逆台形状を呈し，底面は両端が1段テラス状に高くなる。埋土は暗褐色土である。

出土遺物　弥生時代後期の土器や古墳時代の土師器の甕などの細片が15点出土。

SK18（Fig. 28，図版11）

H5区で検出した主軸をN—28°—Eに取る小判形の土坑。規模は1.27m，幅0.64m，深さ23～32cmを測る。東側にテラスを持ち，底面は両端が一段深くなる。埋土は上層が暗灰黄色土。下層が灰黄褐色土である。

出土遺物（Fig. 30，図版18）　近世の土師器陶磁器類が少量出土。

76は陶器で急須の蓋と思われる。口径9.0cmを測る。上部には亀形の鈕が付き，白色化粧土を刷毛目状にかけ，その上に乳灰色の釉をかける。また直径4mmの蒸気孔を1ヶ所あける。77は土製品で用途は不明。全長3.9cm，器厚1.5cmを測る。断面は底が丸い台形状，細長く両端が丸味を持つ。指おさえ仕上である。

SK20（Fig. 35，図版11）

H6区で検出した主軸をN—56°—Wに取る土坑。平面形状は隅丸長方形を呈し，規模は長さ1.88m，幅0.88m，深さ38cmを測る。底面は狭く，溝断面形は船底形を呈す。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。出土遺物はなかった。

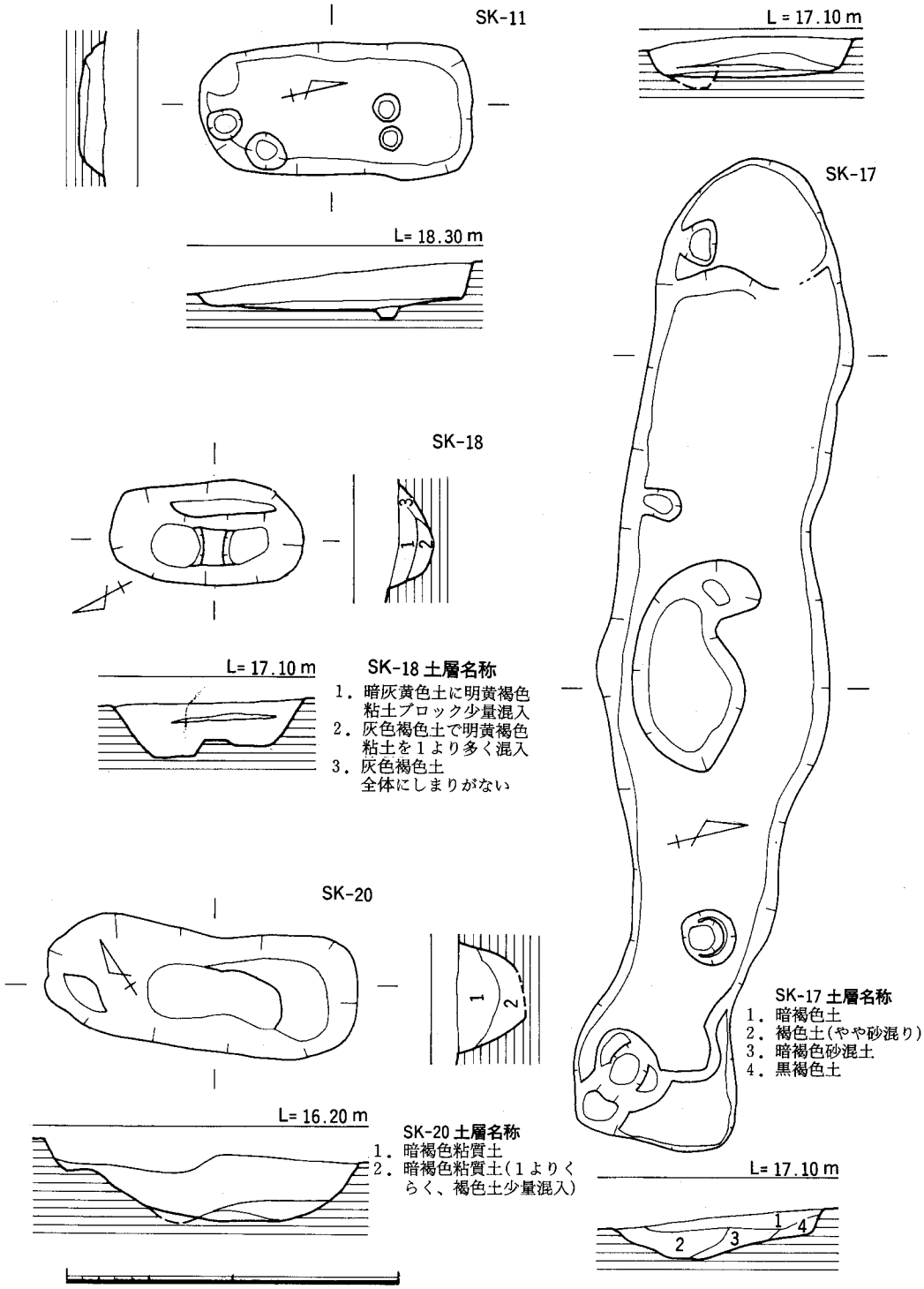


Fig.28　SK-11・17・18・20(1/40)

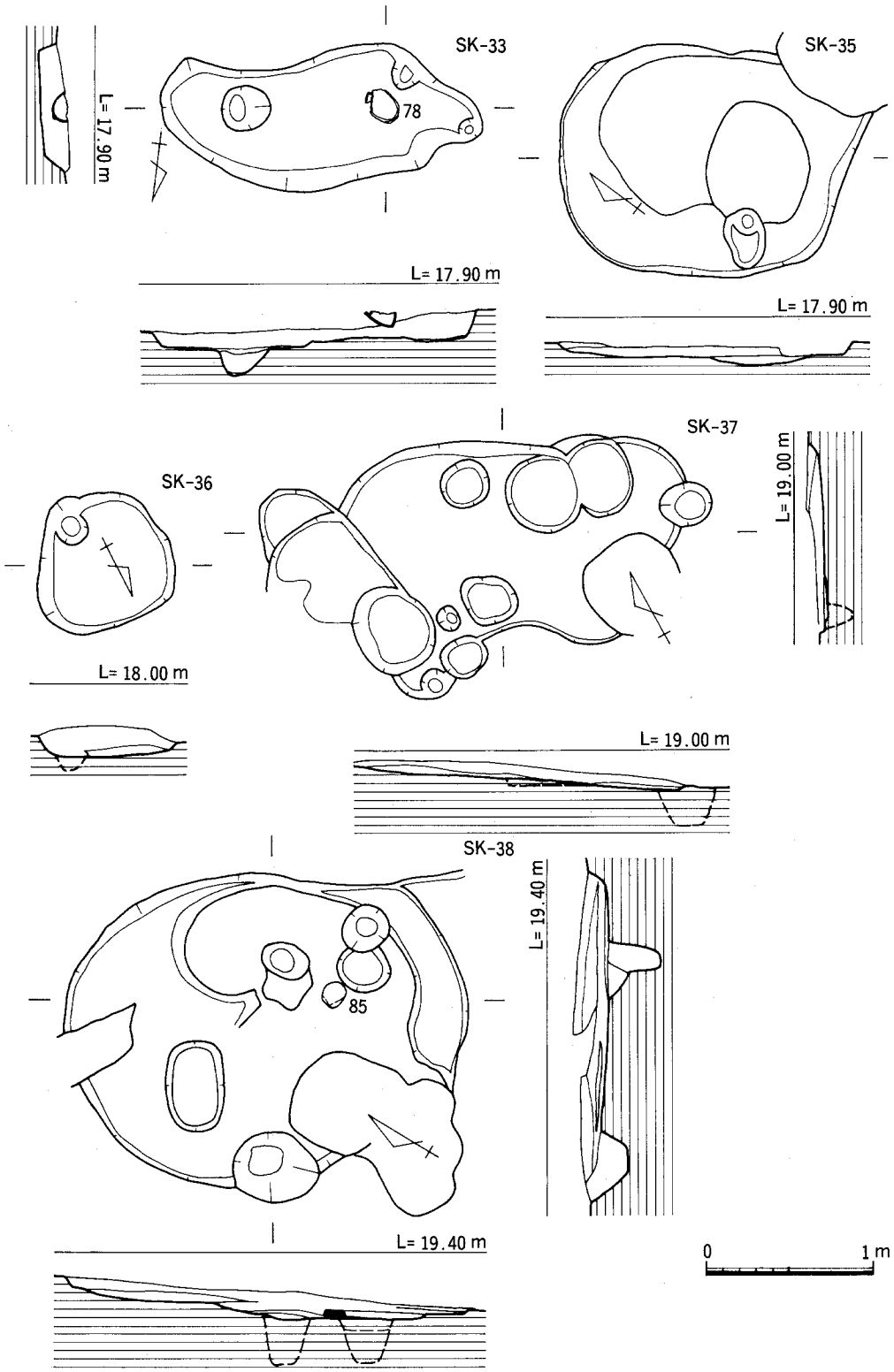


Fig.29 SK-33・35～38(1/40)

表2　土坑一覧表

土坑番号	形態 平面	形態 断面	規模（計測値） 長さ(cm)	規模（計測値） 幅(cm)	規模（計測値） 深さ(cm)	切分関係	時期	備考
SX06							近代	攪乱
SR09	隅丸長方形	逆台形	236	80	22	SE07に切られる	古墳	土壙墓
SK11	隅丸長方形	逆台形	165	82	22～24		古墳	土壙墓か
SK12	楕円形		107	77	26			樹根か
SX13						SD08に切られる		地山の汚れか
SX14								〃
SX15								〃
SK16	隅丸長方形	箱形	238	100	93		近代	焼土坑
SK17	細長い不定形	逆台形	598	73～140	25		古墳	
SX18	長楕円形	U字形	127	64	23～32		近世	両側が深くなる
SK20	隅丸長方形	船底形	188	76	38			
SX25	不定形						近世～	攪乱土坑
SX26	〃							〃
SX27	〃							樹根跡
SX28	〃							〃
SX29	〃							地山の汚れ
SX31								攪乱
SK33	不定形	逆台形	195	78	20		弥生後期	
SK35	楕円形	浅い皿状	188	127	12	SD43を切る	古墳～	
SK38	楕円形	皿状	240	138	14～22		奈良	
SK40	隅丸長方形	皿状	118	83	10			南側が低くなる
SK42	不整円形	逆台形	103	85	18		古墳	炭化物を交える
SR44	隅丸長方形	浅い逆台形	145	62	8～12			土壙墓
SK45	いびつな隅丸長方形	逆台形	90	69	22			焼土壙
SX46								SD43と同一
SX49								樹根か炭火物。焼土交える
SK50	羽子板状	逆台形	135	83	30	SD19に切られる		焼土坑
SK51	いびつな隅丸方形		110	107	20		奈良	西側が1段深くなる
SK52	楕円形	逆台形	81	72	10～14		古墳	
SX54								樹根か
SX55								地山の汚れ
SX56								〃
SX57								自然流路か地山の汚れ
SX63							近代	SK16の掘り方か

SK33（Fig. 29，図版12）

G 5 区で検出した主軸を N—81°—E に取る土坑。平面形状は不定形を呈し，規模は長さ1.85m，幅0.80m，深さ15cmを測る。断面形は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦，東側に直径30cm，深さ15cmのピットがある。埋土は暗褐色粘質土。

出土遺物（Fig. 30，図版18）　弥生土器がわずかに出土。

78は弥生時代後期頃と思われる甕形土器の体底部片。底径9.0cm。復元体部最大径を19.0cmを測る。器壁は磨滅するが，内面には指おさえ痕が残る。色調は淡黄色，胎土は石英粒を多量に含む。

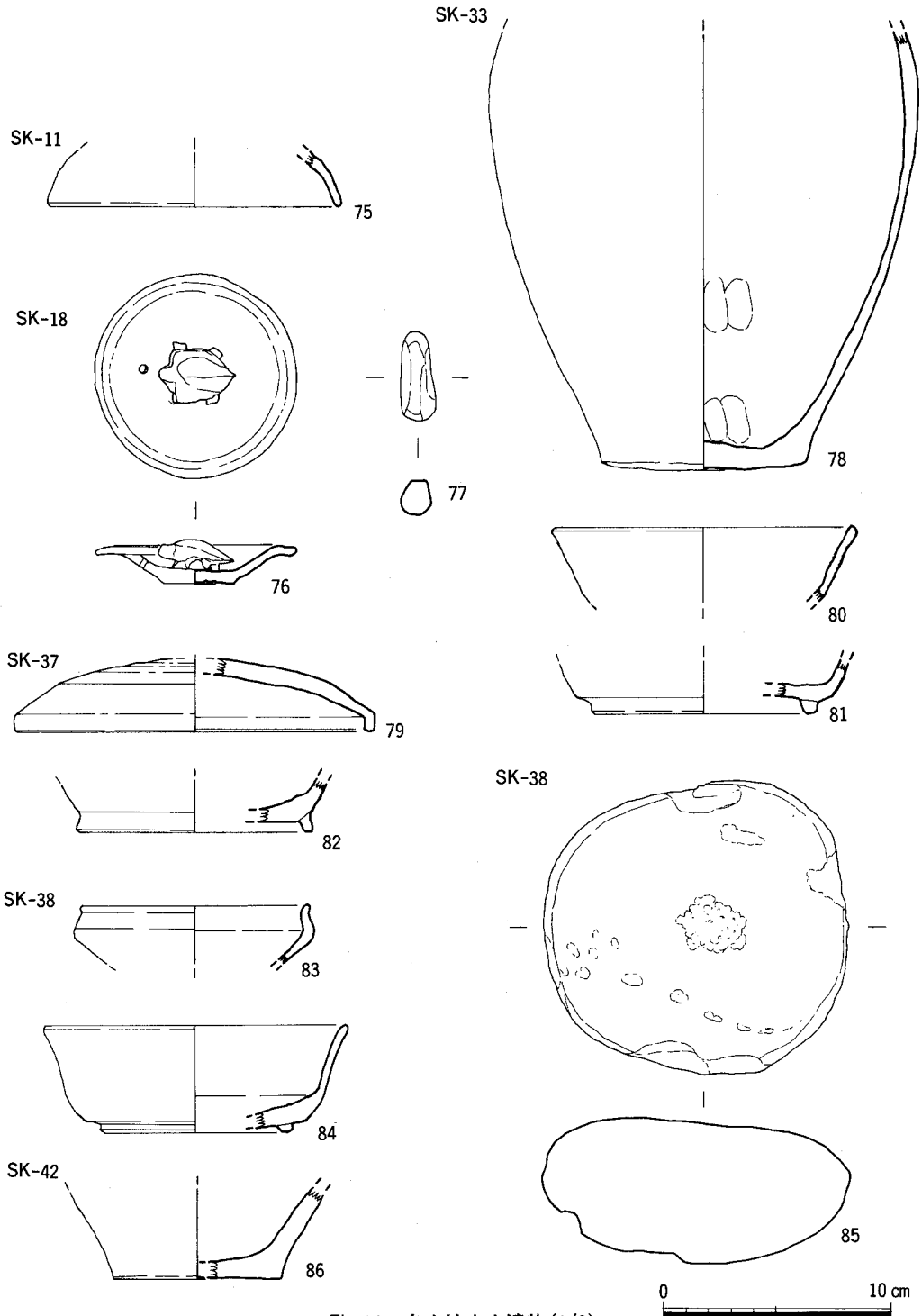


Fig.30　各土坑出土遺物(1/3)

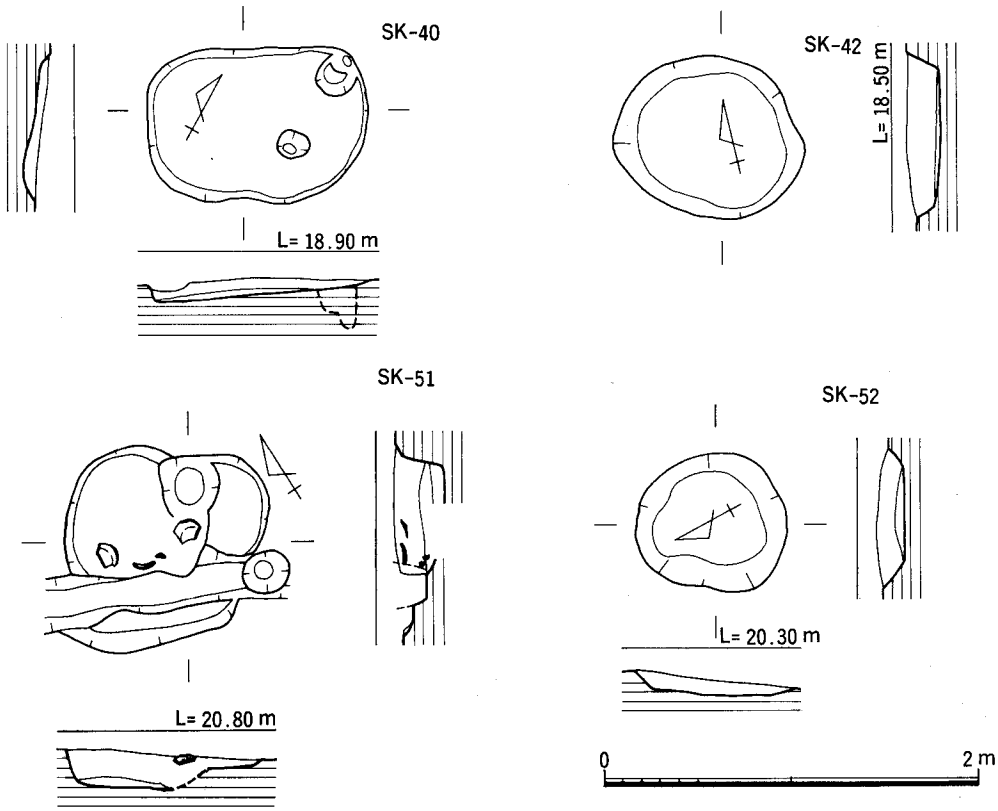


Fig.31　SK-40・45・50・52(1/40)

SK35（Fig. 29）

F・G 3 区で検出した土坑。平面形状は楕円形を呈し，規模は長さ1.88m，幅1.37m，深さ12cmを測る。全体に遺存状況は悪い。底面東側は少し深くなる。埋土は黒褐色土。

出土遺物　少なく古墳時代の土師器片15点出土した。

SK36（Fig. 29）

F・G 6 区で検出した土坑。平面形状はいびつな隅丸方形を呈し，規模は長さ0.85m，幅0.82m，深さ18cmを測る。南東隅に直径15cm，深さ 8 cmのピットがある。埋土は暗褐色土。

出土遺物　弥生時代から古墳時代にかけての土器片が 6 点出土した。

SK37（Fig. 29）

F 4 区で検出した土坑。平面形状は不定形状を呈し，規模は長さ2.56m，幅1.53m，深さ10cmを測る。底面にはピット状の落込みが多く見られ，東側に向って少し傾斜している。埋土は黒褐色粘質土である。

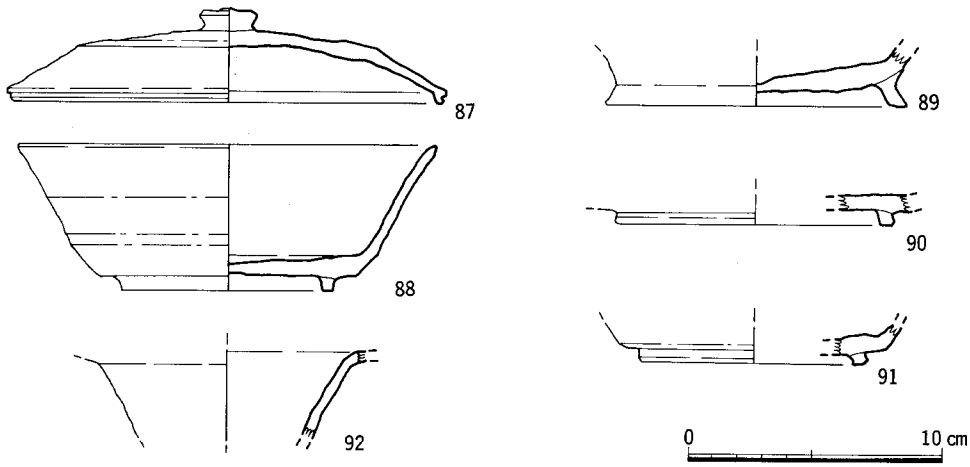


Fig.32　SK-51 出土遺物(1/3)

出土遺物（Fig. 30，図版18）　奈良時代の須恵器が少量と鉄滓１点出土している。

74は坏蓋の口縁部1/3片で，復元口径は16.0cmを測る。比較的平坦な天井部から直角に屈折する口縁部を持ち，口縁端部を水平におさめる。天井部2/3は回転ヘラ削りで，ろくろ回転は時計回り。80～82は高台付杯。80は口縁部1/6片で，復元口径13.0cmを測る。81・82は底部片で，81は1/6片，82は1/10片で，復元口径は87が10.0cm，82が10.4cmを測る。高台は貼付けで，調整はナデ調整。色調は80が淡灰色，81が灰黒色，82が灰色を呈し，胎土はいずれも精良。

SK38（Fig. 29，図版12）

F・G３区の境界で検出した土坑。平面形状は楕円形を呈し，規模は2.40m，幅1.38m，深さ14～22cmを測る。遺構の残りは悪い。また底面は他遺構と切り合い凹凸が激しい。埋土は褐色土で，北西壁際には焼土塊を交えた部分があった。

出土遺物（Fig. 30，図版18）　弥生時代の土器や奈良時代頃の須恵器・土師器片が少量出土。

83は土師器の杯で，復元口径10.0cmを測る。口縁端部は少し内傾する口縁部から少し外へ開き，先端を丸くおさめる。色調は橙色を呈し，胎土は石英粒を少し含む。84は須恵器の高台付杯での1/6片である。口縁端部を欠失するが，復元口径は13.4cmと推定出来る。高台部は貼付けで，内外面はナデ調整。色調は明灰色を呈し，胎土は石英粒をわずかに含む。85は磨石で玄武岩製。最大長13.4cm，最大厚6.2cm，重量150g を測る。全面擦りで，上面に3.0×2.5cmの楕円形状の打撃使用痕が残る。

SK40（Fig. 31，図版12）

G４区で検出した主軸をN－62°－Eに取る土坑。平面形状は隅丸長方形を呈し，長さ1.18m，幅0.83m，最大深10cmを測り，浅くて残りが悪い。埋土は褐色粘質土。出土遺物はなかった。

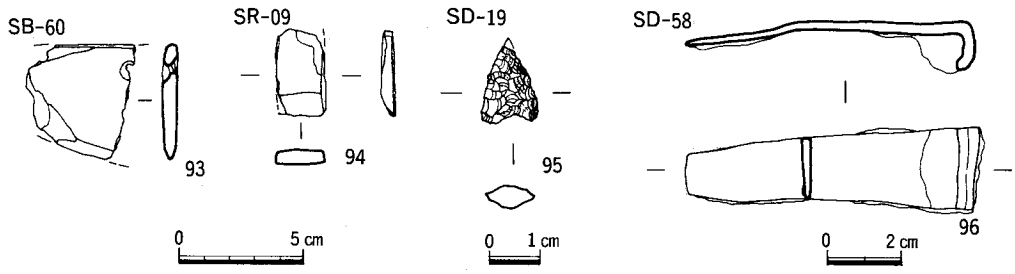


Fig.各遺構出土石器、鉄器(1/3・2/3・1/2)

SK42（Fig. 31）

E・F５区で検出した土坑。平面形状は楕円形を呈し，規模は長さ1.03m，幅0.85m，最大深18cmを測る。断面形は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。西側には長さ1.2mの細長い炭化物と焼土ブロック土層があった。埋土は褐色粘質土で炭化物を交える。

出土遺物（Fig. 30,）　１点出土した。

84は弥生土器の甕形土器底部1/2片で，復元底径6.4cmを測る。器表は磨滅し，調整不明。色調は黄色で，胎土に石英粒子を多く混入。

SK51（Fig. 31，図版13）

F３区で検出した土坑。中央は近代の溝状攪乱によって分断される。平面形状はいびつな隅丸方形で，規模は長さ1.10m，幅1.07m，最大深20cmを測る。底面には２ヶ所ピット状の落込みがあり，東側は10cm程高いテラスがある。埋土は褐色土に黄褐色粘土を混入する。

出土遺物（Fig. 32，図版19）　古墳時代から奈良時代迄の土師器・須恵器の外，弥生土器が１点出土。

87～92は須恵器。87は杯蓋1/2片で，復元口径17.4cm，器高3.7cmを測る。平坦な天井部に釦状の鈕がつく。口縁部は短く直に屈折する。口縁直下に浅い凹線が巡る。天井部は回転ヘラ削り，その他はナデ。88～91は高台付杯。88は1/3片で，復元口径16.6cm，器高5.7cmを測る。サイズから見て87とセットかもしれない。高台は貼付けで，全面ナデ仕上。89は1/3片で，復元高台径12.0cmを測る外に開く少し短い高台が付く。赤焼け土器である。90・91は短い高台で，いずれも1/6片。91は復元高台径9.0cm，91が11.2cmを測る。92は蹠の口頸部片と思われる。器壁は薄く，全体に質はよい。色調は90・91は淡褐色，92は灰色を呈し，胎土は91に石英粒を若干含むほかは精良。

SK52（Fig. 31）

F３区で検出した小形の土坑。平面形状は不整円形で，規模は長さ0.81m，幅0.72m，深さ10～74cmを測る。遺構の残りは悪い。断面形は逆台形を呈す。埋土は褐色土である。

出土遺物　古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量出土した。

ピット出土遺物

SP100出土遺物（Fig. 34，図版13・19）

SP100はG６区で検出した平面形状が楕円形を呈すピット。規模は長さ72cm，幅62cm，深さ８cmを測る。埋土は黒褐色土。遺物は底より浮いて重なって出土した。

98は土師器の椀で，短い高台が付く。高台径は8.0cmを測る。内外面ヨコナデ仕上。99は98の下から出土したうち黒土器の椀。復元口径17.8cm，器高5.6cmを測る。八字状に開く細く高い高台が付き，口縁部は内湾気味に外反する。色調は98が橙色，99が外面淡橙黄色を呈す。胎土は98が石英・雲母・褐色微粒子を多く含む。

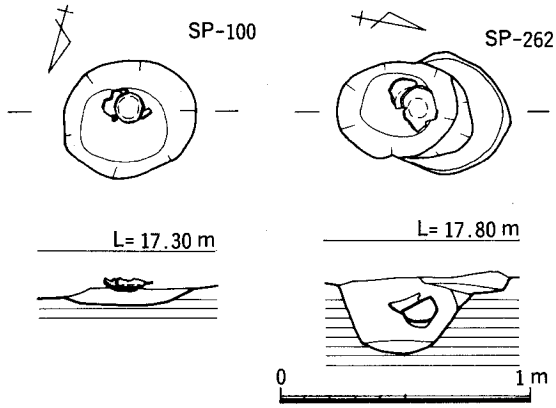


Fig.34　SP-100、262(1/30)

SP262出土遺物（Fig. 34，図版13・19）

Ｆ６区で検出した平面形状が不整楕円形を呈すピット。規模は長さ68cm，幅50cm，深さ33cmを測る。

100はやや北寄り底より15cm程浮いた位置で検出した。丸い体部に短く広い口縁部が付く土師器の壺の1/2片である。復元口径12.6cm，器高16.0cmを測る。器表は磨滅するが，体外面に木目直交の横位の叩き，又は格子目叩き，内面には指おさえ後，平行叩きを加えた痕跡がかすかに残る。色調は橙色で，石英・黄色粒子を多く含む。器形から７世紀前後の時期であろうか。

その他のピット出土遺物（Fig. 36，図版19）　101はSP ４出土。弥生土器の甕形土器底部1/6片で，復元口径10.4cmを測る。器壁は磨滅し，調整不明。色調は淡橙色で，胎土に石英粒を少し含む。102はSP37出土。弥生土器の甕形土器底部1/4片で，復元底径8.0cmを測る。内面に指おさえ痕が残る。色調は灰橙色で，胎土は砂粒を多く含む。103はSP52出土。須恵器の杯蓋小片で，口縁部内面に小さな断面三角形のかえりが付く。色調は暗青灰色。104はSP85出土。弥

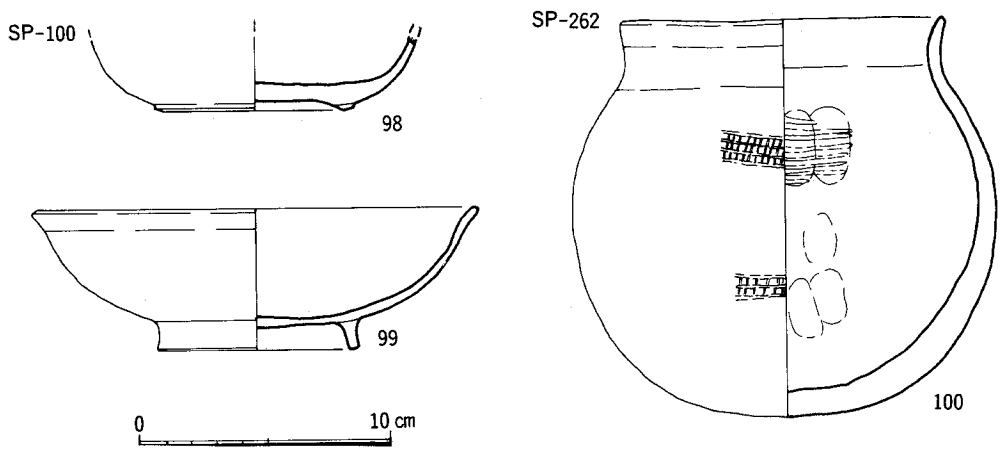


Fig.35　SP-100・262 出土遺物(1/3)

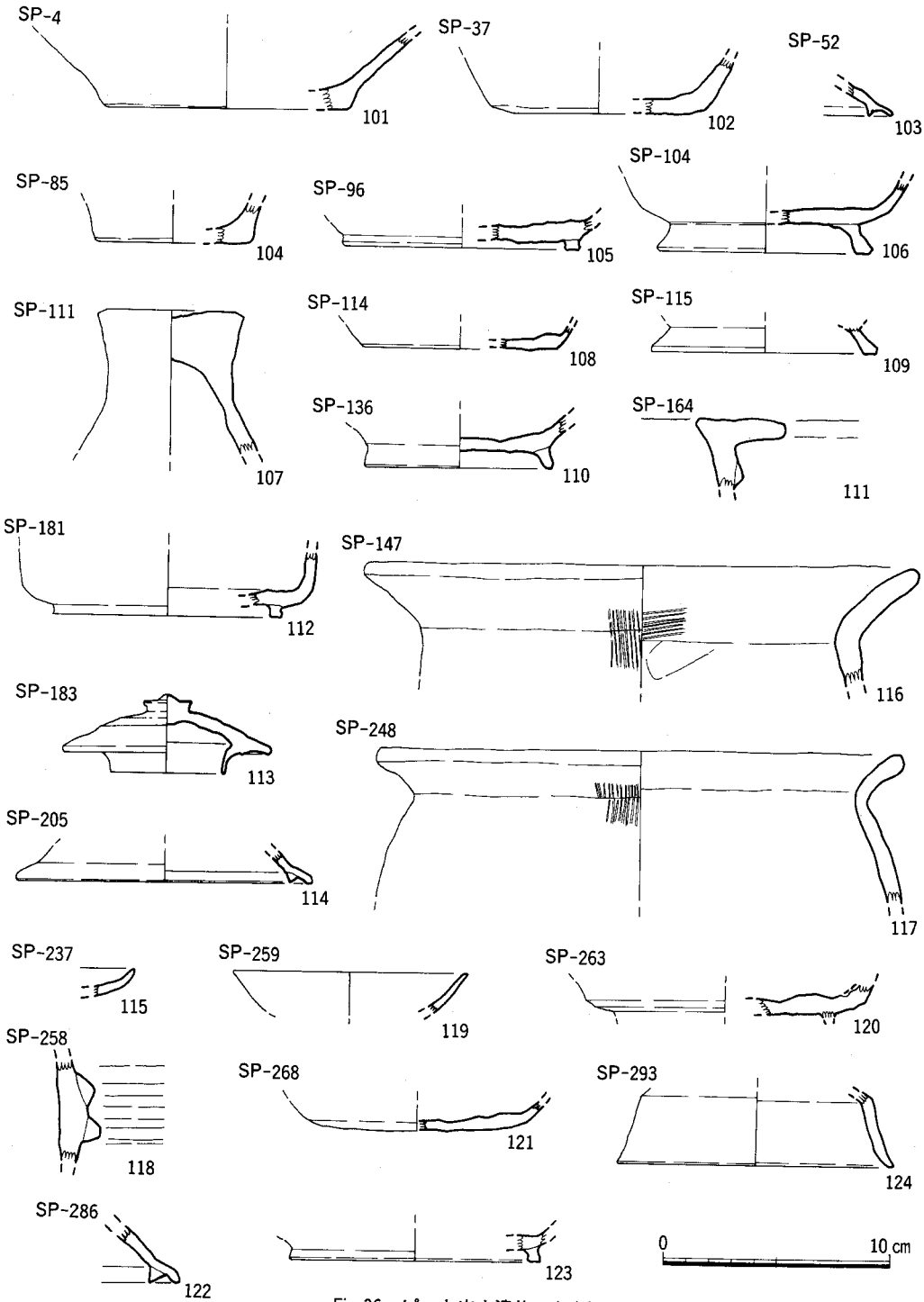


Fig.36　ピット出土遺物Ⅰ(1/3)

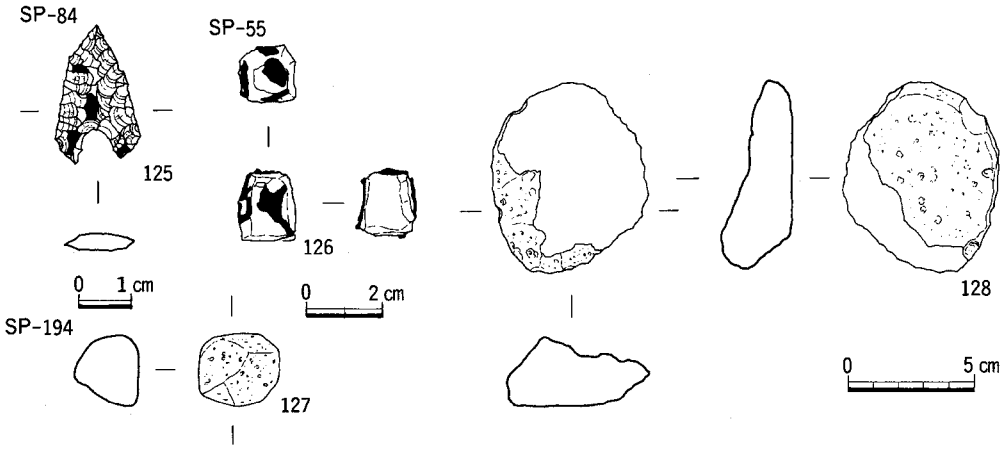


Fig.37　ピット出土遺物Ⅱ(2/3・1/2・1/3)

生土器の甕形土器底部片。復元底径9.0cmを測る。色調は橙褐色。105はSP96出土。奈良時代の須恵器の高台付杯の底部1/6片で，復元高台径は10.4cmを測る。調整はナデ仕上。色調は淡灰色。106はSP104出土。7世紀後半代の須恵器の高台付杯の1/3片で，八字状に開く高い高台が付く。復元高台径は9.4cmを測る。色調は暗灰色。107はSP111出土。弥生土器の蓋形土器と思われる。器壁は磨滅し調整不明。色調は淡橙黄色で，胎土に石英粒を多く含む。108はSP114出土。須恵器の杯1/4片。全面ナデ仕上。色調は明灰色。109はSP115出土。須恵器の高台付杯の高台部1/4片。復元高台径10.0cmを測る。色調は灰黒色。110はSP136出土。土師器の高台付椀で，復元高台径は8.2cmを測る。器壁は磨滅し，調整は不明。胎土に褐色粒子を多量に含む。111はSP164出土。弥生時代中期中葉の甕形土器の口縁部片。胎土に石英粒子を多く含む。112はSP181出土。奈良時代の須恵器の高台付杯1/8片で，復元口径10.0cmを測る。調整はナデ。色調は灰黄色。113はSP183出土。須恵器の蓋のほぼ完形品で，最大径10.1cm，器高3.4cmを測る。天井部1/2は回転ヘラ削りで，ろくろ回転は時計回り。天井部は灰かぶりする。壺用であろう。114はSP205出土。5類の須恵器杯蓋の小片。復元口径13.0cmを測る。115はSP237出土。土師器の皿の小片で，底は少し丸底と思われる。116はSP247出土。奈良時代の土師器甕口縁部1/6片で，復元口径24.6cmを測る。体外面はタテ刷毛，口縁内面はヨコ刷毛，体内面はヘラ削り。色調は橙黄色で，胎土は石英粒子を多く含む。117はSP248出土。土師器の甕口縁部1/4片。復元口径23.0cmを測る。器壁は全体に荒れ，口頸部にタテの刷毛目がかすかに認められる。色調は橙色で，胎土は石英・褐色粒を多量に含む。118はSP258出土。弥生土器の甕か壺の突帯部。119はSP259出土。白磁の皿口縁部1/4片と思われる。復元口径10.4cmを測る。胎土・色調は白色を呈す。120はSP263出土。奈良時代の須恵器高台付杯1/4片と思われる。高台部は欠失する。121はSP268出土。須

恵器の杯1/4片で，調整は内外面ナデ調整。色調は淡青灰色を呈す。122・123はSP286出土。7世紀後半～8世紀前半代のものである。122は杯蓋の口縁部小片，色調は赤褐色を呈す。123は高台付杯の高台部片で，復元高台径12.0cmを測る。色調は青灰色を呈す。124はSP293出土。須恵器の蓋部1/8片で，復元口径12.2cmを測る。内外面ヨコナデ。色調は明灰色を呈す。125はSP84出土。黒曜石製の石鏃で，色調は少し白っぽく透明感がある。全長2.7cm，最大幅1.7cm，器厚0.3cm，を測る。126はSP55出土。分銅形を呈す金属製の錘である。高さ1.6cm，底面は1辺が1.5cmの方形で，重さ19gを測る。表面は緑青の銹面が残る。127はSP194出土。小さなおむすび形の石製品。1辺1.9×2.1cm，高さ1.6cmを測る。玄武岩製で，各面は擦りで磨滅する。玩具の類であろうか。128はSP286出土。軽石製の浮子で，最大長7.6cm，最大幅2.6cm，重量26gを測る。表面の1/2は欠失する。2側片に紐かけの抉りが残る。

包含層・遺構面・表採遺物（Fig. 38，図版19）

129～132は包含層の遺物。129・130は土師器で，F3区出土。129は土師器の壺の口縁部1/5片。復元口径15.0cmを測る。磨滅がひどく調整不明。体内面に指おさえ痕が残る。130は短頸壺と思われる口縁部1/8片。復元口径23.0cmを測る。器壁は磨滅し調整不明。色調は129が浅黄橙色，130がにぶい橙色を呈す。胎土はいずれも砂粒を多く含む。131はH6区出土。須恵器の高杯脚部1/8片。復元脚端径10.5cmを測る。内外面ヨコナデ調整。色調は暗赤褐色，胎土は精良。須恵5類か。132は地区不明。越州窯系青磁の椀1/3片。越磁のI類で，外底部に2ヶ所目痕が残る。内外面オリーブ色の釉がかかり，焼きは良い。

133～139は遺構面出土。133～135は須恵器。133はF3区出土。杯蓋口縁部1/8片。復元口径18.0cmを測る。口縁部は短く直に屈折する。色調は灰色。134はG5区出土。杯蓋の口縁部1/6片で，復元口径14.8cmを測る。口縁部内面に嘴状のかえりが付く。天井部1/2は回転ヘラ削り，その他はナデ。ろくろ回転は時計回り。135はF3区出土。奈良時代の高台付杯で，復元高台径13.0cmを測る。調整はヨコナデで，内面にはヘラ状の工具痕が残る。畳付には下敷の圧痕が残る。136はF3区出土。土師器の杯底部1/4片。調整はナデ。色調は淡黄色，胎土は小砂粒を多く含む。137はI3区出土。白磁椀口縁部1/8片。復元口径16.0cmを測る。にぶい緑灰色釉がかかる。口縁部内面には1条の沈線が廻る。138はF6区出土。陶器の擂鉢1/3片。復元口径19.0cm，器高8.0cmを測る。内面は2.5cm幅13本単位の目の細い条線が入る。暗赤褐色の褐釉が内外面にかかるが，底部は露胎でヘラ削り。139はE7区出土。白磁のまねき猫で器高7.2cmを測る。型作りで，側面に型合せの痕跡が残る。目と首輪の部分は黄色，ひげは黒色で彩色している。底部は露胎。140～145は石鏃。140はG6区出土。サヌカイト製と思われ，現存長2.6cm，最大幅1.9cm，厚さ0.4cm，を測る。141はF4区包含層下層。黒曜石製で，基部の抉りは深い。先端は欠失する。現存長2.4cm，最大幅2.2cm，厚さ0.45cmを測る。142は包含層下層。黒曜石製で先端と基部を欠失する。現存長1.7cm，最大幅1.6cm，厚さ0.45cmを測る。143は調査区東壁出土。

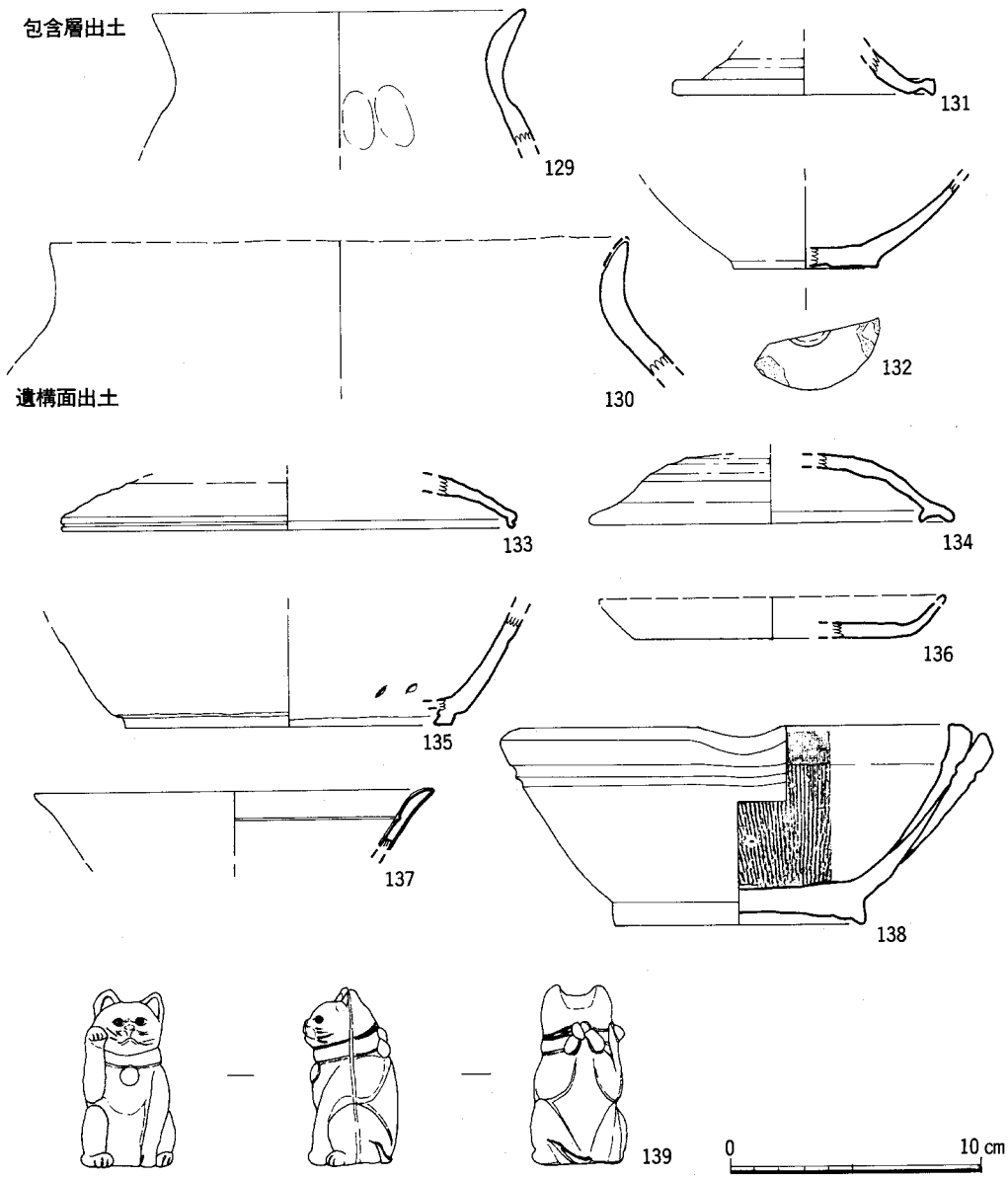


Fig.38　包含層・遺構面出土遺物Ⅰ(1/3)

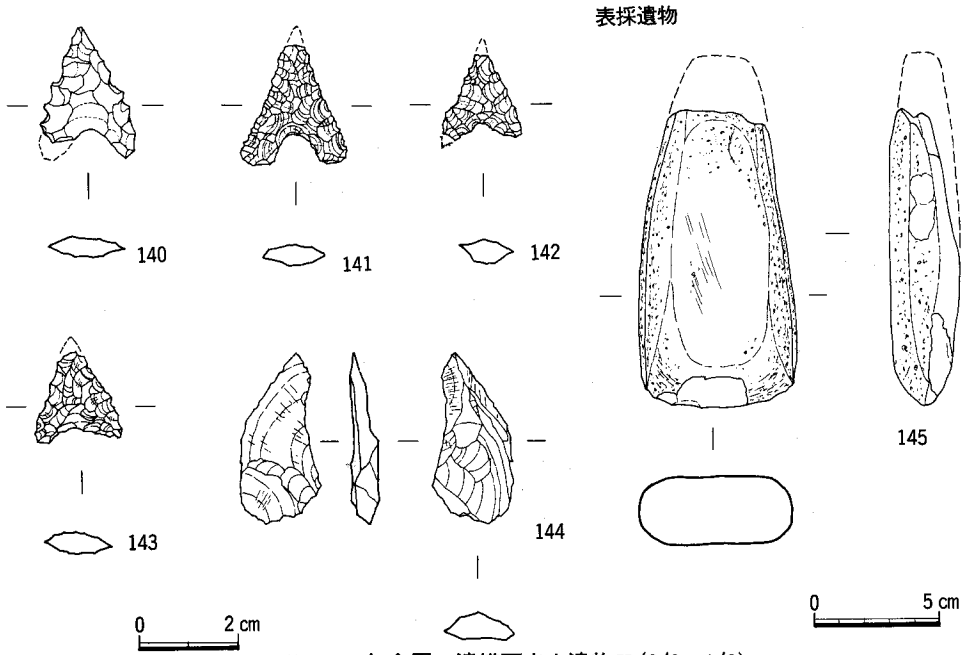


Fig.39　包含層・遺構面出土遺物Ⅱ(2/3・1/3)

黒曜石製で先端を欠失する。現存長1.8cm；最大幅1.7cm，厚さ0.4cmを測る。144はＤ４区遺構面出土。黒曜石の剝片で，一見ナイフ形石器のように見える。加工面の風化状態は古い様相を示す。145は調査区東側の水ヶ浦池付近の丘陵部の切り通しで採集した。玄武岩質の石斧で，刃部は蛤刃をなす。現存長11.8cm，最大幅6.3cm，最大高2.8cmを測る。

３．飯倉６号墳（SX74）の調査（Fig. 43・44，図版14・15）

福岡市文化財分布地図によって飯倉６号墳とされていたため，発掘調査を行なった。調査区ではＣ３区にあたる。現況は瓢形の墳丘を持ち，庭の築山となっていた。墳丘の崩れは著しいようであった。調査時には移転していたが，屋敷神としてお稲荷さんが祀られていた。古墳という事で，調査を行なったが，意外にも明治時代以降と考えられる石組遺構を検出した。

墳丘の規模は東西９ m，南北５ m を測る。盛土工程は２段階に分かれる。１段階は石組壁面上端迄一旦盛り上げ，灰白色粘土を用いて，石組をとりまくように盛っており，その内側を掘方としている。２段階はその上に褐色土や橙色の地山粘土などで，ざっと盛り上げている。盛土の高さは1.8m を測る。

主体部は地山面を少し掘り込むような具合で積み上げている。石組は本体部と入口部で構成

されており，使用石材はすべて砂岩である。本体部の規模は長さ2.6m，幅2.5m，高さ1.0mを測り，入口部は長さ1.3m，幅0.9mを測る。両方合せると全長は3.4mを測る。本体部の平面形は長さ1.95m，幅1.65mとやや縦長の方形を呈す。石組は横長の切石を用い，横位に積み上げ，内面は面をきれいに整えている。裏込めは壁石と壁石の間には粘土をつめるが，全体には小割石などをつめ雑な造作である。天井部は長さ2.1m，幅0.3〜0.45m，厚さ25cmの細長い角石を6本並べて天井としている。床面は基盤の地山面上に暗灰色砂が約10cm堆積しており，その上面は粘土性堆積物がたまっていた。床面西側には長さ0.95m，幅20cm，高さ40cmの長方形の切石を立て，3ヶ所に間仕切っている。北壁には床面より30cm上の所に，直径15cmの陶管の排水口がある。その下には1辺20cm，高さ15cmの方形の切石が置いてあった。東南隅には入口部より続く階段がある。入口部は土を2段目迄盛った段階で作っており，長さ80cm，幅40cm位の長方形の石材を側石として，本体部の天井石の上端に合うように揃え，その上に長さ50cm，幅35cm位の長方形の石材を3個コ字状に組み合せている。本体部への入口は南端の天井石の一部を半円状に切り取って入口としている。その幅は15cm位である。階段部は幅20cm，長さ50cm，高さ15cm前後の細長い角材を5段に積んで，階段としている。

出土遺物（Fig. 40・42，図版19）　盛土中より古墳時代から近代にかけての雑多な遺物が出土している。須恵器・土師器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・近世瓦・レンガブロック・鉄滓・コークス・硯・土製品？などが多数出土した。石組内からの出土はない。

146は陶器で高取焼の竹節を模した瓶。底部1/4片で，復元口径8.8cmを測る。体外面には黄灰色の釉がかかるが，釉の発色は良くない。147は素焼の灯明皿。底径5.0cm，受皿部口径7.8cmを測る。底部はヘラ切り，色調は橙色で胎土に細砂を含む。148は染付の盃。2/3片で口径6.5cm，器高2.5cmを測る。149は須恵器の小破片，⊕の叩きが加えられている。胎土に小砂粒を含む。150は玩具と思われる土製品。ヘラで文様を削り出している。151は長方形の硯。陸部の一部で粘板岩製である。現存長5.7cm，幅3.1cmを測る。152は銭貨。江戸時代の『寛永通寶』である。153は石鏃。石質はサヌカイトに近い。基部の抉りはなく，砲弾形を呈す。全長3.1cm，最大幅1.9cm，厚さ0.4cmを測る。全体に風化が著しい。

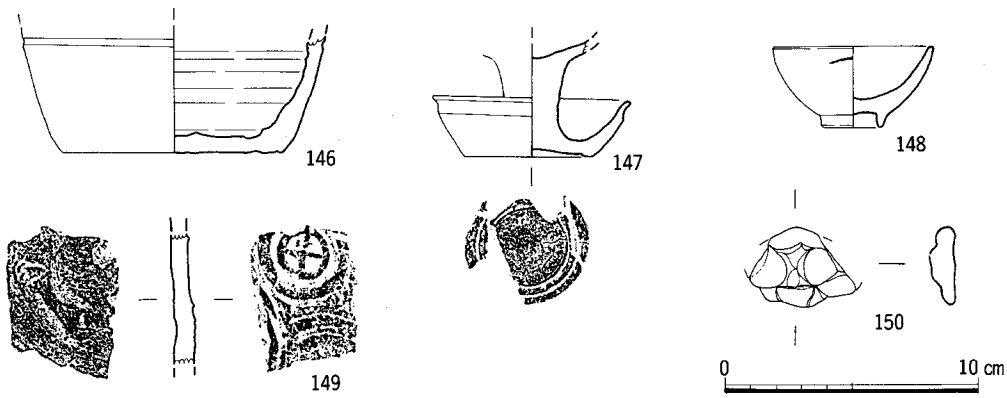


Fig.40　出土遺物Ⅰ(1/3)

4区
4トレンチ
1区
3トレンチ
23.235 m
23.0 m
22.50 m
1トレンチ
22.0 m
21.672 m
2区
3区
21.50 m
2トレンチ
0
4 m

Fig.41　6号墳現況図(1/100)

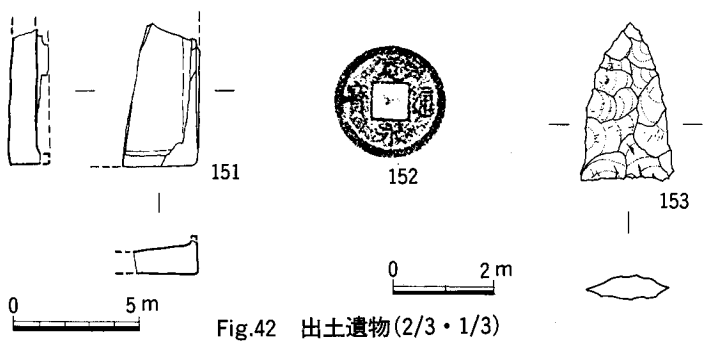
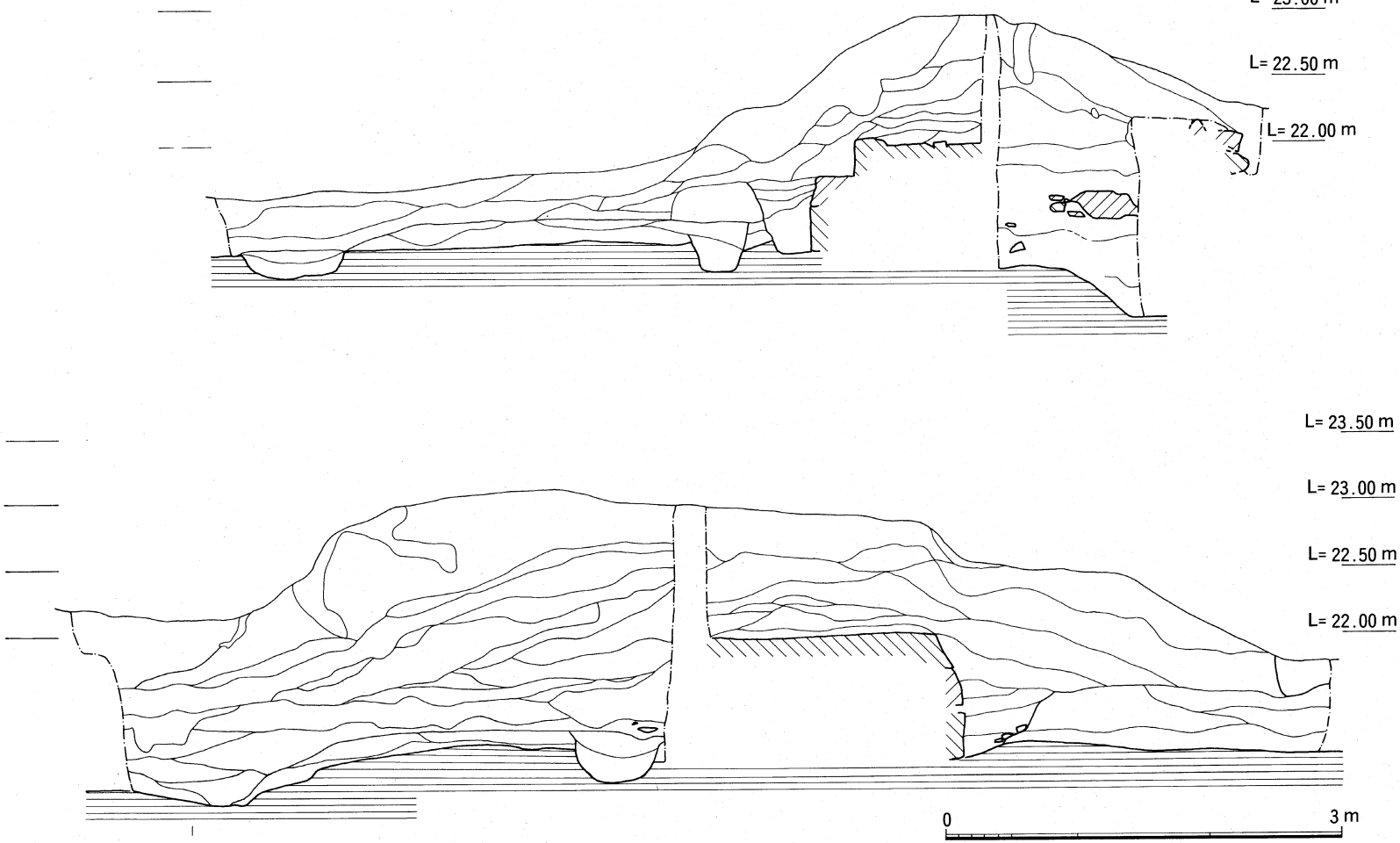


Fig.42　出土遺物(2/3・1/3)

Fig.43　SX-74 墳丘土層図(1/40)



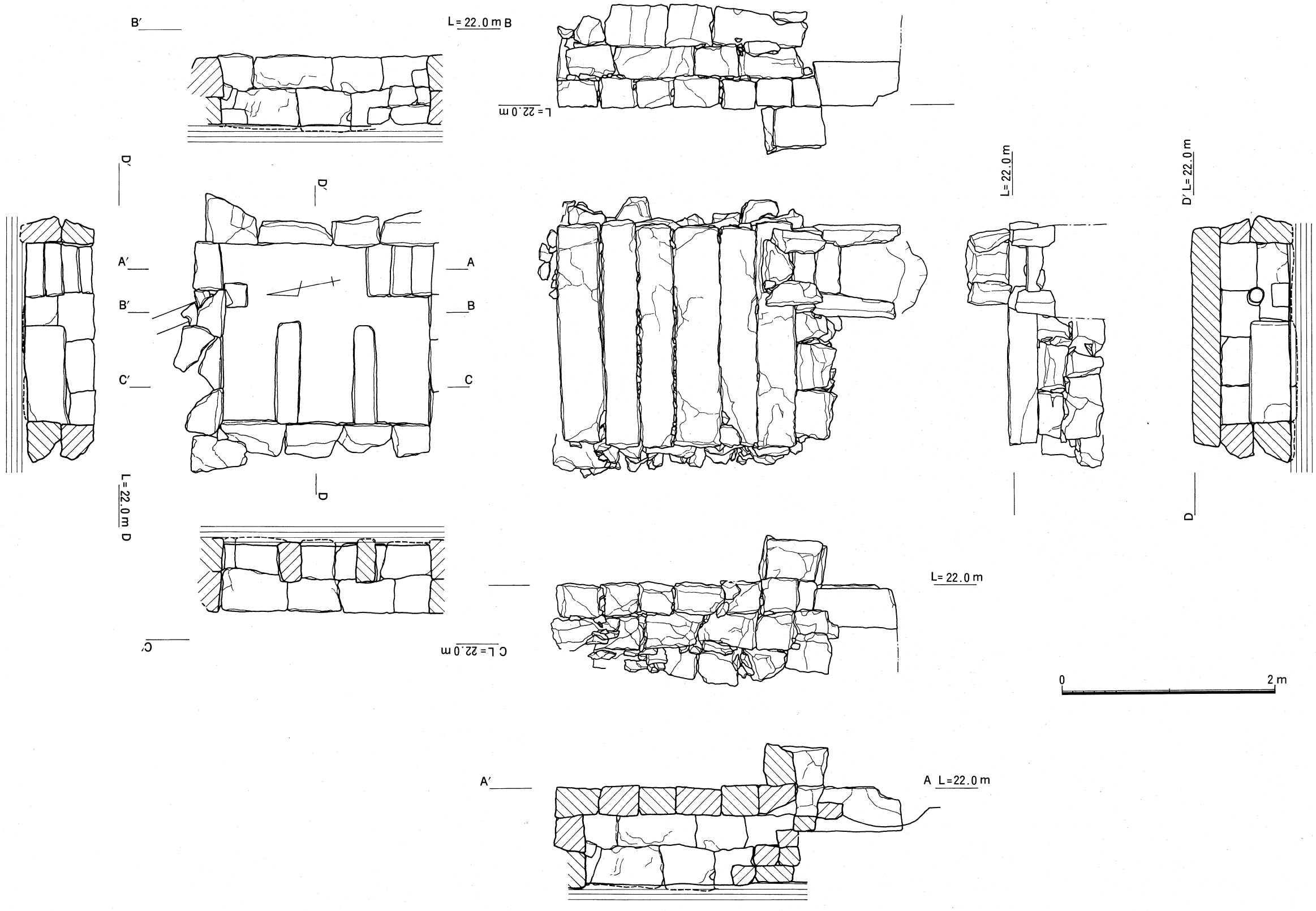


Fig.44　SX-74 石組実測図(1/40)

4．まとめ

以上調査の成果について述べたが，ここでは各遺構毎について若干のまとめを行ないたい。

竪穴住居址は1棟検出した。方形プランで4本主柱の住居である。出土遺物は少なく，図化しえたものは3点で，いずれも弥生時代後期頃の土器である。本来ならば弥生時代としたいが，平面プランを見ると方形の極めて企画化された形態で，小型化しており，古墳時代後期以降奈良時代にかけての住居に見られるような形態である。しかし須恵器片は1点もなく，その時期を予想させるものはない。ただ北側の奈良時代の土坑SK—51や建物SB—60などから考えると遺物はなくてもその時期の可能性もある。

掘立柱建物は全部で15棟検出した。I類は主軸を北から西に振るSB—34・66など，II類は東西又は南北方向に主軸を取るSB48・60・62・65など，III類は北から東へ振るSB—59・64・69，SA—73などの3類に分類出来る。I類はSC—41とも同一方向である。SB—34の斜面上位の妻側にコ字状に巡る弥生時代中期末から後期初頭の土器を主に含む小溝（小溝には須恵器の細片を2点含むが，混入の可能性が強い）があり，これがSB—34に伴うものであればSB—34は弥生時代の掘立柱建物となる。弥生期の掘立柱建物は数は少ないものの，市内でも席田久保園遺跡，吉武高木遺跡[註17]，那珂遺跡[註18]，比恵遺跡[註19]などで検出されている。[註20]III類は柱穴が比較的小さく，形態もいびつなのが多い。中世に埋没したと考えるSD—03をこの類型のSB—64が切り込んでおり，その時代以降の時期が考えられる。

溝は，16条検出したが，大半が自然流路と考える。SD—03が一番古く，弥生時代後期後半代の土器が溝底に廃棄されていた。この溝は一度後期後半頃に溝半端まで埋まり，その後中世迄徐々に埋ったものである。溝底は南東方向にだらだらと深くなり，北側立上りは明瞭な転換点がない。溝でなく，道の可能性もある。SD—01はSD—02に続く溝で，丘陵尾根筋を直交するような溝で，奈良時代から中世迄の遺物を含む溝である。SD—02は一段下った南東側を矩形に回る溝で，南東低地部を造形する際に作った近世から近代にかけての排水溝である。

土壙墓は2基検出した。SR—09は古墳時代後期6世紀後半代のもので，須恵器の副葬品を伴っていた。一基だけ単独で検出したが，周辺に群集するのか，単独であるのか，判断は出来ない。このように須恵器を副葬した土壙墓は，市域では那珂遺跡群第30次調査で1基，干隈熊添古墳群で1基[註21]などがある。那珂第30次調査では，杯身，蓋のセットが足元に副葬，頭位に短頸壺，高杯が供献[註22]されていた。干隈熊添古墳ではV期の杯蓋が1点供献されていた。SR—44は出土した土師器皿の形態から太宰府における土師器編年の11世紀頃のものに当てる事が出来る。

土坑は30基検出したが，近現代の攪乱，地山の汚れなども多い。時期の分かるもので一番古いのはSK—33で弥生時代後期，奈良時代のものはSK—37・51などである。南東側に焼土坑2基を検出したが遺物がなく，時期は不明だが，SK—50は古墳から奈良時代迄の遺物を含むSD

—19の下で検出されており，同時期かそれより古い時期であろう。

井戸は3基検出したが，いずれも近世以降。SE—07以外は浅く，湧水がなく，井戸としてほとんど使用されず，すぐ廃棄されたものであろう。SE—07は素焼の馬形や人形が出土しており，馬形を用いた祭祀がこの時期迄行なわれている事がわかった。

以上時代毎にまとめを行なうと弥生時代の遺構はSD—03，SK—33が主で，それにSB—34，SC—41が加わるかもしれない。古墳時代の遺構はSR—09のみ，奈良時代はSB—60，62，SK—37，51とSK—50，古代末中世から近世にかけてはSR—44，SD—01，SA—73，SB—59，64などである。

飯倉6号墳については調査の結果，古墳でない事が判明し，遺構番号をSX74とした。石組の使用石材が庭の縁石に用いられている石と同じ砂岩であり，庭の造成と一緒に作られたものである。石組内に陶製の土管が使われているが，この種の土管は普通常滑焼を代表するものであり，常滑における土管は明治時代の前半代から大量生産化が始まっている。(註23) この石組は明治時代頃に構築された可能性が強い。

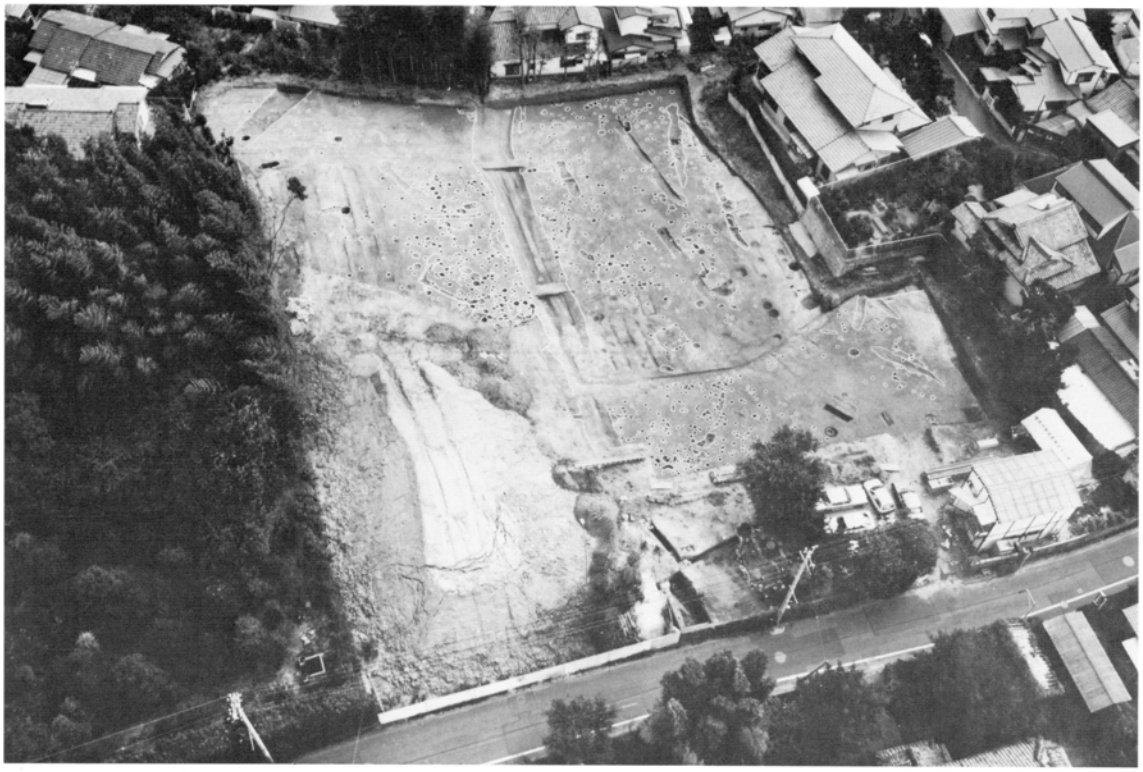
今回の調査は飯倉C遺跡群内の初めての調査であり，今回の成果で遺跡の性格を語るという事はとうてい出来ない。今後の周辺の調査の成果に期待したい。

註

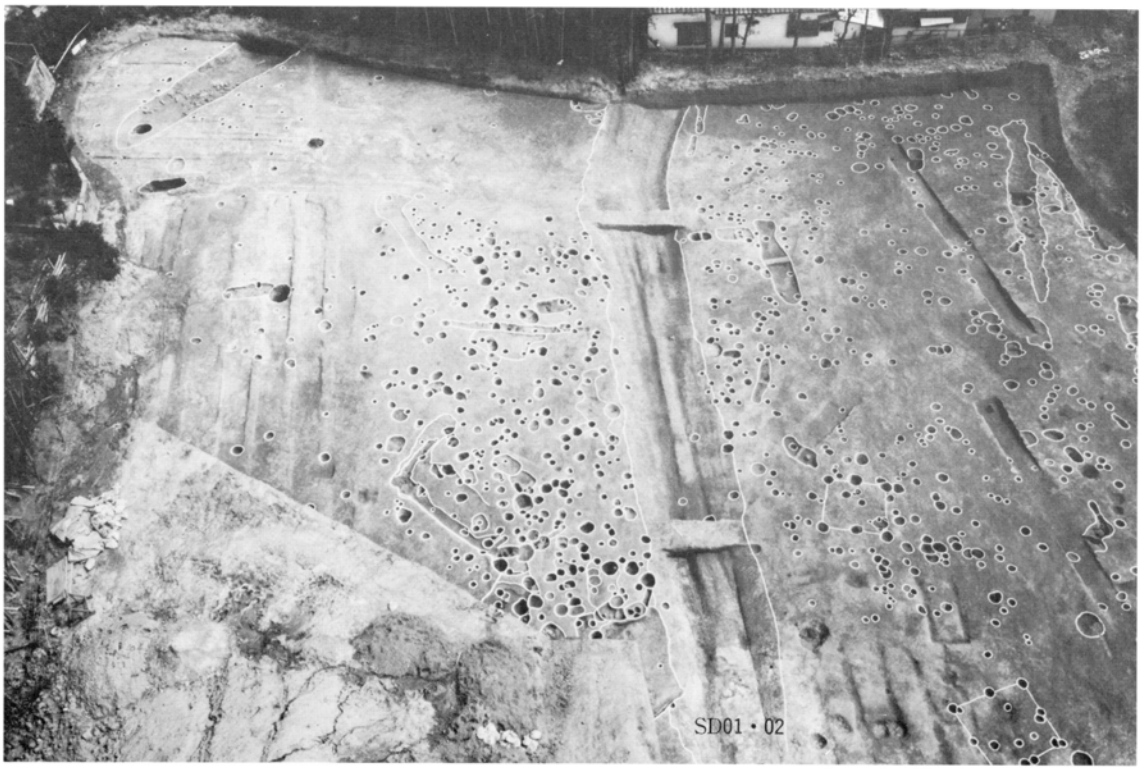
註1　角川書店『福岡県地名大辞典』1988年
註2　福岡市教育委員会『神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978年
註3　昭和53年度調査
註4　福岡市教育委員会『浄泉寺遺跡』1974年
　　福岡市教育委員会『浄泉寺 —遺構編—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集　1982年
註5　福岡市教育委員会「カルメル修道院内遺跡調査報告書」『京ノ隈遺跡』1976年所収
註6　福岡市教育委員会『西部地区埋蔵文化財調査報告II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第213集
註7　福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第　集　1969年
註8　昭和53年と63年に調査が行なわれている。
註9　福岡市教育委員会『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　1976年
註10　註7と同じ
註11　註2と同じ
註12　平成元年度調査，2年度報告書刊行予定
註13　福岡市教育委員会『片江辻遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集　1977年
註14　日野尚志「筑前早良郡家について」『牟田多遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集19
註15　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅰ～Ⅶ』
註16　福岡市教育委員会『席田遺跡群久保園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集　1983年
註18　昭和58年度調査
註19　福岡市教育委員会『那珂遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集　1987年
註20　福岡市教育委員会『比恵遺跡 —第6次調査・遺構編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集　1983年
註21　平成2年度調査。常松幹雄氏のご教示による。
註22　熊添古墳調査会編『干隈熊添古墳』1985年
註23　常滑市誌編さん委員会『常滑窯業誌（常滑市誌別巻）』昭和49年

図　　版

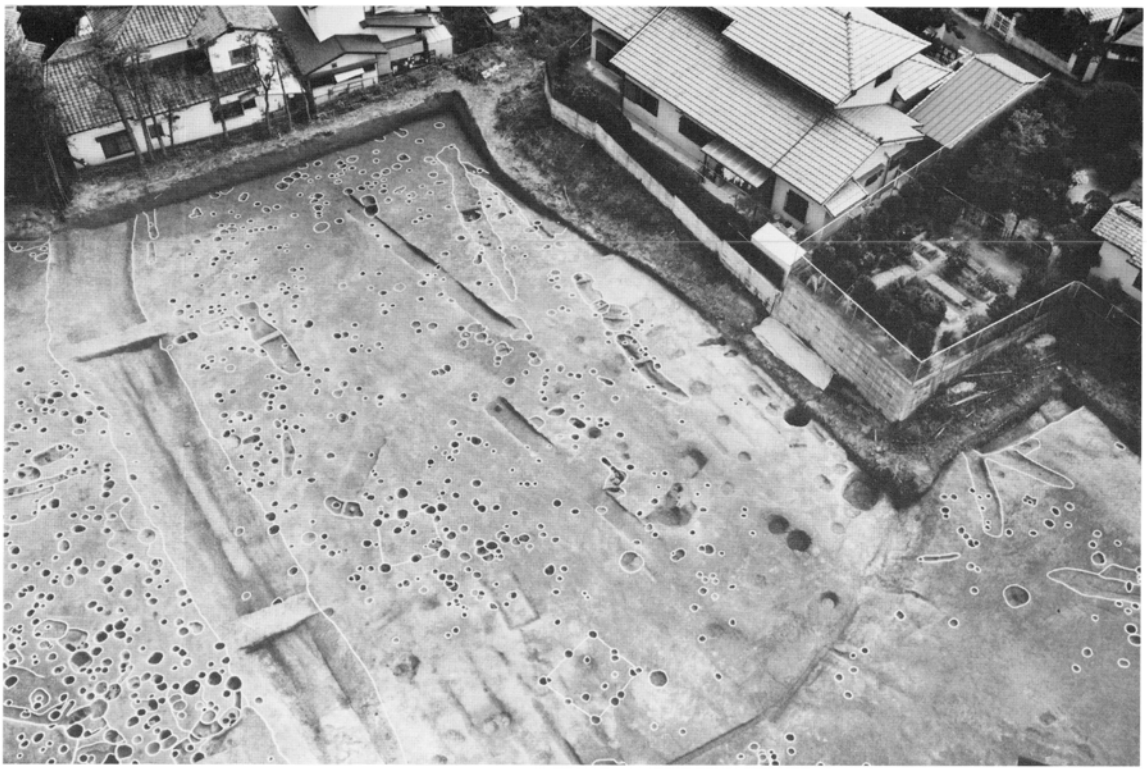
図版　1



(1) 調査区全景（北西から）



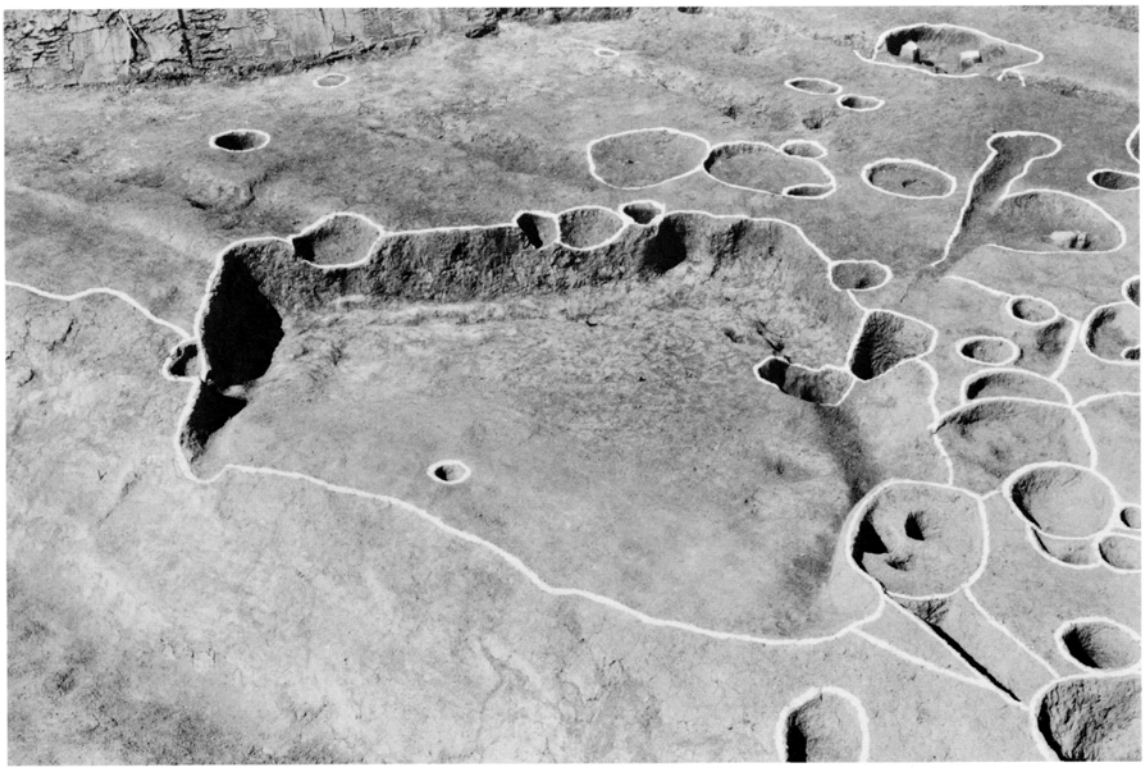
(2) 調査区東側及びSD01・02（西から）



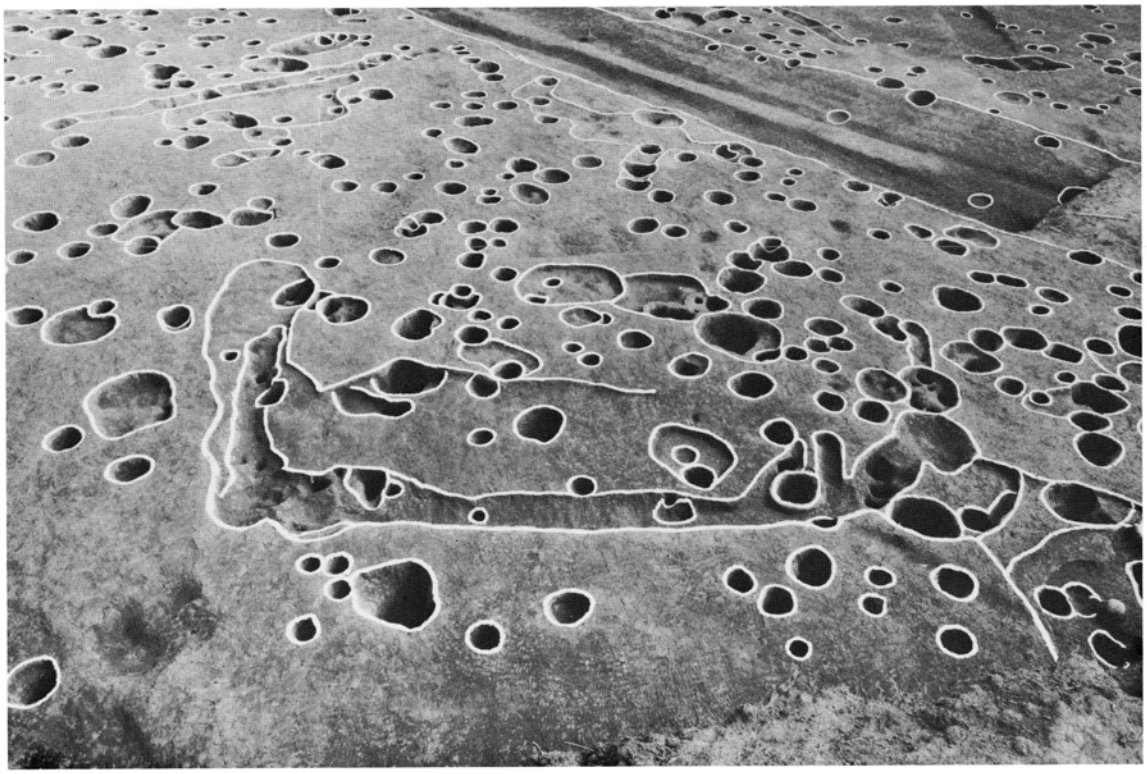
(1) 調査区南東側（北から）

(2) 調査区西側（西から）

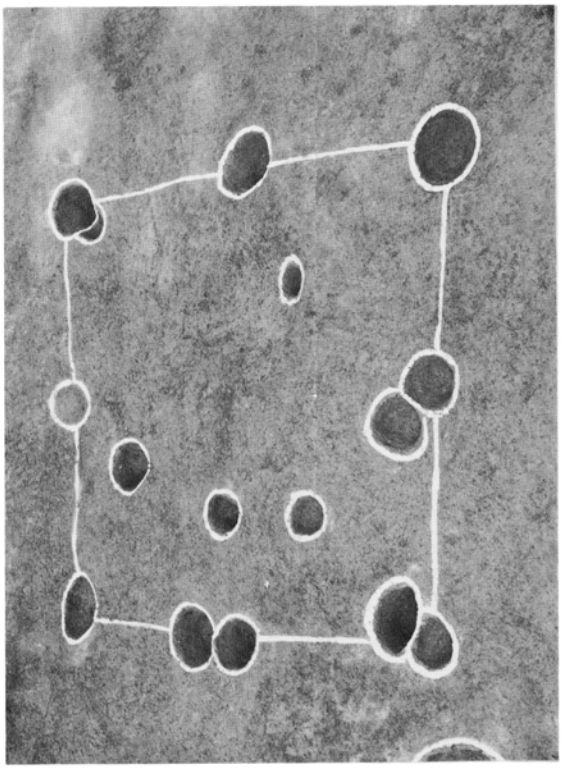
(1) 調査区南東隅土層（北から）



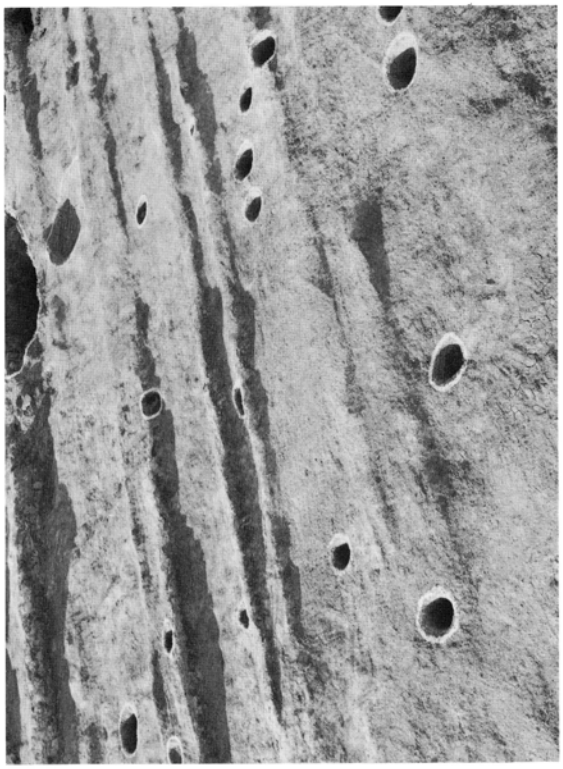
(2) SC41（南から）



(1) SB34（南東から）

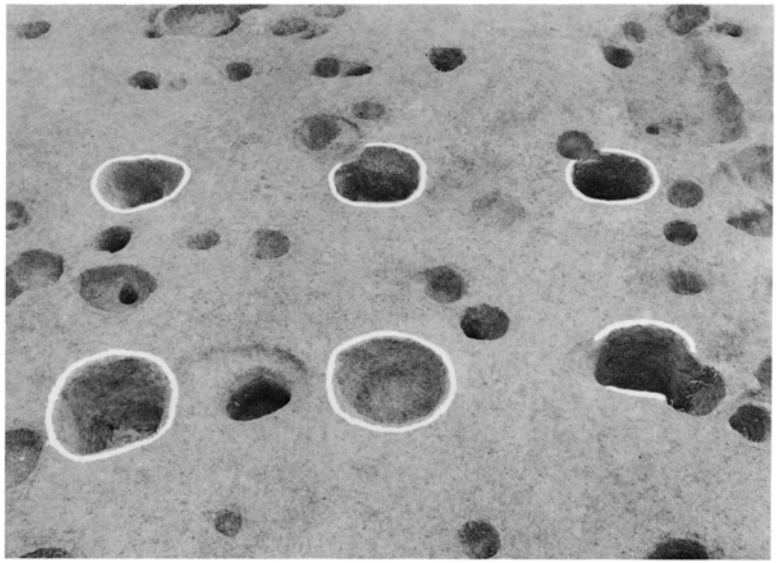


(2) SB48（南から）

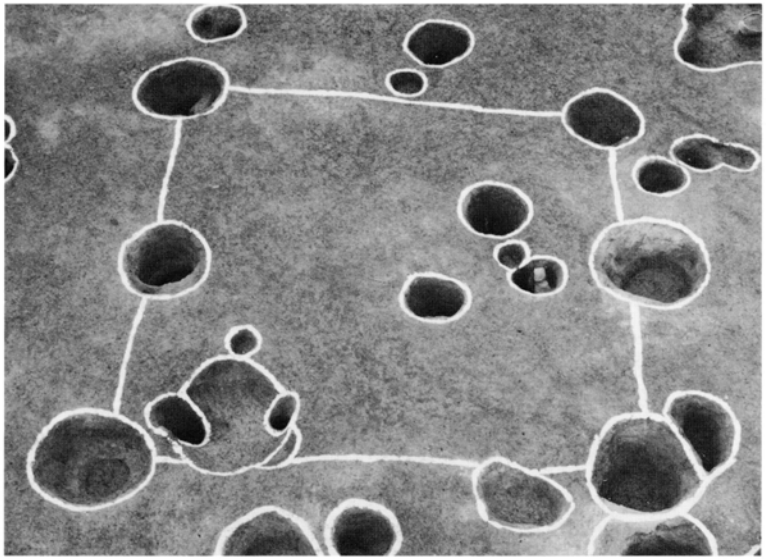


(3) SB59（南から）

(1) SB 60（北から）

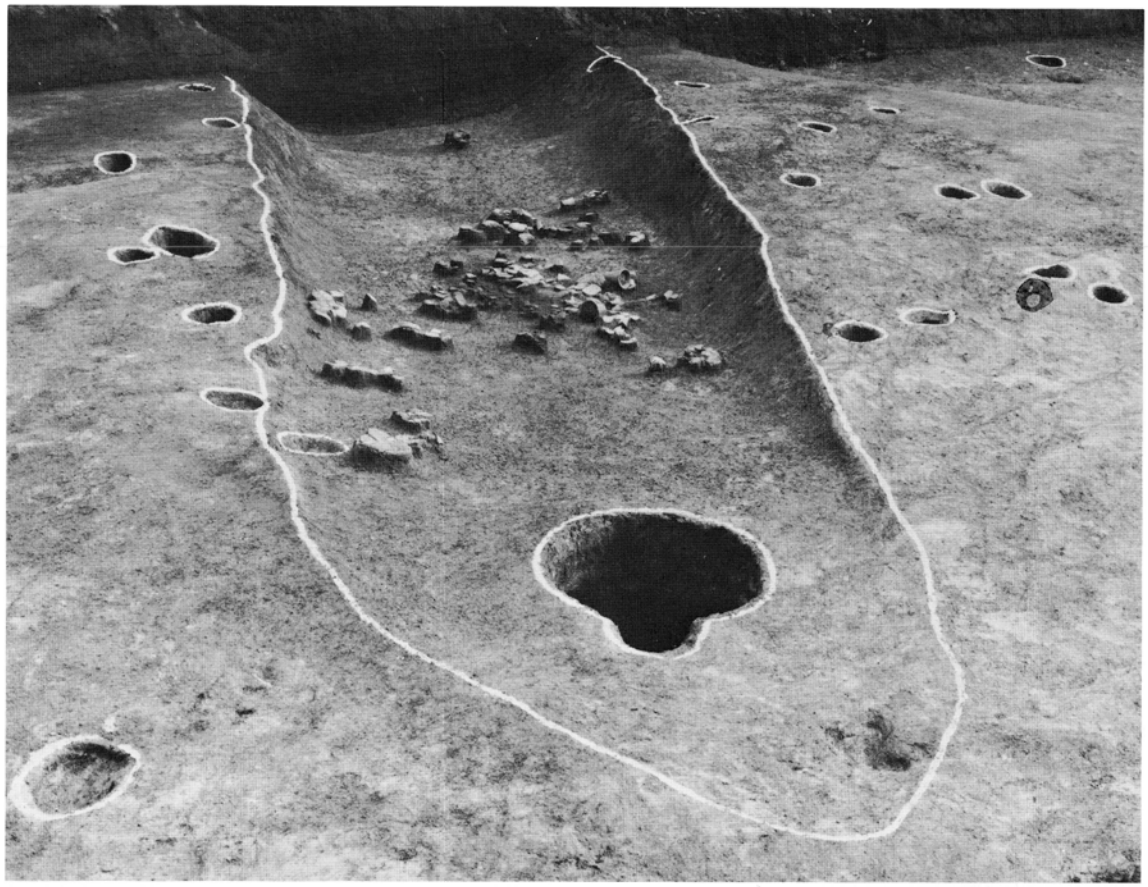


(2) SB 62（北から）

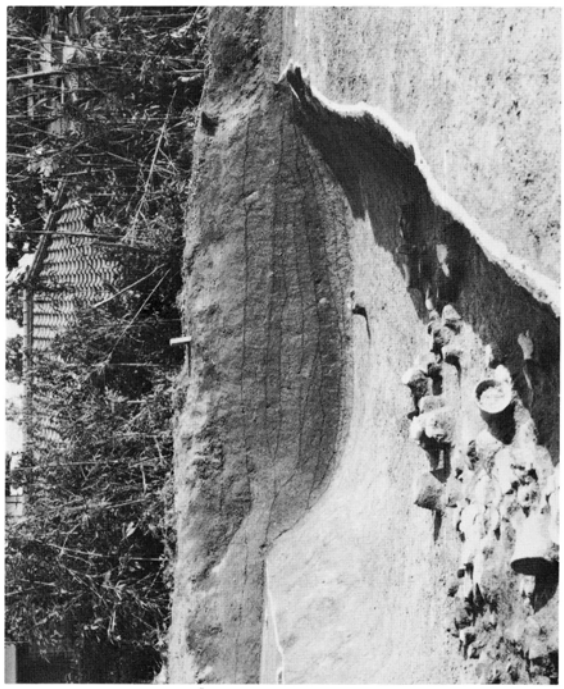


(3) SB 69（南東から）

(4) SD 01・02 2号ベルト土層（東から）



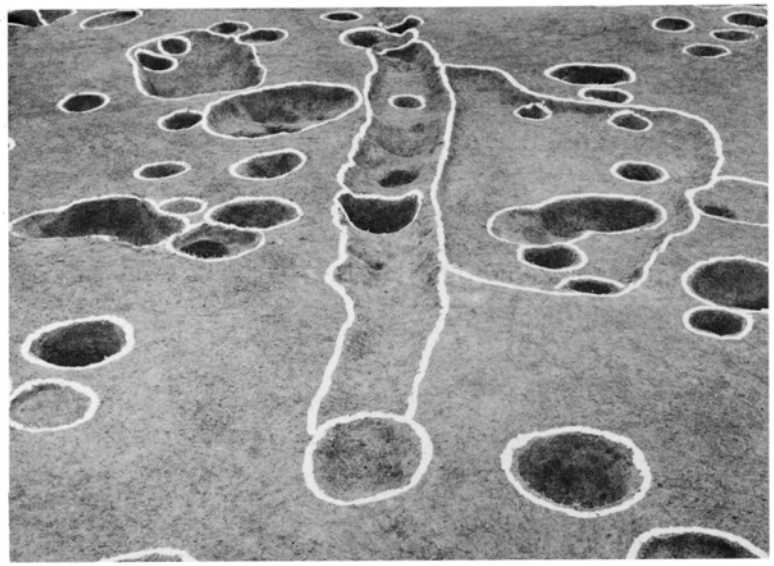
(1) SD03（北から）



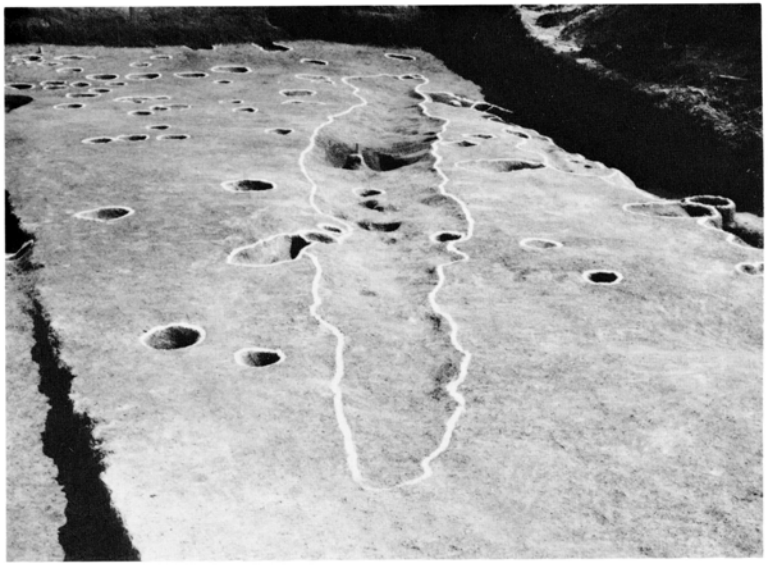
(2) SD03土層（西から）

(3) SD03遺物出土状況（南から）

(1) SD 08（東から）



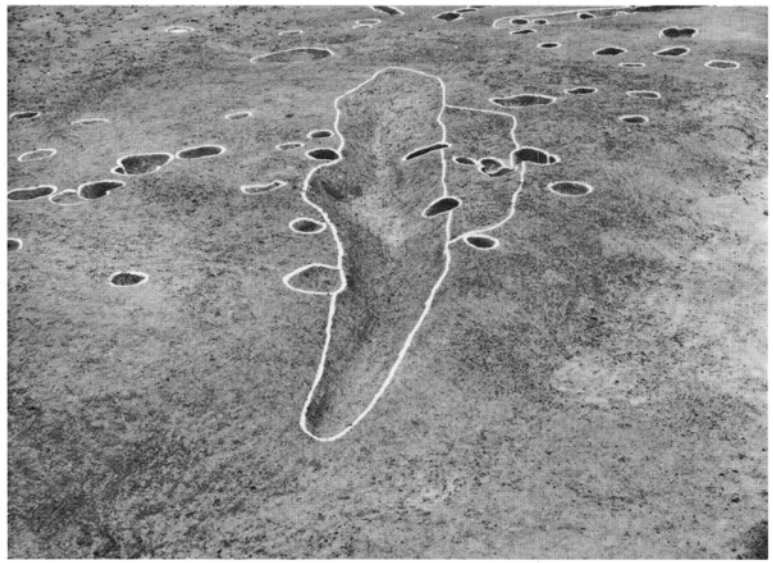
(2) SD 10（北東から）



(3) SD 19（北西から）

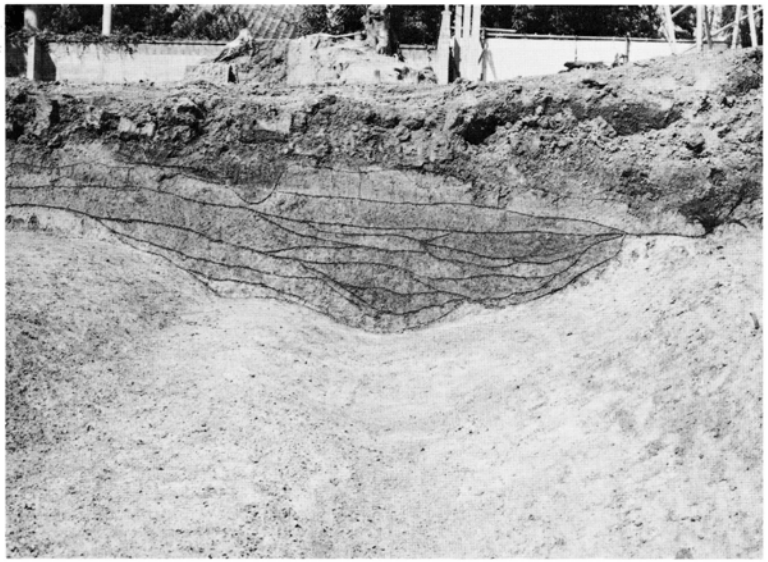
(4) SD 43（北西から）

(1) SD 21（西から）



(2) SD 32（西から）

SD 23（北西から）



(4) SD 23 北西壁土層（南東から）

(1) SR09（西から）

(2) 同遺物出土状況（北から）

(3) SR44（北東から）

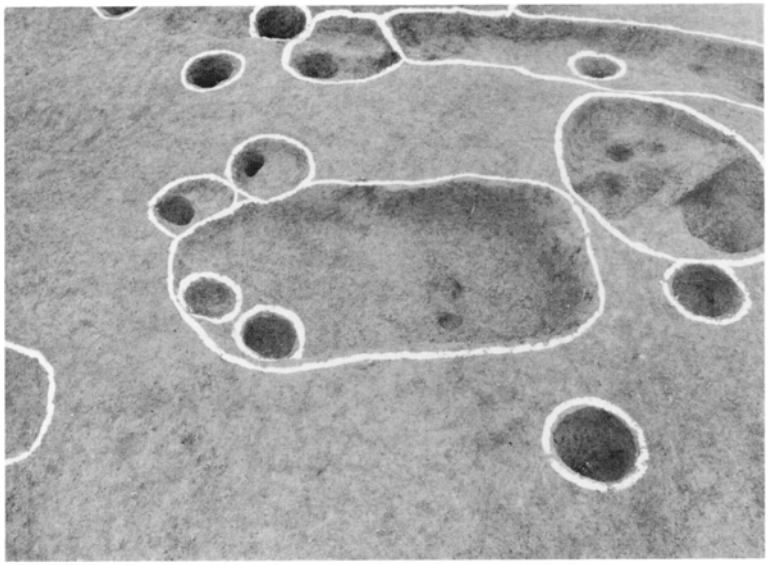
(4) 焼土坑SK45（東から）

(1) 焼土坑SK50（北から）

(2) SE05（南西から）

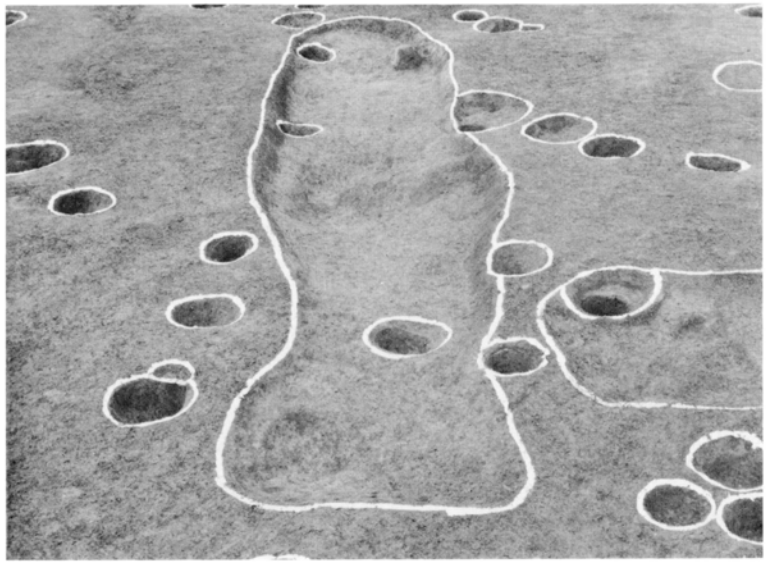
(3) SE07（東から）

(4) SE61（北東から）

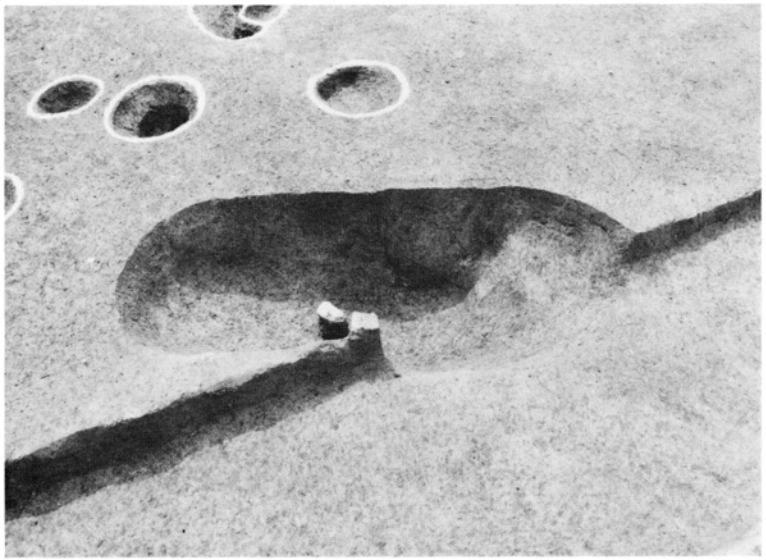


(1) SK11（南東から）

(2) SK18（北西から）

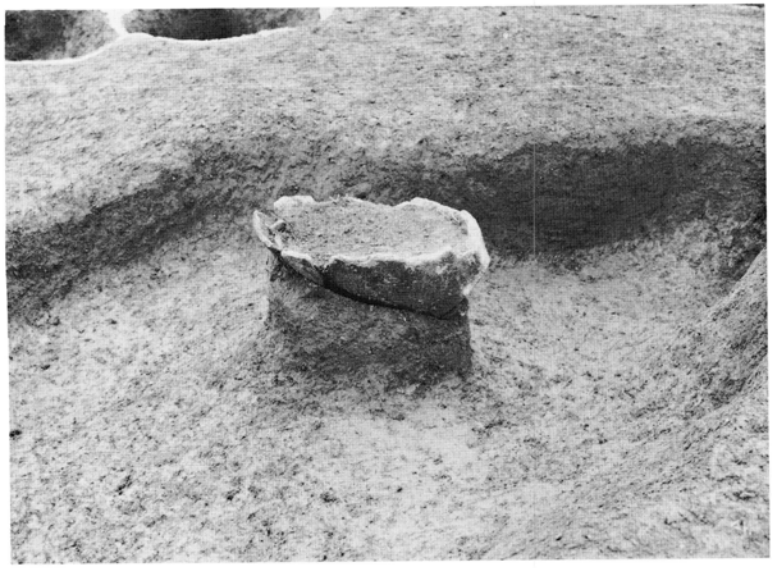


(3) SK17（南東から）

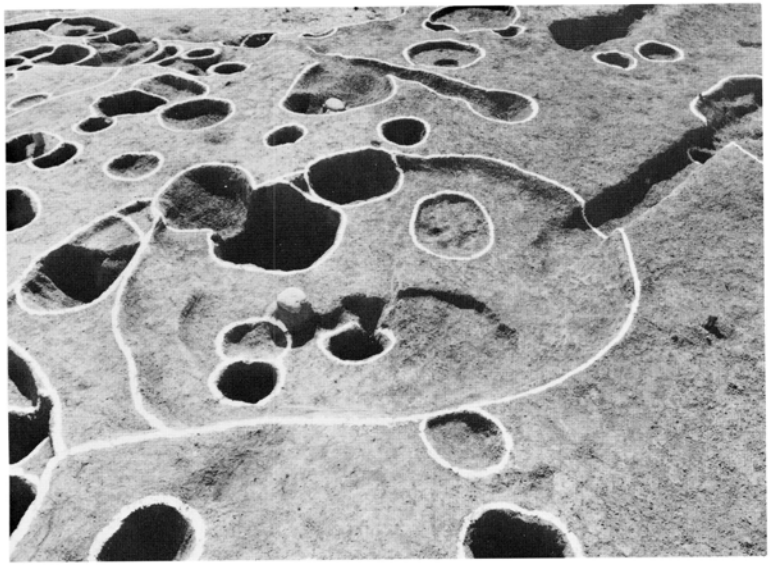


(4) SK20（北東から）

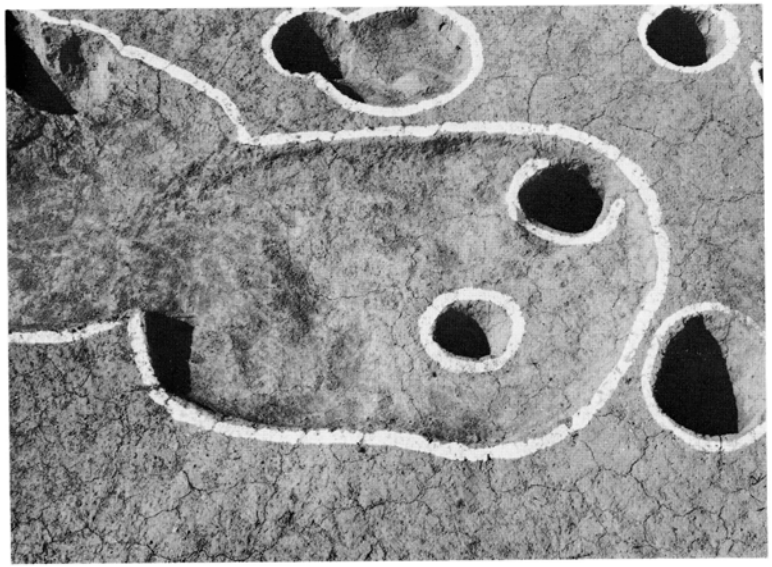
(1) SK33（東から）



(2) 同遺物出土状況（北東から）

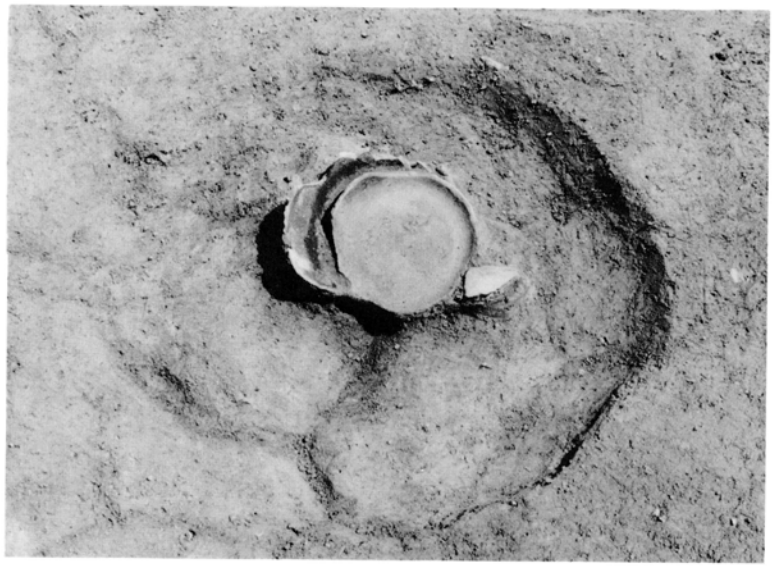


(3) SK38（南西から）

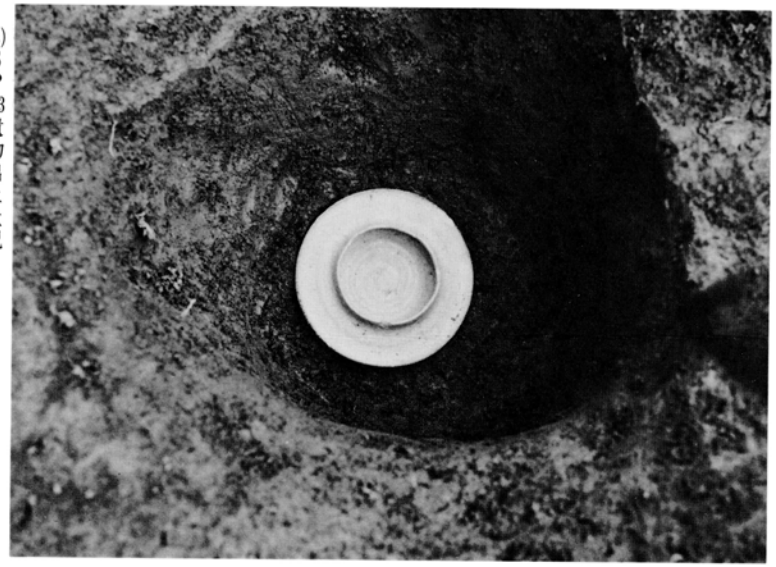


(4) SK40（南東から）

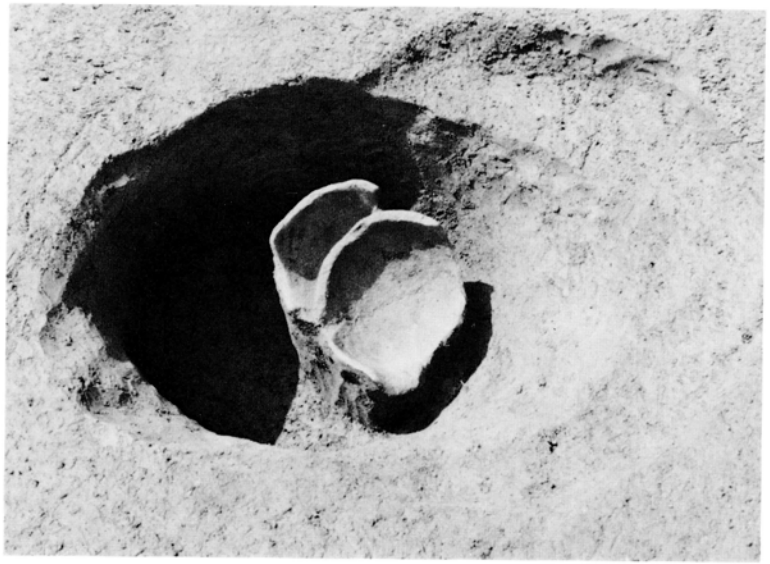
(1) SK51（西から）



(2) SP100遺物出土状況

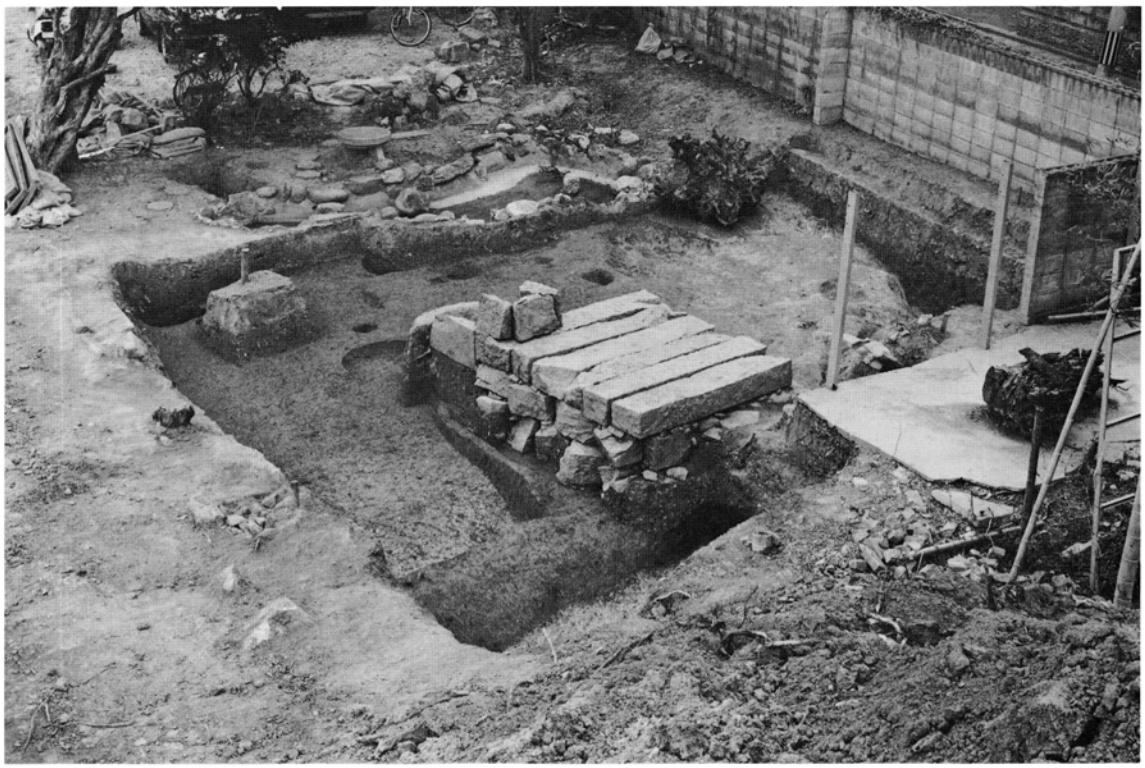


(3) SP183遺物出土状況



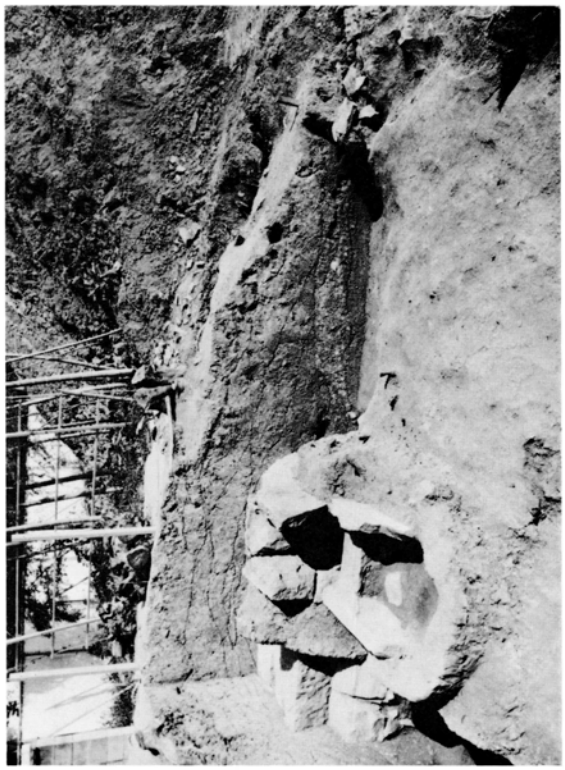
(4) SP212遺物出土状況

(1) 飯倉 6 号墳調査前全景（南から）

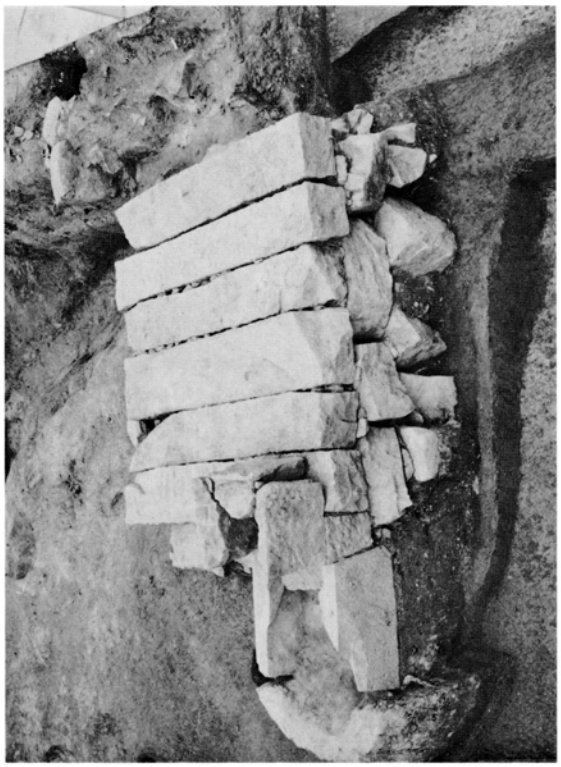


(2) 同墳丘除去後（北東から）

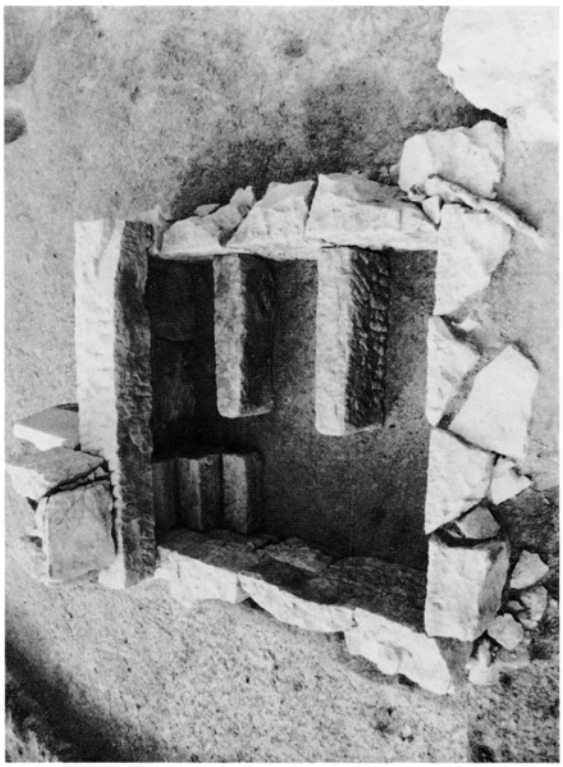
(1)入口部（南から）



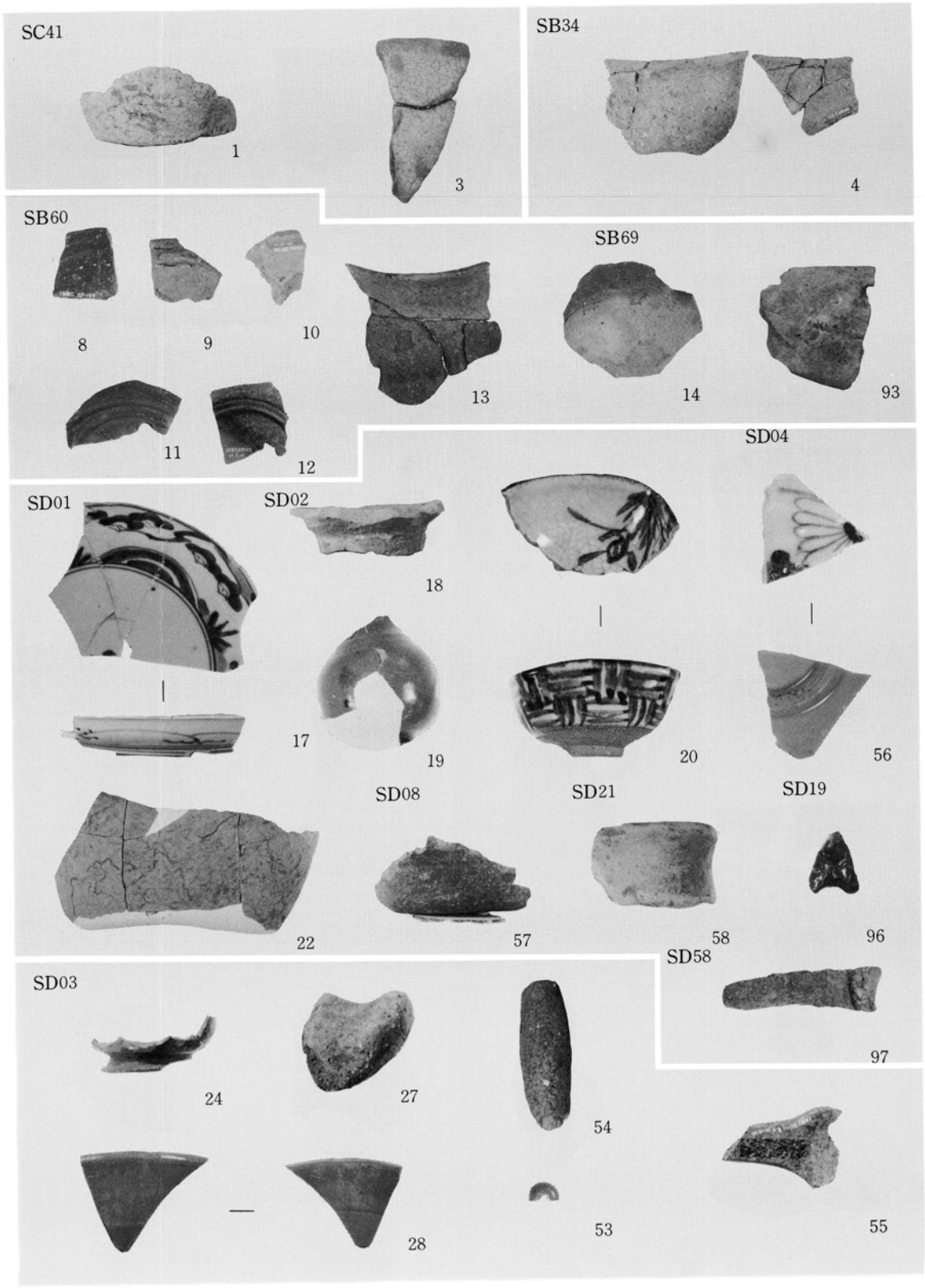
(2)盛土堆積状況



(3)石組全景（東から）

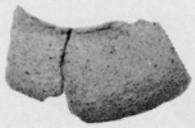


(4)天井石除去後

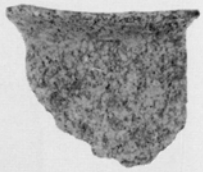

SC41
1
3
SB34
4
SB60
8
9
10
11
12
SB69
13
14
93
SD04
SD01
SD02
18
17
19
20
56
SD08
SD21
SD19
22
57
58
96
SD58
97
SD03
24
27
54
28
53
55

出土遺物Ⅰ

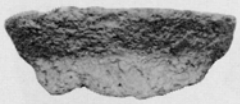
SD03

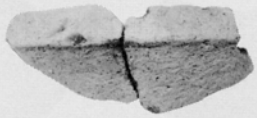

30

31


32

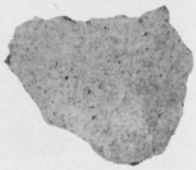
33


35


37

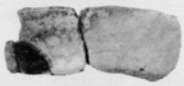
38

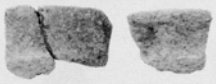
39


44

45

46


40

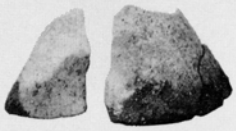

41

47

48

49

42


43

50

51

52

出土遺物Ⅲ

SE07

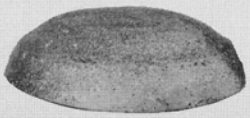
63

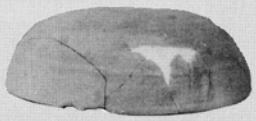
64

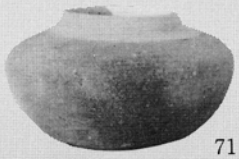
65

66

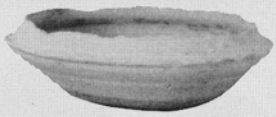
SR09

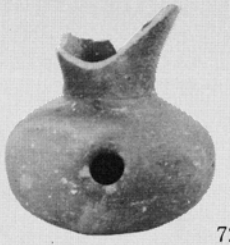

67

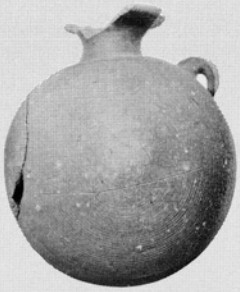

69


71

68


70


72



73

94

SR44

74

SK18

76

77

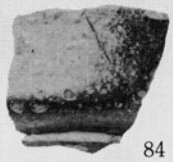
SK33

78

SK37

79

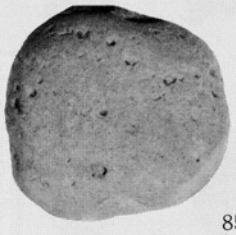
82


84

80

81

SK38


85

出土遺物Ⅲ

SK51

87

88

89

90

91

SP100

98

99

SP262

100

105

106

110

113

119

120

ピット出土

125

126

127

128

129

・遺構面

133

134

136

132

139

140

141

142

143

144

145

146

148

149

150

SX74

147

151

152

153

出土遺物Ⅳ

飯倉C遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第258集

1991年（平成3年） 3月15日

発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目8の1

印　刷　正光印刷株式会社